

2024年度 3月修了 修士論文

リーグワン上位チームにおける外国人選手の起用戦略

Strategies for the use of Foreigner players in the top
teams of League One

早稲田大学 大学院スポーツ科学研究科

スポーツ科学専攻 トップスポーツマネジメントコース

5024A310-6

仁木 啓裕

研究指導教員： 平田 竹男 教授

目次

第1章 背景.....	1
第1節 ジャパンラグビーリーグワン	1
第1項 リーグワンのリーグ構造	1
第2項 オープンリーグにおける人件費のマネジメント	2
第2節 ラグビーにおける外国人選手の登録制度、出場資格	3
第1項 各国代表資格制度	3
第2項 リーグワンの外国人登録・登用制度	3
第3節 リーグワンにおける外国人選手の獲得	4
第4節 日本のラグビーの現状	5
第1項 日本代表：台頭と残る課題	5
第2項 育成世代：早期離脱と高校生の二極化	6
第3項 課題と展望：外国人依存の現状と日本人育成の両立	6
第5節 世界のラグビー強豪国と日本代表の体格	7
第1項 PR、HO	7
第2項 SH、SO、FB	9
第3項 まとめ	12
第6節 筆者の立場と問題意識	13
第1項 筆者の立場	13
第2項 問題意識	13
第7節 先行研究	14
第8節 目的	14
第2章 方法.....	15
第1節 対象.....	15
第1項 分析対象期間およびデータ収集方法	15
第2項 ポジションに関するデータの扱い	15
第3項 選手の登録カテゴリ分類と定義	15
第2節 分析方法	16
第1項 外国人選手のポジション別在籍状況	16
第2項 外国人選手のスタメン起用状況の調査	16
第3項 B外国人およびC外国人の特徴の分析	17
第3章 結果.....	18
第1節 外国人選手(カテゴリB・C)のポジション別在籍状況の調査	18
第1項 全成績区分の外国人選手(カテゴリB・C)の在籍状況(表1)	18
第2項 D1上位の外国人選手(カテゴリB・C)の在籍状況	19

第3項	D1 中下位の外国人選手(カテゴリ B・C)の在籍状況.....	20
第4項	D2 上位の B 外国人・C 外国人のポジション別在籍状況.....	21
第5項	成績区分における B 外国人・C 外国人のポジション別在籍状況の比較....	21
第2節	外国人選手のスタメン起用状況の調査.....	22
第1項	3 シーズン全体の成績区分別のポジション別「主なカテゴリ」.....	22
第2項	23-24 シーズンのスタメン状況.....	26
第3項	22-23 シーズンのスタメン状況.....	29
第4項	21-22 シーズンのスタメン状況.....	31
第3節	D1 上位各チームのスタメン起用状況.....	34
第1項	3 シーズンスタメン起用状況.....	34
第2項	D1 上位チームにおける 23-24 シーズンのスタメン分析.....	38
第3項	D1 上位チームの 22-23 シーズンのスタメン起用状況.....	42
第4項	D1 上位各チームの 21-22 シーズンのスタメン起用状況.....	46
第3節	日本代表選手と所属チームの関連.....	50
第4節	B 外国人・C 外国人選手の特徴.....	51
第1項	B 外国人.....	51
第2項	C 外国人.....	52
第4章	考察.....	54
第1節	リーグワン外国人選手がスタメン起用されるポジション.....	54
第1項	B 外国人選手の起用ポジション.....	54
第2項	C 外国人選手の起用ポジション.....	56
第2節	B・C 外国人選手の役割と獲得方針.....	57
第1項	B 外国人選手の背景および役割と貢献.....	57
第2項	B 外国人選手の獲得方針.....	58
第3項	C 外国人選手の背景および役割と貢献.....	61
第4項	C 外国人選手の獲得方針.....	61
第3節	カテゴリ別の起用ポジションと役割.....	64
第1項	日本人.....	64
第2項	A 外国人.....	64
第3項	B 外国人.....	65
第4項	C 外国人.....	65
第5項	A・B・C のリソース配分とチーム戦略.....	65
第4節	D1 上位チームのスタメン起用の変化と日本人選手の育成.....	66
第5節	リーグワンの今後の展望.....	67
第1項	体格差を克服した日本人選手の登場.....	67
第2項	リーグとしての成長・発展.....	68

第 6 節 研究の限界と今後の展望.....	69
第 5 章 結論.....	70
謝辞	71
参考文献	72

表 1	選手獲得規準値案	12
表 2	21-22～23-24 シーズンの B 外国人・C 外国人のポジション別在籍状況	18
表 3	成績区分別 B・C 外国人の平均在籍人数(21-22～23-24)	19
表 4	D1 上位の B 外国人・C 外国人のポジション別在籍状況	19
表 5	D1 中下位の B 外国人・C 外国人のポジション別在籍状況	20
表 6	D2 上位の B 外国人・C 外国人のポジション別在籍状況	21
表 7	D1 上位・中下位・B2 上位の B 外国人・C 外国人のポジション別在籍状況	22
表 8	3 シーズン全体の成績区分別「主なカテゴリ」	23
表 9	全成績区分における 3 シーズンのカテゴリごとスタメン比率	23
表 10	D1 上位のカテゴリごとのスタメン比率(21-22～23-24)	24
表 11	D1 中下位のカテゴリごとのスタメン比率(21-22～23-24)	25
表 12	D2 上位のカテゴリごとのスタメン比率(21-22～23-24)	26
表 13	ポジション別主なカテゴリ(23-24)	27
表 14	カテゴリごとのスタメン比率(D1 上位： 23-24 シーズン)	27
表 15	カテゴリごとのスタメン比率(D1 中下位： 23-24 シーズン)	28
表 16	カテゴリごとのスタメン比率(D1 下位： 23-24 シーズン)	29
表 17	ポジション別「主なカテゴリ」(22-23)	29
表 18	カテゴリごとのスタメン比率(D1 上位： 22-23 シーズン)	30
表 19	カテゴリごとのスタメン比率(D1 中下位： 22-23 シーズン)	30
表 20	カテゴリごとのスタメン比率(D2 上位： 22-23 シーズン)	31
表 21	ポジション別「主なカテゴリ」(21-22)	32
表 22	カテゴリごとのスタメン比率(D1 上位： 21-22 シーズン)	32
表 23	カテゴリごとのスタメン比率(D1 中下位： 21-22 シーズン)	33
表 24	カテゴリごとのスタメン比率(D2 上位： 21-22 シーズン)	33
表 25	カテゴリごとのスタメン比率(東芝：21-22～23-24 シーズン)	34
表 26	カテゴリごとのスタメン比率(パナソニック：21-22～23-24 シーズン)	35
表 27	カテゴリごとのスタメン比率(サントリー：21-22～23-24 シーズン)	36
表 28	カテゴリごとのスタメン比率(キャノン：21-22～23-24 シーズン)	36
表 29	カテゴリごとのスタメン比率(コベルコ：21-22～23-24 シーズン)	37
表 30	カテゴリごとのスタメン比率(クボタ：21-22～23-24 シーズン)	38
表 31	カテゴリごとのスタメン比率(東芝：23-24 シーズン)	39
表 32	カテゴリごとのスタメン比率(パナソニック：23-24 シーズン)	39
表 33	カテゴリごとのスタメン比率(サントリー：23-24 シーズン)	40
表 34	カテゴリごとのスタメン比率(キャノン：23-24 シーズン)	41
表 35	カテゴリごとのスタメン比率(コベルコ：23-24 シーズン)	41
表 36	カテゴリごとのスタメン比率(クボタ 23-24 シーズン)	42

表 37	カテゴリごとのスタメン比率(東芝：22-23 シーズン)	43
表 38	カテゴリごとのスタメン比率(パナソニック：22-23 シーズン).....	43
表 39	カテゴリごとのスタメン比率(サントリー：22-23 シーズン)	44
表 40	カテゴリごとのスタメン比率(キャノン：22-23 シーズン).....	45
表 41	カテゴリごとのスタメン比率(コベルコ：22-23 シーズン).....	45
表 42	カテゴリごとのスタメン比率(クボタ：22-23 シーズン).....	46
表 43	カテゴリごとのスタメン比率(東芝：21-22 シーズン)	47
表 44	カテゴリごとのスタメン比率(パナソニック：21-22 シーズン).....	47
表 45	カテゴリごとのスタメン比率(サントリー：21-22 シーズン)	48
表 46	カテゴリごとのスタメン比率(キャノン：21-22 シーズン).....	49
表 47	カテゴリごとのスタメン比率(コベルコ：21-22 シーズン).....	49
表 48	カテゴリごとのスタメン比率(クボタ：21-22 シーズン).....	50
表 49	日本代表外国人選手（カテゴリーA）の出場状況	51
表 50	B 外国人（ロック）の獲得経路.....	51
表 51	カテゴリ別スタメン経験者.....	52
表 52	LO 身長分布.....	52
表 53	カテゴリ C 調査	52
表 54	センターでスタメン経験のある C 外国人の経歴.....	53

第1章 背景

第1節 ジャパンラグビーリーグワン

ジャパンラグビーリーグワン（以下、リーグワン）は、日本ラグビーの競技レベルを向上させるとともに、世界最高峰のラグビーリーグを目指すことを目的に、2021年に設立された。設立の背景には、2019年に開催されたラグビーワールドカップ日本大会の成功がある。同大会では日本代表が史上初のベスト8進出を果たし、国内外でラグビー人気が急速に高まった。この成功を契機に、国内ラグビーのさらなる成長を促進し、持続可能なプロフェッショナルリーグを構築する必要性が高まったことがリーグワン発足の経緯となった。

リーグワンの設立に際しては、前身であるトップリーグからの大きな転換が図られた。まずトップリーグでは、チームが親会社の予算の範囲内で活動する「企業スポーツ」の色彩が濃く、競技そのものが企業の広告活動の一環とみなされるケースが多かった。一方で、リーグワンは「脱企業スポーツ」を掲げ、「ホストシティ」を基軸とした地域密着型の運営を推進している。各チームは特定のホストシティを持ち、その地域コミュニティとの連携を強化している。これにより、企業スポーツであれば社員の満足度が重視されるが、地域住民を含む幅広い観客層を対象とした集客活動が求められるようになった。具体的には、地域イベントの開催や地元企業とのパートナーシップ強化、学校訪問による普及活動などが挙げられる。

また、経営に関しても、一部のクラブでは分社化が進み、親会社の予算に依存しない自立した経営を実現するための取り組みが行われ始めている。従って、各チームはプロスポーツクラブとして、スポンサーの獲得や試合を「興行」として捉えた事業化に取り組む必要が生じた。これにより、試合運営や観客動員を含めた収益構造の確立が重要課題となっている。同時に収入だけでなく、コスト面での管理も重要である。特に、ラグビーは他のスポーツと比べても選手の人数が多く、人件費の管理が経営上の大きな課題となっている。選手の人件費がチーム運営の大部分を占めるため、収益の確保だけでなく効率的な人員配置や支出の管理が求められている。これにより、各チームは収益性を重視しつつも、効率的な経営を実現するための施策を進めている。このような課題は、プロ野球やJリーグといった他のプロスポーツと共通するものであり、リーグワンがプロフェッショナルリーグとして確立していく過程で解決が求められる重要なテーマである。

第1項 リーグワンのリーグ構造

ジャパンラグビーリーグワン（以下、リーグワン）は、ディビジョン1（D1）、ディビジョン2（D2）、ディビジョン3（D3）の3つのディビジョンに分かれており、2024-25シーズン時点での所属チーム数は、D1が12チーム、D2が8チーム、D3が6チームの

計 26 チームである。

リーグワンには昇降格制度が設けられており、シーズン終了後に各ディビジョン間でチームの入れ替えが行われる。D1 の下位チームは D2 の上位チームとの昇降格戦に臨み、D2 の下位チームは D3 の上位チームと同様の戦いを行う。この制度により、下位ディビジョンのチームにも上位進出のチャンスが与えられ、リーグ全体の競争が活性化している。また、昇降格戦はシーズン終盤におけるファンやメディアの注目を集める重要なイベントであり、競技面だけでなく興行面でもリーグの魅力を高める役割を果たしている。

D2 や D3 のクラブが D1 昇格を目指す場合、競技力向上だけでなく、効率的な経営が求められる。D1 クラブと比較すると、予算規模や選手層に差があるため、限られたリソースを最大限に活用しながらチーム強化を進める必要がある。一方で、D1 中下位のクラブが優勝を目指す際にも、さらなる選手強化や組織改革が求められる。特に、上位クラブとの競争力の差を埋めるためには、選手層の厚みを確保しつつ、戦術の多様化や選手ローテーションの工夫が必要となる。

このように、リーグワンの 3 部構成と昇降格制度は、競技力向上とクラブの成長を目指した仕組みであり、全クラブに成長の機会を提供している。D2 や D3 のクラブが D1 昇格を目指す過程、そして D1 中下位のクラブが優勝を目指す挑戦は、リーグ全体の競争を促進し、ファンの期待を高めるとともに、日本ラグビー界の活性化に寄与している。

第 2 項 オープンリーグにおける人件費のマネジメント

昇降格制度を採用した「オープンリーグ」としてのリーグワンでは、クラブが昇格や上位入賞を目指す際に、人件費のマネジメントが非常に重要となる。Noll (2002)によれば、昇降格制度が存在するリーグでは、クラブの財務的リスクが高まると同時に、競争力を維持するための戦略的投資が求められる。特に、昇降格がクラブの収益構造に与える影響は大きく、上位ディビジョンへの昇格が成功すれば収入が大幅に増加する一方で、失敗した場合には投資が回収できないリスクも高まる。これにより、クラブ経営においては、選手の年俸管理やコスト構造の最適化が極めて重要な課題となる。

さらに、Jasina & Rotthoff (2009)は、昇降格制度がチームの競技力と経済的パフォーマンスの両方に直接的な影響を与えると指摘している。具体的には、クラブは昇格や上位進出を目指して人材への投資を増やす傾向があるが、こうした投資は短期的には競技力向上に寄与するものの、長期的には経営リスクを増大させる可能性があるとする。また、昇降格戦での勝利はクラブの収益やファンの支持を大きく向上させるが、そのためには選手層の強化やコーチングスタッフの充実といった、追加的な投資が求められる。これらの要因は、クラブが限られた予算内でいかに効率的にリソースを配分するかが、成功の鍵を握ることを示している。

これらの先行研究は、昇降格制度がスポーツリーグの競争を促進する一方で、クラブの経営において人件費の管理が中心的な役割を果たすことを明らかにしている。リーグワンにおいても、D2 や D3 のクラブが D1 昇格を目指す場合、予算規模や選手層の限界に直面

する。限られたリソースを最大限に活用するためには、選手の年俸管理やスカウティングの強化、若手選手の育成を通じたチーム力の向上が求められる。また、D1 中下位クラブが優勝を目指す場合にも、人件費の効率的な配分は、上位クラブとの競争力を維持するための重要な戦略となる。

このように、リーグワンの3部構成と昇降格制度は、競技力向上とクラブの成長を促す重要な仕組みである。しかし、昇格や上位進出を目指すクラブにとっては、人件費の管理と効率的なリソース配分が経営の成否を左右する重要な課題となっている。

第2節 ラグビーにおける外国人選手の登録制度、出場資格

第1項 各国代表資格制度

ラグビーでは、他の多くのスポーツと異なり、その国の国籍を持たない選手であっても一定の条件を満たすことでナショナルチームの一員としてプレーする資格を得る。この代表資格は、ワールドラグビー（World Rugby）が定めた統一ルールに基づき、以下の条件のいずれかを満たす必要がある。（日本ラグビー協会, n.d.）

- ・ 該当国で出生している場合。
- ・ 両親または祖父母のうち1人が該当国で出生している場合。
- ・ 継続して該当国に60か月間（5年間）居住している場合。
（この居住要件は2022年に従来の36か月（3年間）から延長された。）
- ・ 累積で10年間該当国に居住している場合。

ラグビー日本代表においても、この資格制度を通じて多くの外国籍選手が代表としてプレーしてきた。例えば、リーチ・マイケル選手はニュージーランド出身でありながら、15歳の時に来日し、日本国内での長期間の居住を経て日本代表資格を取得した。彼は2019年ラグビーワールドカップで日本代表キャプテンを務め、チームを史上初のベスト8に導く原動力となった。また、南アフリカ出身のラファエレ・ティモシー選手、ニュージーランド出身のトニー・ブラウン選手（元選手・現コーチ）など、国際経験豊富な選手が多く在籍している。

これらの外国籍選手は、日本ラグビー界に多様性と国際的な視点をもたらすとともに、国内選手にとっても技術や戦術を学ぶ貴重な機会を提供している。特に「ブライトンの奇跡」と言われた2015年の南アフリカ戦や2019年大会での活躍は、外国籍選手の貢献が日本代表の競技力を大きく向上させた象徴的な事例である。

第2項 リーグワンの外国人登録・登用制度

ラグビーの代表資格制度を踏まえ、ジャパンラグビーリーグワン（以下、リーグワン）

は、外国人選手の起用に関して独自の制度を整備している。リーグワンでは、選手をカテゴリ A、カテゴリ B、カテゴリ C の 3 区分に分類し、それぞれに異なる役割と出場制限を設けている。とくに 2024 年 8 月からのワールドラグビー新規程（Rugby Residency）導入を受け、リーグワン側でも「代表資格を持つ／将来取得可能な」選手の登録要件が改訂された点が特徴的である。

カテゴリ A は、日本代表資格を有する選手であり、試合時に出場制限が課されない。従来は居住日数に基づく判定であったが、新規程では「48 か月以上連続して日本ラグビーフットボール協会に登録」というリーグワン独自の基準が明確化されている。こうした選手はリーチ・マイケルのように国内選手同様に起用でき、日本代表の競技力向上にも直結する存在となる。

カテゴリ B は、将来的に日本代表資格を得る可能性を残す選手である。ワールドラグビーの新ルールでは 60 か月の国内連続登録が代表資格判断の軸となるため、B 外国人が同期間を満たすと A 外国人へ移行できる。ここでは短期的な戦力補強だけでなく、「国内での継続登録を通じて、将来の代表候補を育成する」意義が大きい。

他国代表歴を持つカテゴリ C は、新ルール下でも代表資格を取得する余地はなく、国際的な実績や経験をリーグに還元する役割を担う。C 外国人は国内選手に高度な戦術や対人スキルを伝授する一方、リーグワンでは B・C 合算で 1 試合最大 4 人までしか出場できない制限が維持されている。これにより、外国人選手への過度な依存を抑えつつ、国内選手の育成機会を確保するバランスが図られている。

このように、リーグワンの外国人制度は新たな代表資格要件との連動により一部改訂が行われたが、根幹は「A で出場無制限／B・C は将来性や国際経験をもたらす枠」とする構造を維持している。外国人の即戦力性を活かしながら国内選手の成長を促す枠組みとして、リーグ全体の競技力を底上げする役割を今後も担うことが期待される。

第 3 節 リーグワンにおける外国人選手の獲得

外国人選手の起用は、競技力の向上に重要な役割を果たす一方で、チーム経営に大きな影響を及ぼす要素でもある。外国人選手への支払いには年俸だけでなく、通訳や住居の手配、家族帯同時のサポートなど多岐にわたるコストが含まれ、獲得のプロセスそのものもリスクを伴う。とりわけ、リーグワンの「カテゴリ A・B・C」区分に基づき、選手がどのカテゴリに属するかでクラブの補強戦略や財務リスクが大きく変わる。

まず、A 外国人選手はすでに日本代表資格を持ち、リーグワン独自の登録要件（48 か月以上継続登録など）をクリアしているケースが多い。こうした選手は日本でのプレー経験や文化・生活への適応が十分に進んでおり、性格やパフォーマンスを事前に把握しやすい。国内選手と同様に試合出場枠の制限がなく、クラブにとってリスクが低いうえ、代表強化にも直結するというメリットを持つ。

一方で、B 外国人と C 外国人を獲得する場合、クラブが抱えるリスクと不確定要素は格段に増す。B 外国人は今後日本代表資格を得る可能性を持つ選手とされるが、改訂された

ワールドラグビーの代表規定により「60 か月の継続登録」といった要件を満たす必要がある。リーグワンの制度では A 枠へ移行するために 48 か月以上の継続登録が求められるものの、実際には海外クラブとの掛け持ちや長期離脱があると、登録要件を満たせず A 外国人への移行が困難となる。よって、B 外国人を長期プロジェクトとして迎え入れるには、選手本人が日本でのキャリアを真剣に考えているかどうか、クラブが環境面で継続支援でできるかが極めて重要となる。

C 外国人は他国代表歴を持つ即戦力候補であり、国際的な実績や知名度が高いケースが多い。南半球や欧州の強豪国から選手を獲得する際は、契約金や年俸が跳ね上がり、もし競技適応や負傷で成果を出せなかった場合、クラブが財政面で大きな打撃を受けるリスクがある。さらに、C 外国人が短期間で退団したり、思うようなパフォーマンスを発揮できない場合、その穴を埋めるために追加のスカウト活動が必要になるなど、クラブ経営への負荷が一層高まる。

優れた外国人選手を確保するためには、代理人や海外クラブとの関係構築、正確なスカウト活動が欠かせない。C 外国人のように即戦力を求める場合には、スカウトが現地での試合を直接視察し、怪我歴や性格を含めた総合的な評価を行うことが重要である。B 外国人を迎える場合には、クラブ側が長期的な住環境・言語サポートを整え、代表資格取得に必要な継続登録を維持できるように配慮する必要がある。いずれの場合も、獲得が成功すれば観客動員やスポンサー収入の増大といった経営的メリットを享受できるが、失敗すれば高額な投資が回収できず、財務負担となる。

このように、クラブが A 外国人を確保するのか、B 外国人を育成するのか、あるいは C 外国人を即戦力として呼び寄せるのかは、競技力と経営面の両立を模索するうえでの主要戦略となる。改訂された代表資格要件（継続登録を基準とする「Rugby Residency」概念や国外滞在日数の撤廃）により、B 外国人の A 枠移行がやや柔軟化する一方、実際に長期間プレーし続けられるかどうかは選手とクラブ双方の意向・環境に左右される。クラブがこうした制度やリスクを理解し、スカウトや代理人との連携を強化することで、外国人選手の活用から得られる成果を最大化しつつ、日本ラグビー全体の発展にも貢献し得ると言える。

第 4 節 日本のラグビーの現状

第 1 項 日本代表：台頭と残る課題

近年の日本代表は、2015 年にワールドカップ（W 杯）優勝国の南アフリカに勝利、2019 年ワールドカップ（W 杯）においてベスト 8 進出を果たし、大きな国際的注目を集めるまでに成長した。かつては外国人選手が主力とみなされがちだったフロントロー（PR・HO）やスクラムハーフ（SH）といったポジションにも、日本人選手が台頭し始め、世界の強豪国と互角に渡り合う場面が増えている。

一方で、ロック（LO）やナンバーエイト（NO8）など、高い身長や高いパワーを求め

られるポジションでは、いまだに外国人選手への依存度が相対的に高い。特に2 m級の身体能力は国内選手の層が薄く、トップレベルの試合経験を持つC外国人が不可欠とされるケースが多い。日本代表が今後さらに安定して決勝トーナメントに進み、世界上位の常連となるためには、クラブレベルでの育成と合わせて「大型選手の国内輩出」を強化する必要がある。

第2項 育成世代：早期離脱と高校生の二極化

日本国内のジュニア層（中学・高校世代）では、早期段階でラグビーを離れる例が依然として顕著である。特に、高い身長や体格を持つ選手がバスケットボールやバレーボールなど他競技へ転向するケースが多く、ラグビー部そのものが存在しない高校への進学が要因となることも少なくない。こうした背景には、「部活以外にも継続できるクラブやアカデミー」が十分に整備されていない現状がある。

さらに、高校ラグビーにおいては、過去20年ほどで部員数が半減に近い落ち込みを示す地域もあり、強豪校への選手集中が進行する一方で、単独チームの編成が難しい学校が増えている。部員が集まらず合同チームで大会に出場する状況は、「一部の強豪校とその他」の二極化を加速させる要因となっている。こうした構造では、潜在的に高い身体能力を持つ若年層がラグビーを選択しづらく、早期に離脱してしまうリスクが高まり、国内選手の厚みをつくるうえで深刻な課題となっている。

第3項 課題と展望：外国人依存の現状と日本人育成の両立

リーグワンは設立から3シーズンを経て、世界のトップクラス選手（C外国人）を呼び込むことで、競技力と注目度を急激に向上させることに成功してきた。かつて日本代表がそうであったように、外国人選手の活用は短期間での勝利と人気拡大に非常に有効である。しかしながら、外国人スターを多数確保するには人件費の大幅な増加を伴うため、クラブ経営の観点からも負担が大きくなる懸念がある。

一方、バスケットボールやサッカーJリーグの事例が示すように、長期的には国内選手がチームの主軸となり、代表や海外リーグに選手を輩出する形がリーグ全体のブランド価値を高め、経営的な安定にも寄与する。もし中学・高校年代の早期離脱を食い止め、アカデミーや地域クラブを通じて2 m級のロックや高いスキルを持つバックスを国内で継続的に育成できれば、日本代表のさらなる強化とともに、リーグワンが“日本人主体でも国際水準に到達できる”持続的モデルへ移行しやすくなる。

総じて、現時点のリーグワンでは外国人選手への依存が“当面の最適解”として機能しているが、将来的には日本人選手の育成に注力することで、人件費抑制や代表レベルの厚みづくりが同時に進められる可能性がある。外国人選手に頼らなくても高度なラグビーを展開できる環境を築くためには、普及活動や育成システムの整備を並行して推進し、「ラグ

ビーをやめずに続けられる社会的インフラ」を確立することが今後の鍵となるであろう。

第5節 世界のラグビー強豪国と日本代表の体格

ラグビーはポジションごとに求められる身体条件や役割が大きく異なるスポーツである。これは他競技にはない特徴ともいえる。そのため日本代表チームにおいても選手登録のルールを用いながら、大柄な選手が必要なポジションでは外国籍選手を起用するなどの工夫をしながら強化し、ワールドカップでの決勝リーグ進出などの成果を上げている。

一方で、大柄な外国人選手にたよっていると思われがちなポジションであっても、日本代表チームでは日本人選手が近年は起用されるようになってきている。具体的には日本代表選手は、プロップ(PR)、スクラムハーフ(SH)およびスタンドオフ(SO) フルバック(FB)で、PR は外国人選手が登録されていたが、2024 年にはスタメンおよびリザーブを含め、日本人選手のみが起用されていた。また、SH および SO は2021 年以降、継続的に日本人選手がスタメン・リザーブのいずれも登録され、FB も 2024 年には日本人選手がすべての枠を占めていた。このように強化が進むことで、外国人選手起用が必須ではない将来も考えられるようになってきた。

ラグビー日本代表の実績を踏えると、PR (1 番・3 番)、HO (2 番)、SH (9 番)、SO (10 番)、FB (15 番) のポジションは、比較的日本人選手が主力を担い活躍しやすいといえる。一方で、スクラムやラインアウトにおけるサイズの優位性を求められる LO (ロック)、スクラム後方から突進力を発揮する No.8 (ナンバーエイト)、相手ディフェンスをこじ開けるパワーランが要求される CTB (センター) といった外国人のなかでも大柄な体格の起用が必要となる。リーグワンに所属する外国人選手は他国の代表選手経験者や他国のリーグ経験者が一定数在籍していることをふまえると、どのような体格の選手を獲得していくことがチームの強化につながるかについて、検討することは一定の意義があると考ええる。

以上を考慮し、本節では、PR (1 番・3 番)、HO (2 番)、SH (9 番)、SO (10 番)、FB (15 番) の各ポジションで世界の強豪国ではどのような体格の選手がプレーしているのかについて、世界ランキング上位 5 か国と 6～10 位の平均値、11 位から 15 位の平均値と日本代表の体格の現状を本節では整理した。

第1項 PR、HO

プロップの身長は 2015 年大会時の日本代表選手は世界の強豪国に大きく劣っていた。しかしながら、2024 大会では南アフリカを上回る身長となっていた (図 1)。一方で、体重は世界に比べて日本代表はまだまだ軽い。世界の強豪国をみると 3 大会で体重を増やしている国と減らしている国があった (図 2)。

リーグワン PR の平均身長は全体が 182cm、外国人選手の平均は 186cm、日本人選手の平均は 178cm で、平均体重は全体が 115 kg、外国人選手は平均 119kg、日本人選手は平均 111kg であった。

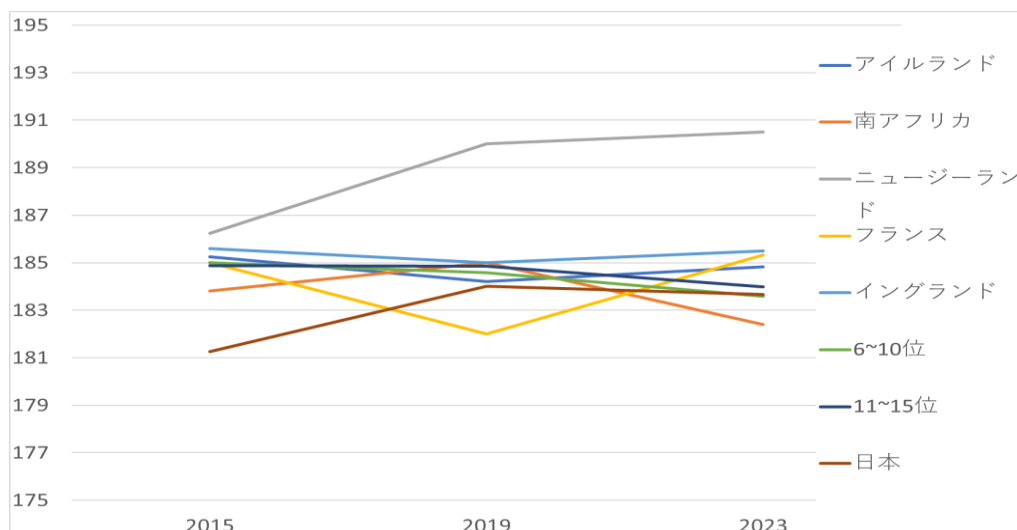


図 1 PR の身長比較

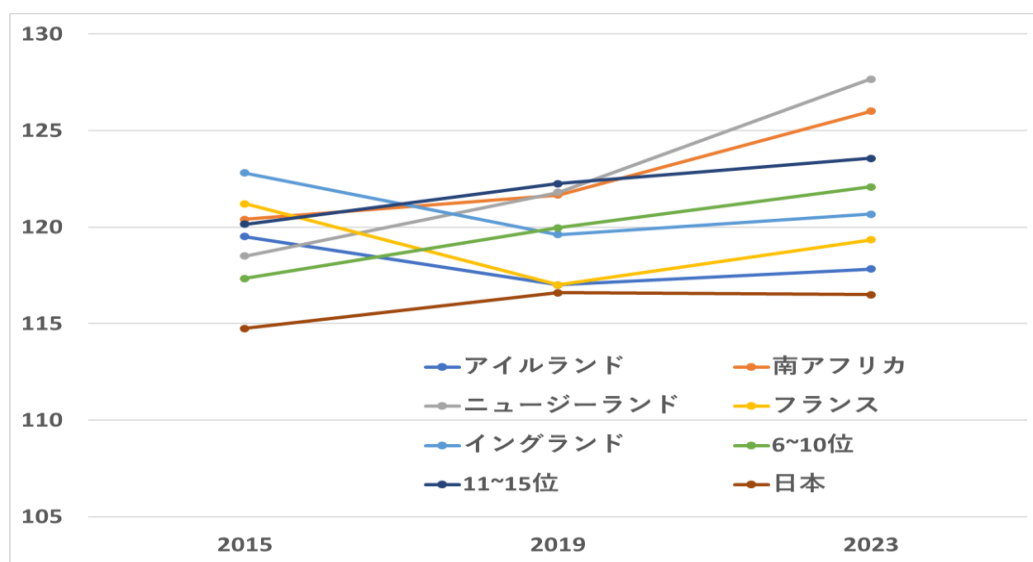


図 2 PR の体重比較

HO の日本代表選手は他の強豪国に比べて、身長は低いですが、南アフリカは日本よりも低身長の選手起用でありながら強いことを考えると、日本人であっても十分賄えるポジションであるとも推察できる（図3）。一方で、南アフリカ選手の体重は他国に比べて大きく上回っていた。逆に日本は身長の減少に比べて体重減少が大きい（図4）。重量級の選手が必要なポジションであることをふまえると、いかに体重を増やしていくかという課題が日本にはあることが分かった。

リーグワン HO の平均身長は全体が 179cm、外国人選手の平均は 183cm、日本人選手の平均は 175cm で、平均体重は全体が 106 kg、外国人選手は平均 111kg、日本人選手は平均 101kg であった。

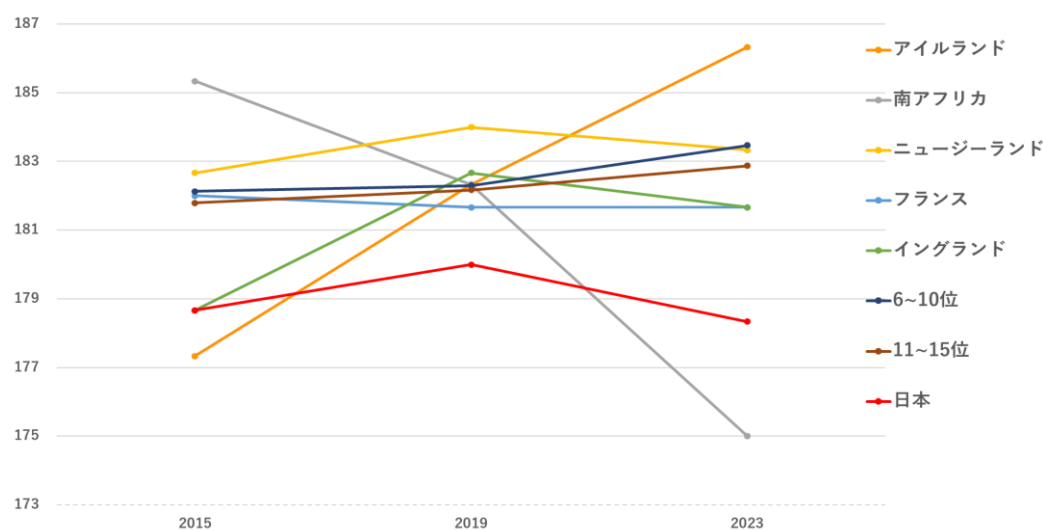


図 3 HO の身長比較

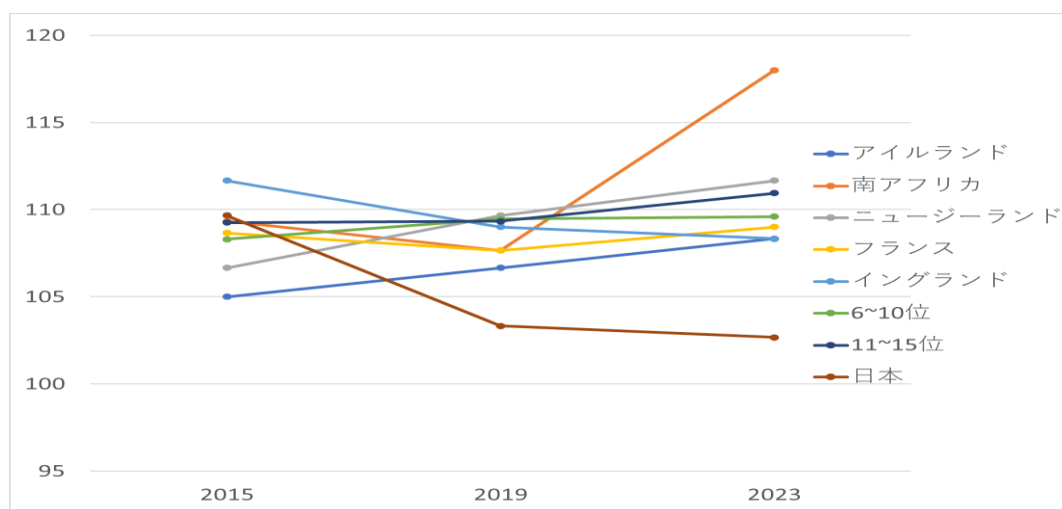


図 4 HO の体重比較

第2項 SH、SO、FB

スクラムハーフは、世界に比べて、日本代表選手は体重身長ともに低値であった。しかしながら、世界の SH がやや小柄になっている傾向があり、日本人でも活躍が可能な可能性がある（図 5）。しかしながら、このポジションでも体重は 10 キロ近い差があることが分かった（図 6）。リーグワン SH の平均身長は全体が 173cm、外国人選手の平均は 177cm、日本人選手の平均は 170cm で、平均体重は全体が 81 kg、外国人選手は平均 86kg、日本人選手は平均 76kg であった。

スタンドオフは、日本代表選手は世界の強豪国と変わらないレベルの体格があることが分かった（図 7、8）。したがって、日本人でも十分に対応可能なポジションであることが分かった。リーグワン SO の平均身長は全体が 178cm、外国人選手の平均は 181cm、日本

人選手の平均は 175cm で、平均体重は全体が 88 kg、外国人選手は平均 90kg、日本人選手は平均 85kg であった。

フルバックでは、身長は世界に比べて低い（図 9）、体重は世界の中位にあり（図 10）、日本人でも十分に活躍できるポジションであることが確認できた。リーグワン FB の平均身長は全体が 180cm、外国人選手の平均は 186cm、日本人選手の平均は 179cm で、平均体重は全体が 88 kg、外国人選手は平均 95kg、日本人選手は平均 86kg であった。

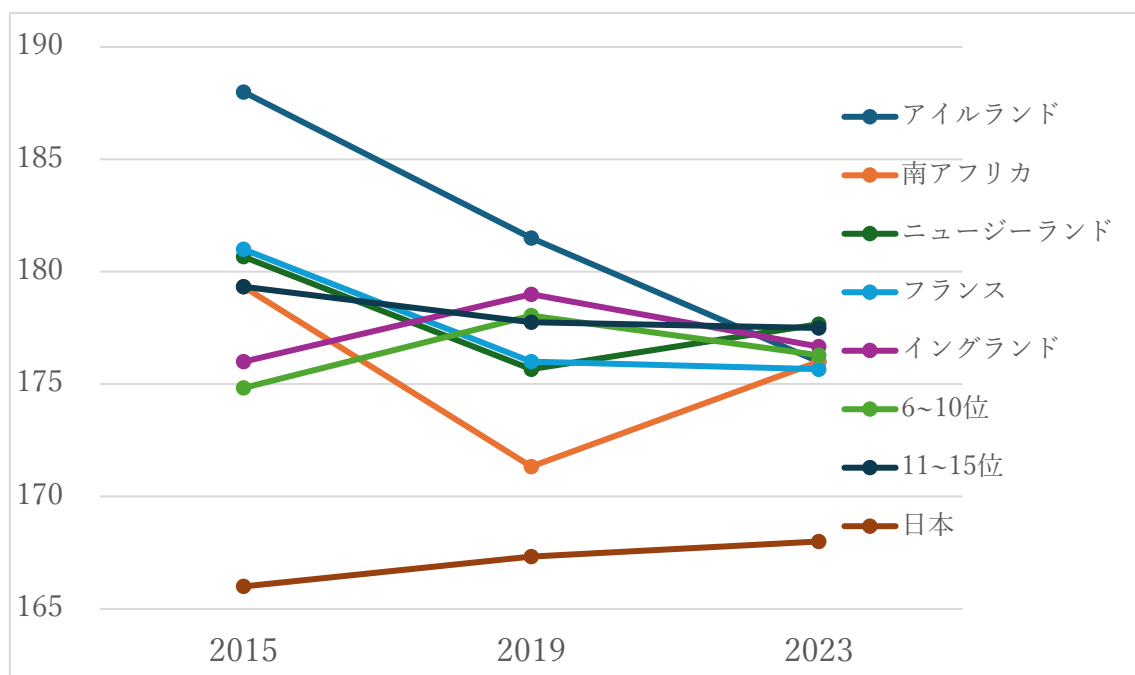


図 5 SH の身長比較

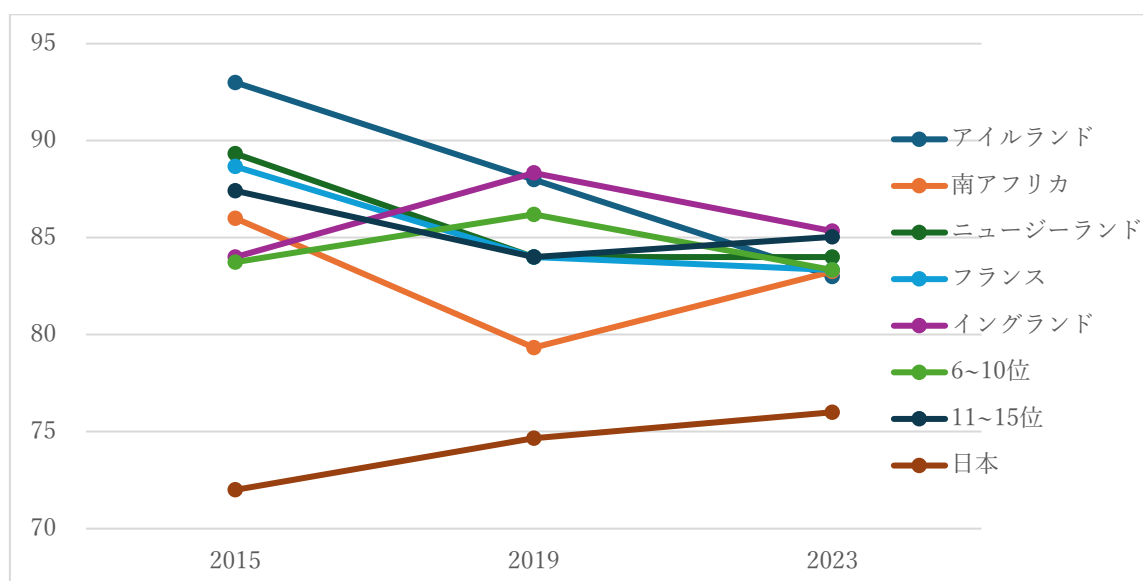


図 6 SH の体重比較

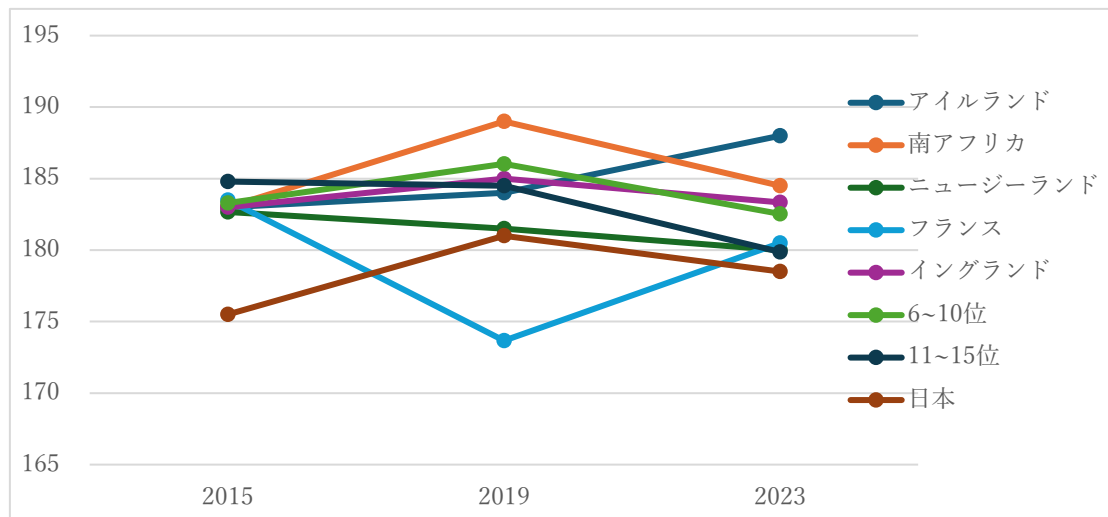


図 7 SO の身長比較

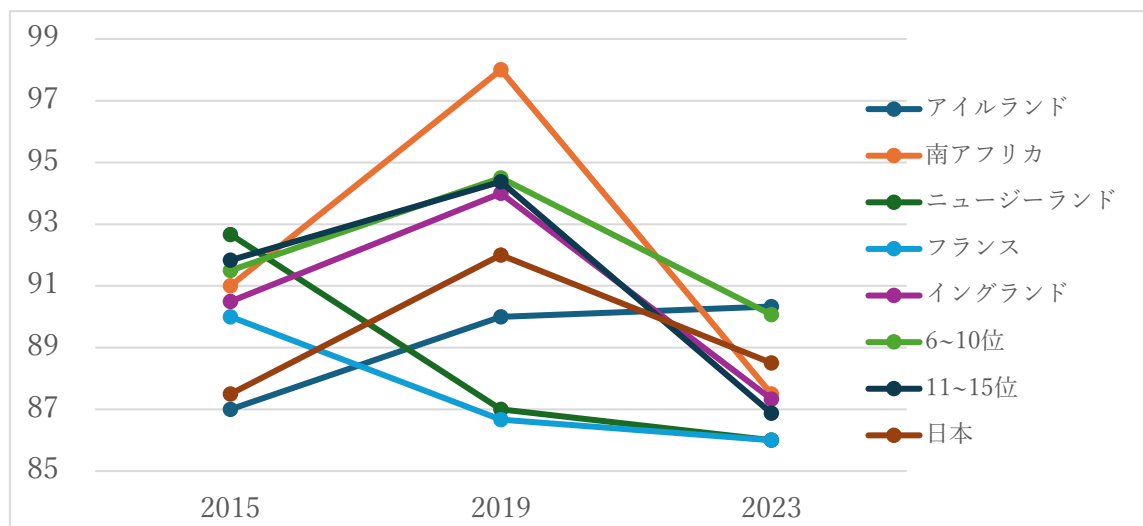


図 8 SO の体重比較

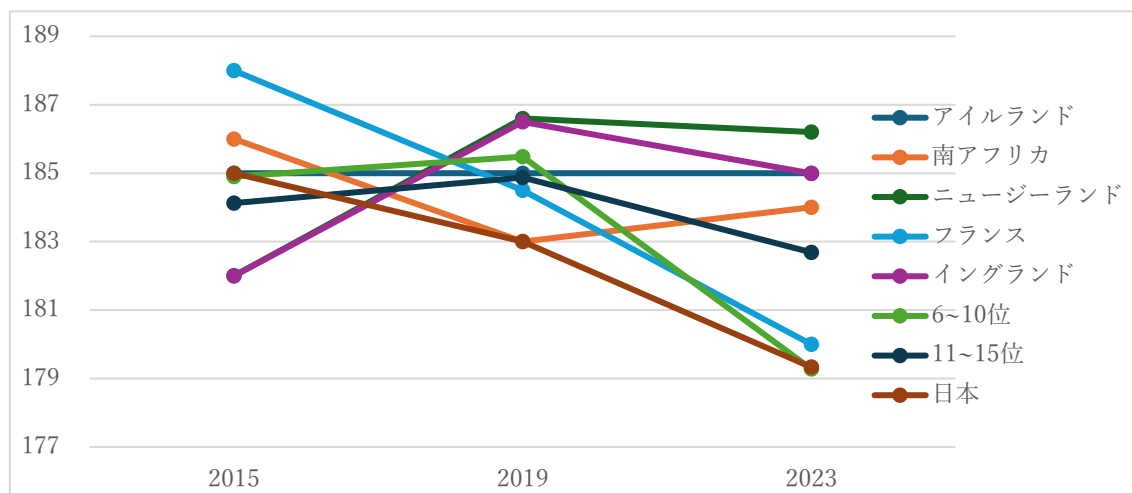


図 9 FB の身長比較

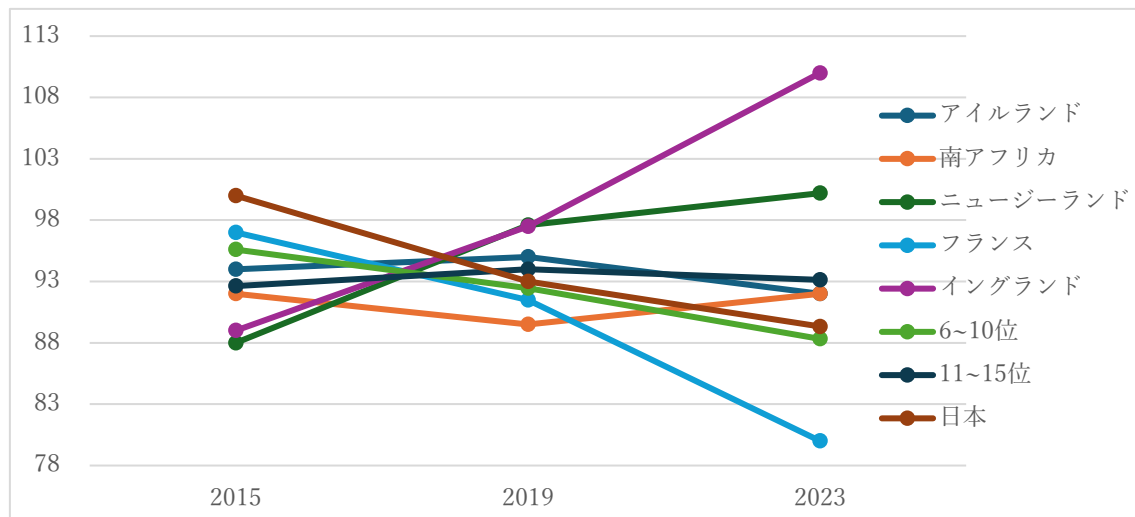


図 10 FB の体重比較

第3項 まとめ

世界のラグビー強豪国と比較すると日本代表には体格面での課題が残る一方、ポジションによっては日本人選手でも十分に活躍しうるポジションがあることが世界ランキング上位国とに比較を通して、確かめることができた。5つのポジションの検討であるが、2024-25シーズンのリーグワン所属選手の平均値を必須条件とし、上位国の平均値を理想値として整理すると表○のようになる。

もちろん体格がすべてではなく、高い身体能力があれば、小柄な選手であっても例外的なスキルやスピード、俊敏性を示せば活躍の可能性が十分にあり、身体要件はあくまで一つの目安である点に留意が必要である。将来的に2m超の国内ロックやパワフルなNo.8、さらには体格を備えたCTBが台頭すれば、外国人選手への依存を下げつつ、日本代表の強化やリーグワン全体の競争力向上にもつながると推察される。

リーグワンの外国人選手を世界ランキング上位国から獲得している現状をふまえると、世界の状況を把握し、この下表に準じた基準でスカウトすることがチームの戦力強化に必要なと考ええる。

表 1 選手獲得規準値案

ポジション	身長		体重	
	下限値	理想	下限値	理想
PR	178	185	111	120
HO	175	182	101	109
SH	170	176	76	84
SO	175	183	85	90
FB	179	184	86	93

第6節 筆者の立場と問題意識

第1項 筆者の立場

筆者は、ジャパンラグビーリーグワン（以下、リーグワン）のディビジョン2（以下、D2）に所属する「清水建設江東ブルーシャークス」の監督として、実際の選手獲得や育成、チーム戦略の策定に日々携わってきた。その中で、限られた予算の中で競技力を維持・向上させる難しさを痛感している。現場で得られた知見や経験を学術的に分析し、クラブ経営とチーム強化の両面に活かせる新たな編成戦略を模索することが筆者の課題意識の出発点である。リーグワンは2021年に発足したばかりの新しいラグビーリーグであるが、発足後の短期間でクラブ運営に関するさまざまな動きが見られている。例えば、2022年にはディビジョン3に所属していた宗像サニックスブルースが活動休止を発表し、事実上の廃部となった。この事例は企業母体の撤退がクラブ存続に直結するリスクを浮き彫りにしている。また、同じく2022年にはNTTグループによる再編が行われ、NTTコミュニケーションズシャイニングアークス東京ベイ浦安とNTTドコモレッドハリケーンズ大阪の2チームが統合された。この再編はクラブ運営の効率化を目指す取り組みである一方、リーグ全体の構造や競争環境にも影響を与えた。一方で、新規参入も進んでおり、セコムラガッツ（埼玉県狭山市）、ヤクルトレビズ（埼玉県戸田市、セカンダリーホストエリアとして群馬県前橋市）、LeRIRO 福岡（福岡県うきは市および筑後エリア）の3チームがディビジョン3に参入している。これらの事例は、クラブ運営が単なる競技力向上だけでなく、財務的な安定性や地域基盤の強化を求められる時代に突入していることを示しており、特に宗像サニックスブルースの解散は企業母体への依存リスクを改めて浮き彫りにしている。また、新規参入クラブにとっては、持続可能な経営モデルの構築が重要な課題となる。筆者はこれらの背景を踏まえ、リーグワンにおける現場の経験を学術的に体系化し、経営が苦しいチームや新規参入を目指すチームの参考となる指針を示したいと考えている。

第2項 問題意識

特に、リーグワンはオープンリーグであるため、D1昇格、定着、優勝争いの段階に応じた経営が重要である。特に、コスト要因であるB外国人やC外国人の戦略的活用ができれば、チームのパフォーマンスにも経営にも大きな影響を与えることが考えられる。外国人選手制度（カテゴリA・B・C）が複雑化するなか、B・C外国人の獲得に伴う経費上昇や日本人選手の育成停滞などがリーグワンの将来を左右する重大な要因となっている。ディビジョン1（D1）の上位クラブはカテゴリC枠のスター選手を積極補強して、資金力に限界のあるディビジョン2（D2）以下のクラブではカテゴリB外国人を低コストで活用しながら国内育成策を講じている状況である。本研究では、それらの要素を踏まえたうえで、B外国人、C外国人選手枠に対してどのような選手を獲得し、またどのような選手を実際の試合に起用しているのかを、チームの発展段階1部昇格・定着・優勝に応じて総合的に検証していきたい。

第7節 先行研究

ラグビーチームの経営には、リーダーシップ、マネジメント、知識管理、組織文化といった多様な要素が相互に関連し、複雑に作用していることが指摘されている。Roşca (2010) は、コーチがリーダー、マネージャー、トレーナーの三役を担い、クラブ内の資源を効果的に活用して組織を構築することの重要性を述べている。そして、チームの目標設定において、選手、コーチ、理事会メンバーが協働し、明確な目標を共有することが成功の鍵であると主張している。さらに、2003年のラグビーワールドカップでのイングランドチームの成功を取り上げた研究では、知識管理が戦略策定および実行において重要な役割を果たし、データ収集と共有が競争優位性の獲得に不可欠であることを示している (Roşca, 2010)。

ニュージーランドのラグビーチームを対象とした研究では、成功する組織文化がチームの一体感や共通の目標意識を高める上で重要であることが示されている (Cole & Martin, 2018)。また、Hall et al. (2021) は、トップレベルのラグビーチームにおけるヘッドコーチのハイブリッドな役割 (リーダーシップ、マネジメント、コーチングの統合) が、競技環境での持続的な成功に寄与することを明らかにしている。これらの研究は、ラグビーチームの経営には、リーダーシップや組織文化が中心的な役割を果たしていることを示しており、各要素を統合的かつ柔軟に運用する能力が成功の重要な要因であることを示唆している。

一方で、ラグビーの外国人選手の獲得に関する研究では、五郎丸 (2021) が英仏米のプロラグビーリーグにおける外国人制度を分析し、トップリーグ (リーグワンの前身) との差異や課題を整理している。この研究は、特に外国人選手の受け入れ制度が競技力やリーグの収益性に与える影響を明らかにしており、外国人選手の活用がリーグの国際的な競争力向上に貢献する一方で、コストや運用面の課題が存在することを示している。しかし、リーグワンで新たに整備されたカテゴリ B・C の運用や、ポジション別の起用実態、さらに1部昇格・定着・優勝の各フェーズを見据えた戦力編成との関係を包括的に取り上げた研究は見当たらなかった。

これらの先行研究を踏まえると、リーグワンにおける外国人選手の活用がクラブの競争力強化や財務的持続可能性に与える影響を解明することは、学術的にも実務的にも大きな意義を持つといえる。

第8節 目的

本研究は、リーグワンにおけるカテゴリ B および C 外国人選手の獲得・起用状況を明らかにし、1部昇格・定着・優勝の各段階に対応する効率的な外国人選手獲得方針を提示することを目的とする。

本研究では、発足から3シーズンを経たリーグワンにおける外国人選手の活用状況を整理し、現時点における位置づけを示すことに意義があると考えられる。

第2章 方法

第1節 対象

本研究の対象は、リーグワンの2021-2022シーズンから2023-2024シーズンの3シーズンにD1およびD2の1位から3位だったチームに選手登録されていたすべての選手である。

リーグワンの2021-2022シーズンから2023-2024シーズンの3シーズンにD1およびD2の1位から3位だったチームは、D1の1位～6位に位置するチームを「優勝」段階チームと定義した（以下、D1上位）。同様に、D1の7位～12位に位置するチームを「定着」段階チーム（以下、D1中下位）と定義した。そして、D2の1位～3位に位置するチームをD1への「昇格」段階のチームとして定義した（以下、D2上位）。

第1項 分析対象期間およびデータ収集方法

分析対象期間は2021-2022シーズンから2023-2024シーズンの3シーズンとし、リーグワン公式サイトおよび各チームの公表資料から、D1上位、下位、D2上位各チームの公式戦成績および選手登録情報についてデータを収集した。

具体的には、選手属性として、選手の身体的特徴（身長、体重）、年齢、国籍、選手登録カテゴリ（B外国人またはC外国人）、キャリア（過去の所属チーム）を、さらに出場状況として、各節における対象チームのスターティングメンバー（スタメン）の選手及び、各選手の試合出場数、出場時間などの項目について、データ収集した。

これらのデータは公式記録を基に収集し、不足している情報については各チームのニュースリリースや選手プロフィールから補完し、本研究に用いるデータベースを作成した。

第2項 ポジションに関するデータの扱い

ポジションについてのデータは、リーグワン公式サイトに記載された選手の登録ポジションを採用した。

試合ごとに選手が異なるポジションで起用される場合もあるが、本研究では分析の再現性を高めることを優先し、登録ポジションを基準とすることで、試合ごとに出場ポジションが異なる選手をどのように分類するかといった定義の複雑化の回避とデータの一貫性を確保した。

さらに、ポジション全体の傾向を把握することを優先するため、特定のポジションについて細分化されている場合（例：ロックの4番と5番）には、これらを1つのポジションとして統合して扱った。

第3項 選手の登録カテゴリ分類と定義

外国籍の選手の登録カテゴリは、日本ラグビー協会及びリーグワンの規定に準じて本研

究では、以下の通り①～⑥の6つに分類、定義した。

①カテゴリ B 外国人選手（以下、B 外国人）とは、試合出場が認められる外国人選手のうち、条件 B に該当する選手をいう。

②カテゴリ C 外国人選手（以下、C 外国人）とは、試合出場が認められる外国人選手のうち、条件 C に該当する選手をいう。

③カテゴリ A 外国人（以下、A 外国人）とは、試合出場が認められる外国人選手のうち日本代表選手資格を有するものをいう。

④A 外国人のうち、日本代表経験のある選手をカテゴリ AD 外国人（以下、AD 外国人）とした。

⑤日本人選手はカテゴリ J（以下、J）とし、J のうち、⑥日本代表経験を持つ日本人選手はカテゴリ JD（以下、JD）とした。

第2節 分析方法

リーグワンに所属するチームの発展段階（D1 上位、D1 中下位、D2 上位）ごとに、以下の3項目について分析した。

第1項 外国人選手のポジション別在籍状況

一つ目の分析として、各段階における B 外国人および C 外国人のポジション別在籍状況を調査し、各ポジションにおける外国人選手の分布傾向から、選手配置の特徴を明らかにすることを目指した。

分析は以下の手順で実施した。まず、3つの発展段階（D1 上位、D1 中下位、D2 上位）ごとに各ポジションで登録されている選手のカテゴリ情報を抽出し、単純集計した。次に、ポジションごとに B 外国人および C 外国人の在籍人数を集計し B 外国人および C 外国人の在籍割合を算出した。在籍割合は、各ポジションの外国人選手数をそのポジションに登録されている全選手数で割ることで求めた。この割合を用いて、各段階におけるポジション別の外国人選手の分布傾向を明らかにした。

そして、D1 上位、D1 中下位、D2 上位の3つの発展段階間で、ポジション別の外国人選手の在籍割合を比較した。この比較を通じて、特定のポジションで外国人選手が集中的に起用されている傾向や、各段階における選手配置の違いを検討した。

第2項 外国人選手のスタメン起用状況の調査

次に、D1 上位、D1 中下位、D2 上位の各段階における外国人選手（B 外国人および C 外国人）のスタメン起用状況を調査し、各段階における戦術的な起用方針の違いを明らかにすることを目指した。

分析は、各試合におけるスタメン選手について、起用された選手のカテゴリ、起用回数をポジション別にそれぞれのシーズンごと、D1 上位、D1 中下位、D2 上位のチームごと

に単純集計した。

次に、出場比率として、スタメンとして起用された試合数を全試合数である 16 で割り、百分率で表した。出場比率を基に、各ポジションで最も高い比率を示したカテゴリをそのポジションの「主なカテゴリ」表現することにした。たとえば、あるポジションで B 外国人選手が 10 試合、C 外国人選手が 6 試合スタメンとして起用された場合、B 外国人の出場比率は 62.5%、C 外国人の出場比率は 37.5% となり、このポジションの主なカテゴリは B 外国人である。

これらの集計により、各ポジションの「主なカテゴリ」を段階ごとに比較し、カテゴリ別の起用傾向、特に、特定のポジションで B 外国人または C 外国人が主に起用されている傾向が段階間でどのように異なるか、また、段階ごとのスタメン起用方針の違いについて、カテゴリ分布を基に分析した。

第 3 項 B 外国人および C 外国人の特徴の分析

B 外国人および C 外国人が「主なカテゴリ」として特定されたポジションにおける選手の身体的特徴やキャリアを分析し、ポジションごとに求められる特性やスカウティング傾向や、特定のポジションにおける選手起用の背景や戦略について分析した。

分析は、B 外国人および C 外国人が「主なカテゴリ」として特定されたポジションについて、各ポジションの選手の平均身長、平均体重を算出、年齢分布、国籍構成、過去の所属チームについて集計した。また、昇格、定着、優勝の各段階においてポジション別にこれらの特徴がどのように変化するかを比較した。

第3章 結果

第1節 外国人選手(カテゴリ B・C)のポジション別在籍状況の調査

第1項 全成績区分の外国人選手(カテゴリ B・C)の在籍状況 (表1)

調査期間の3シーズンを通じて、研究対象チーム (D1 上位、下位、D2 上位) には B 外国人選手は延べ 393 人、C 外国人選手は延べ 162 人在籍していた。

B 外国人選手のポジション分布では、最も多いのが LO (ロック) で 128 人 (32.6%) と最も多く、次いで CTB (センター) が 60 人 (15.3%)、SO (スタンドオフ) が 42 人 (10.7%) であった。

C 外国人選手については、CTB が最も多く 38 人 (23.5%)、次いで SO が 27 人 (16.7%)、LO が 25 人 (15.4%) となった。

3 シーズンの変化として特徴的だったのは、CTB (センター) の在籍状況は、2021-22 シーズンに 38.1%であったが、2023-24 シーズンには 37.8%へと低下し、日本人 CTB の在籍がやや増加していた。

成績区分別にみると、平均在籍人数は、D1 上位では B 外国人が 5.9 人、C 外国人が 2.9 人、D1 中下位では B 外国人が 7.4 人、C 外国人が 2.8 人、D2 上位では B 外国人が 6.9 人、C 外国人が 2.9 人であった (表2)。

表 2 21-22～23-24 シーズンの B 外国人・C 外国人のポジション別在籍状況

	21-22				22-23				23-24				3シーズン合計			
	カテゴリB		カテゴリC		カテゴリB		カテゴリC		カテゴリB		カテゴリC		カテゴリB		カテゴリC	
	人数	割合	人数	割合	人数	割合	人数	割合	人数	割合	人数	割合	人数	割合	人数	割合
PR	10	7.6%	1	1.9%	5	3.8%	1	1.9%	8	6.2%	1	1.8%	23	5.9%	3	1.9%
HO	4	3.0%	2	3.7%	5	3.8%	1	1.9%	5	3.8%	1	1.8%	14	3.6%	4	2.5%
LO	43	32.6%	7	13.0%	44	33.6%	9	17.3%	41	31.5%	9	16.1%	128	32.6%	25	15.4%
FL	8	6.1%	7	13.0%	14	10.7%	5	9.6%	17	13.1%	6	10.7%	39	9.9%	18	11.1%
BR	3	2.3%	0	0.0%	1	0.8%	0	0.0%	1	0.8%	0	0.0%	5	1.3%	0	0.0%
NO8	8	6.1%	3	5.6%	6	4.6%	4	7.7%	7	5.4%	5	8.9%	21	5.3%	12	7.4%
SH	2	1.5%	4	7.4%	4	3.1%	5	9.6%	5	3.8%	4	7.1%	11	2.8%	13	8.0%
SO	14	10.6%	9	16.7%	16	12.2%	7	13.5%	12	9.2%	11	19.6%	42	10.7%	27	16.7%
CTB	21	15.9%	12	22.2%	20	15.3%	13	25.0%	19	14.6%	13	23.2%	60	15.3%	38	23.5%
WTB	8	6.1%	1	1.9%	12	9.2%	5	9.6%	8	6.2%	2	3.6%	28	7.1%	8	4.9%
FB	5	3.8%	5	9.3%	2	1.5%	2	3.8%	3	2.3%	4	7.1%	10	2.5%	11	6.8%
UTB	6	4.5%	3	5.6%	2	1.5%	0	0.0%	4	3.1%	0	0.0%	12	3.1%	3	1.9%
総計	132		54		131		52		130		56		393		162	

表 3 成績区分別 B・C 外国人の平均在籍人数(21-22～23-24)

D1 上位	21-22	22-23	23-24	3シーズン合計
カテゴリ B	5.3	6.3	6.2	5.9
カテゴリ C	3.0	2.8	3.0	2.9
D1 中下位				
カテゴリ B	8.2	6.8	7.2	7.4
カテゴリ C	2.5	2.8	3.0	2.8
D2 上位				
カテゴリ B	7.0	7.0	6.7	6.9
カテゴリ C	2.7	3.0	3.0	2.9

第 2 項 D1 上位の外国人選手(カテゴリ B・C)の在籍状況

D1 上位の B 外国人は 3 シーズンで延べ 107 人おり、21-22 シーズンは 32 人、22-23 シーズンは 38 人、23-24 シーズンは 37 人であった。C 外国人は 3 シーズンで延べ 66 人おり、21-22 シーズンは 18 人、22-23 シーズンは 17 人、23-24 シーズンは 18 人であった。

B 外国人では、LO が最も多く 43 人(40.2%)であった。21-22 では 11 人(34.4%)、22-23 では 17 人(44.2%)、23-24 では 15 人(40.5%)であった。次に CTB が 18 人(16.8%)であった。21-22 では 6 人(18.8%)、22-23 では 7 人(18.4%)、23-24 では 18 人(16.8%)であった。次に FL が 11 人(10.3%)であった。21-22 では 2 人(6.3%)、22-23 では 4 人(10.5%)、23-24 では 5 人(13.5%)であった。

C 外国人では CTB が最も多く 30 人(45.5%)であった。21-22 では 5 人(27.8%)、22-23 では 5 人(29.4%)、23-24 では 5 人(27.8%)であった。次に LO が 12 人(18.2%)であった。21-22 では 3 人(16.7%)、22-23 では 3 人(17.6%)、23-24 では 3 人(16.7%)であった。

また、D1 上位チームにおける CTB の外国人在籍は、2021-22 シーズンに 46.6%だったが、2023-24 シーズンには 41.3 へと減少しており、日本人 CTB の在籍数が増えていた。

表 4 D1 上位の B 外国人・C 外国人のポジション別在籍状況

	21-22				22-23				23-24				3シーズン合計			
	カテゴリ B		カテゴリ C		カテゴリ B		カテゴリ C		カテゴリ B		カテゴリ C		カテゴリ B		カテゴリ C	
	人数	割合	人数	割合	人数	割合	人数	割合	人数	割合	人数	割合	人数	割合	人数	割合
PR	4	12.5%	0	0.0%	1	2.6%	0	0.0%	2	5.4%	0	0.0%	7	6.5%	0	0.0%
HO	0	0.0%	2	11.1%	1	2.6%	1	5.9%	1	2.7%	1	5.6%	2	1.9%	3	4.5%
LO	11	34.4%	3	16.7%	17	44.7%	3	17.6%	15	40.5%	3	16.7%	43	40.2%	12	18.2%
FL	2	6.3%	2	11.1%	4	10.5%	2	11.8%	5	13.5%	2	11.1%	11	10.3%	6	9.1%
BR	1	3.1%	0	0.0%	1	2.6%	0	0.0%	1	2.7%	0	0.0%	3	2.8%	0	0.0%
NO8	1	3.1%	1	5.6%	0	0.0%	0	0.0%	1	2.7%	1	5.6%	2	1.9%	1	1.5%
SH	1	3.1%	0	0.0%	1	2.6%	1	5.9%	0	0.0%	0	0.0%	2	1.9%	0	0.0%
SO	3	9.4%	2	11.1%	2	5.3%	3	17.6%	2	5.4%	3	16.7%	7	6.5%	9	13.6%
CTB	6	18.8%	5	27.8%	7	18.4%	5	29.4%	5	13.5%	5	27.8%	18	16.8%	30	45.5%
WTB	2	6.3%	1	5.6%	3	7.9%	1	5.9%	2	5.4%	2	11.1%	7	6.5%	3	4.5%
FB	0	0.0%	1	5.6%	0	0.0%	1	5.9%	0	0.0%	1	5.6%	0	0.0%	2	3.0%
UTB	1	3.1%	1	5.6%	1	2.6%	0	0.0%	3	8.1%	0	0.0%	5	4.7%	0	0.0%
総計	32		18		38		17		37		18		107		66	

第3項 D1 中下位の外国人選手(カテゴリ B・C)の在籍状況

D1 中下位の B 外国人は 3 シーズンで延べ 133 人おり、21-22 シーズンは 49 人、22-23 シーズンは 41 人、23-24 シーズンは 43 人であった。C 外国人は 3 シーズンで延べ 50 人おり、21-22 シーズンは 15 人、22-23 シーズンは 17 人、23-24 シーズンは 18 人であった。

B 外国人では、LO が最も多く 43 人(32.3%)であった。21-22 では 17 人(34.7%)、22-23 では 13 人(31.7%)、23-24 では 13 人(30.2%)であった。次に CTB が 19 人(14.3%)であった。21-22 では 6 人(12.2%)、22-23 では 5 人(12.2%)、23-24 では 8 人(18.6%)であった。次に SO が 14 人(10.5%)であった。21-22 では 5 人(10.2%)、22-23 では 5 人(12.2%)、23-24 では 4 人(9.3%)であった。次に WTB で 13 人(9.8%)であった。21-22 では 2 人(4.1%)、22-23 では 6 人(14.6%)、23-24 では 5 人(11.6%)であった。

C 外国人では CTB が最も多く 10 人(20.0%)であった。21-22 では 4 人(26.7%)、22-23 では 3 人(17.6%)、23-24 では 8 人(18.6%)であった。次に FL が 8 人(16.0%)であった。21-22 では 3 人(20.0%)、22-23 では 2 人(11.8%)、23-24 では 3 人(16.7%)であった。

D1 中下位の CTB においては、2021-22 シーズンに 38.9%を外国人在籍選手が、2023-24 シーズンには 35.3%まで低下し、日本人 CTB 選手が増加していた。

表 5 D1 中下位の B 外国人・C 外国人のポジション別在籍状況

	21-22				22-23				23-24				3シーズン合計			
	カテゴリ B		カテゴリ C		カテゴリ B		カテゴリ C		カテゴリ B		カテゴリ C		カテゴリ B		カテゴリ C	
	人数	割合	人数	割合	人数	割合	人数	割合	人数	割合	人数	割合	人数	割合	人数	割合
PR	0	0.0%	0	0.0%	2	4.9%	1	5.9%	3	7.0%	1	5.6%	5	3.8%	2	4.0%
HO	4	8.2%	0	0.0%	1	2.4%	0	0.0%	2	4.7%	0	0.0%	7	5.3%	0	0.0%
LO	17	34.7%	1	6.7%	13	31.7%	2	11.8%	13	30.2%	2	11.1%	43	32.3%	5	10.0%
FL	1	2.0%	3	20.0%	4	9.8%	2	11.8%	4	9.3%	3	16.7%	9	6.8%	8	16.0%
BR	1	2.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	1	0.8%	0	0.0%
NO8	5	10.2%	1	6.7%	3	7.3%	2	11.8%	1	2.3%	2	11.1%	9	6.8%	5	10.0%
SH	1	2.0%	2	13.3%	1	2.4%	2	11.8%	2	4.7%	2	11.1%	4	3.0%	6	12.0%
SO	5	10.2%	2	13.3%	5	12.2%	3	17.6%	4	9.3%	3	16.7%	14	10.5%	8	16.0%
CTB	6	12.2%	4	26.7%	5	12.2%	3	17.6%	8	18.6%	3	16.7%	19	14.3%	10	20.0%
WTB	2	4.1%	0	0.0%	6	14.6%	2	11.8%	5	11.6%	0	0.0%	13	9.8%	2	4.0%
FB	4	8.2%	1	6.7%	1	2.4%	0	0.0%	1	2.3%	2	11.1%	6	4.5%	3	6.0%
UTB	3	6.1%	1	6.7%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	3	2.3%	1	2.0%
総計	49		15		41		17		43		18		133		50	

第4項 D2 上位の B 外国人・C 外国人のポジション別在籍状況

D2 上位の B 外国人は 3 シーズンで延べ 88 人おり、21-22 シーズンは 21 人、22-23 シーズンは 21 人、23-24 シーズンは 20 人であった。C 外国人は 3 シーズンで延べ 26 人おり、21-22 シーズンは 8 人、22-23 シーズンは 9 人、23-24 シーズンは 9 人であった。

B 外国人では、LO が最も多く 20 人(20.5%)であった。21-22 では 5 人(23.8%)、22-23 では 8 人(38.1%)、23-24 では 5 人(25.0%)であった。次に CTB と SO が 8 人(9.1%)であった。21-22 では CTB が 5 人(23.8%)、SO が 1 人(4.8%)、22-23 では CTB が 2 人(9.5%)、SO が 5 人(23.8%)、23-24 では CTB が 1 人(5.0%)、SO が 2 人(10.0%)であった。

C 外国人では LO と SO が最も多く 5 人(19.2%)であった。21-22 では LO が 1 人(12.5%)、SO が 2 人(25.0%)、22-23 では LO が 2 人(22.2%)、SO が 1 人(11.1%)、23-24 では CTB が 1 人(11.1%)、SO が 2 人(22.2%)であった。

D2 上位でも CTB の外国人在籍選手は、2021-22 シーズンの 23.8%から 2023-24 シーズンには 16.1%と低下し、日本人 CTB が増加していた。

表 6 D2 上位の B 外国人・C 外国人のポジション別在籍状況

	21-22				22-23				23-24				3シーズン合計			
	カテゴリ B		カテゴリ C		カテゴリ B		カテゴリ C		カテゴリ B		カテゴリ C		カテゴリ B		カテゴリ C	
	人数	割合	人数	割合	人数	割合	人数	割合	人数	割合	人数	割合	人数	割合	人数	割合
PR	3	14.3%	1	12.5%	1	4.8%	0	0.0%	2	10.0%	0	0.0%	6	6.8%	1	3.8%
HO	0	0.0%	0	0.0%	2	9.5%	0	0.0%	2	10.0%	0	0.0%	4	4.5%	0	0.0%
LO	5	23.8%	1	12.5%	8	38.1%	2	22.2%	5	25.0%	2	22.2%	18	20.5%	5	19.2%
FL	3	14.3%	1	12.5%	1	4.8%	1	11.1%	2	10.0%	1	11.1%	6	6.8%	3	11.5%
BR	1	4.8%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	1	1.1%	0	0.0%
NO8	1	4.8%	0	0.0%	1	4.8%	1	11.1%	3	15.0%	1	11.1%	5	5.7%	2	7.7%
SH	0	0.0%	1	12.5%	1	4.8%	1	11.1%	1	5.0%	1	11.1%	2	2.3%	3	11.5%
SO	1	4.8%	2	25.0%	5	23.8%	1	11.1%	2	10.0%	2	22.2%	8	9.1%	5	19.2%
CTB	5	23.8%	0	0.0%	2	9.5%	1	11.1%	1	5.0%	1	11.1%	8	9.1%	2	7.7%
WTB	2	9.5%	0	0.0%	0	0.0%	1	11.1%	1	5.0%	0	0.0%	3	3.4%	1	3.8%
FB	0	0.0%	1	12.5%	0	0.0%	1	11.1%	1	5.0%	1	11.1%	1	1.1%	3	11.5%
UTB	0	0.0%	1	12.5%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	1	3.8%
総計	21		8		21		9		20		9		88		26	

第5項 成績区分における B 外国人・C 外国人のポジション別在籍状況の比較

B 外国人は、LO と CTB の割合が上位チームで高くなる傾向があり、特に D1 上位における LO の比率は 40.2%と際立って高かった。一方、SO は D1 上位の 6.5%と比べて、D1 中下位が 10.5%、D2 上位は 9.1%と高い傾向にあった。

C 外国人においても LO と CTB であった。特に CTB は D1 上位で 45.5%、D1 中下位で 20.0%、D2 上位で 7.7%と上位チームほど高い割合だった。

表 7 D1 上位・中下位・B2 上位の B 外国人・C 外国人のポジション別在籍状況

	D1 上位				D1 中下位				D2 上位			
	カテゴリ B		カテゴリ C		カテゴリ B		カテゴリ C		カテゴリ B		カテゴリ C	
	人数	割合	人数	割合	人数	割合	人数	割合	人数	割合	人数	割合
PR	7	6.5%	0	0.0%	5	3.8%	2	4.0%	6	6.8%	1	3.8%
HO	2	1.9%	3	4.5%	7	5.3%	0	0.0%	4	4.5%	0	0.0%
LO	43	40.2%	12	18.2%	43	32.3%	5	10.0%	18	20.5%	5	19.2%
FL	11	10.3%	6	9.1%	9	6.8%	8	16.0%	6	6.8%	3	11.5%
BR	3	2.8%	0	0.0%	1	0.8%	0	0.0%	1	1.1%	0	0.0%
NO8	2	1.9%	1	1.5%	9	6.8%	5	10.0%	5	5.7%	2	7.7%
SH	2	1.9%	0	0.0%	4	3.0%	6	12.0%	2	2.3%	3	11.5%
SO	7	6.5%	9	13.6%	14	10.5%	8	16.0%	8	9.1%	5	19.2%
CTB	18	16.8%	30	45.5%	19	14.3%	10	20.0%	8	9.1%	2	7.7%
WTB	7	6.5%	3	4.5%	13	9.8%	2	4.0%	3	3.4%	1	3.8%
FB	0	0.0%	2	3.0%	6	4.5%	3	6.0%	1	1.1%	3	11.5%
UTB	5	4.7%	0	0.0%	3	2.3%	1	2.0%	0	0.0%	1	3.8%
総計	107		66		133		50		88		26	

第2節 外国人選手のスタメン起用状況の調査

第1項 3シーズン全体の成績区分別のポジション別「主なカテゴリ」

ポジション別「主なカテゴリ」は、対象チーム全体では4番(LO)、5番(LO)がB外国人、8番(NO8)が日本代表のA外国人、12番(CTB)がA外国人であった。その他のポジションは日本人選手が諸力であった。

成績区分別では差異がありD1上位では、日本人のなかでも1番(PR)、2番(HO)、6番(FL)、9番(SH)、10番(SO)12番(CTB)、14番(WTB)、15番(FB)の8つのポジションが日本代表であった。日本代表ではない日本人は3番(PR)、7番(FL)、11番(WTB)であった。4番5番はB外国人で、NO8は日本代表のA外国人、13番(CTB)はC外国人であった。

D1中下位では、NO8がC外国人、SOがB外国人、13番(CTB)がA外国人であった。日本代表の日本人が主力のポジションはなく、4番(LO)が全体ではB外国人であったが、日本人が主力となっており、10のポジションで日本人が主力となっていた。

D2上位では、5番(LO)がC外国人であり、6番(FL)と12番(CTB)がA外国人、8番(NO8)と15番(FB)がB外国人、13番(CTB)が日本代表のA外国人であった。

21-22シーズンではCTB(13番)が「C(外国人)」だったのに対し、23-24シーズンでは「J(日本人)」に変わっていました。他のポジションは外国人から外国人、もしくは日本人から日本人で、日本人スタメンが増加したのはCTB(13番)のみであった。

表 8 3シーズン全体の成績区分別「主なカテゴリ」

	全体	D1 (1~6位)	D1 (7~12位)	D2 (1~3位)
1 : PR	J	JD	J	J
2 : HO	J	JD	J	J
3 : PR	J	J	J	J
4 : LO	B	B	J	J
5 : LO	B	B	B	C
6 : FL	J	JD	J	A
7 : FL	J	J	J	J
8 : NO8	AD	AD	C	B
9 : SH	J	JD	J	J
10 : SO	J	JD	B	J
11 : WTB	J	J	J	J
12 : CTB	A	JD	A	A
13 : CTB	J	C	J	AD
14 : WTB	J	JD	J	J
15 : FB	J	JD	J	B

J	日本
JD	日本代表
A	カテA
AD	カテA代表
B	カテB
C	カテC

1) 3シーズン全体の成績区分ごとのカテゴリ別スタメン比率

全成績区分でのスタメン比率は、フロントロー（1番・2番・3番）は日本や日本代表が主力であり、4番・5番LOはB外国人が軸だった。一方、8番NO8は日本代表（A）が多く、12番CTBもAが中心という結果が示されていた。D1上位では1番・2番・6番・9番・10番・12番・14番・15番を日本代表が多く担い、4番・5番をB外国人が占め、13番はCが多かった。D1中下位ではNO8がC、SOがB、13番CTBがAという構成が多く、フロントローやその他ポジションは日本人の比率が高めだった。D2上位ではLO（5番）にC、FL（6番）とCTB（12番）にA、NO8（8番）やFB（15番）にBという配分が目立っていた（表8）。

表 9 全成績区分における3シーズンのカテゴリごとスタメン比率

	全体					
	日本	日本代表	A	A代表	B	C
1: PR	74%	21%	2%	4%	0%	0%
2: HO	59%	25%	6%	1%	6%	4%
3: PR	61%	22%	7%	2%	6%	2%
4: LO	30%	10%	12%	13%	31%	4%
5: LO	18%	2%	5%	5%	45%	26%
6: FL	37%	12%	16%	14%	14%	6%
7: FL	63%	12%	6%	3%	9%	6%
8: NO8	14%	7%	16%	26%	18%	18%
9: SH	61%	22%	0%	0%	5%	12%
10: SO	31%	14%	6%	3%	22%	25%
11: WTB	62%	6%	16%	3%	9%	5%
12: CTB	18%	17%	23%	5%	16%	21%
13: CTB	25%	6%	15%	18%	15%	21%
14: WTB	48%	23%	19%	7%	3%	0%
15: FB	37%	21%	6%	9%	17%	11%

2) D1上位のスタメン比率

PR（1番・3番）は日本あるいは日本代表資格の選手が7~8割以上に達しており、HO

(2 番) も 8～9 割近くを日本人 (日本・日本代表) が占めていた。これに対し LO (4 番・5 番) は B 外国人の存在感が大きく、とりわけ 5 番 LO での B 比率がさらに高く、C 枠も一定割合混在していた。FL (6 番・7 番) は基本的に日本／日本代表が主体だが、6 番 FL に A 枠、7 番 FL に B や C がわずかに含まれていた。NO8 (8 番) では日本代表 (A) 枠が大半を占め、SH (9 番) は日本人 (日本・日本代表) がおおく、B や C はごく僅かにとどまっていた。SO (10 番) は日本代表率が高いものの、2～3 割程度で B や C の起用も報告されていた。WTB (11 番・14 番) では日本人主体ながら、14 番 WTB は A や C 枠など外国人枠がいくらか入り、11 番 WTB より混在度が高い傾向があった。CTB (12 番・13 番) は 12 番に A 枠起用が多く、13 番に C 枠が特に目立ち、カテゴリが分散していた点が特徴的である。FB (15 番) は日本／日本代表が 6 割前後で、B・C も 2～3 割入り、多彩な比率を示していた。

日本人選手 (日本+日本代表) のスタメン比率が大きく向上したポジションと、ほぼ変わらなかったポジションが明確になった。具体的には、CTB (13 番) が 5% から 15% へ 10 ポイント、FB (15 番) が 58% から 80% へ 22 ポイントそれぞれ上昇し、日本人選手の起用割合が顕著に増加していた。一方、SH (9 番) は 97% から 97%、SO (10 番) は 63% から 63% と、いずれも横ばいにとどまった。これらの結果から、ポジションによって日本人選手のスタメン比率に変動が見られる一方、従来から日本人起用が高かったポジションに関しては大きな変化がなかった。

表 10 D1 上位のカテゴリごとのスタメン比率(21-22～23-24)

D1 (1～6位)						
	日本	日本代表	A	A代表	B	C
1 : PR	40%	44%	4%	11%	0%	0%
2 : HO	39%	49%	0%	0%	1%	11%
3 : PR	57%	27%	4%	6%	6%	0%
4 : LO	10%	6%	10%	34%	35%	5%
5 : LO	5%	1%	7%	3%	57%	26%
6 : FL	18%	24%	15%	24%	16%	4%
7 : FL	54%	13%	1%	6%	13%	14%
8 : NO8	7%	9%	12%	61%	5%	7%
9 : SH	44%	49%	0%	0%	1%	6%
10 : SO	20%	38%	0%	6%	6%	30%
11 : WTB	59%	10%	4%	2%	9%	15%
12 : CTB	8%	45%	6%	5%	18%	18%
13 : CTB	8%	8%	4%	29%	12%	38%
14 : WTB	19%	45%	18%	16%	1%	1%
15 : FB	25%	48%	0%	13%	7%	8%

3) D1 中下位のスタメン比率

PR (1 番・3 番) では日本人が主力を担うが、D1 上位ほど日本代表には偏らず、3 番 P R で B・C それぞれ 6 % 起用されていた。HO (2 番) も日本人が過半数を占めるなかで、

一部に A 枠起用が確認された。LO（4 番・5 番）は B 外国人が多いものの、上位クラブと異なり日本人がスタメンを担うチームも一定数あった。FL（6 番・7 番）は引き続き日本／日本代表が中心だが、6 番 FL に A 枠、7 番 FL に B や C が混ざるなどバリエーションが増えていた。NO8（8 番）では C 外国人の比率が相対的に高く、A 代表とは異なる枠の活用が目立つ結果になっていた。SO（10 番）は B 外国人が比較的多く、日本代表あるいは日本人専有という状況ではなかった。CTB（13 番）は A（日本代表）枠がやや多く、フロントローや FL などと比べると外国人度合いが高めであった。全体的に、D1 上位ほど日本代表を厚く配置する構図に比べ、ここでは B・C がさらに散在し、非代表の日本人とも混ざる混在型パターンが顕著だった。

FL（6 番）と SO（10 番）で日本人選手（日本+日本代表）のスタメン比率が上昇していたのである。具体的には、FL（6 番）が 46%から 52%へ 6 ポイント、SO（10 番）が 16%から 30%へ 14 ポイントそれぞれ増加していた。一方、その他のポジションでは、多くが減少もしくはほぼ横ばいにとどまり、日本人選手の起用割合が大きく伸びたのはこれら 2 つのポジションのみという結果であった。

表 11 D1 中下位のカテゴリごとのスタメン比率(21-22～23-24)

D1（7～12位）						
	日本	日本代表	A	A代表	B	C
1：PR	82%	16%	1%	0%	0%	0%
2：HO	61%	24%	13%	0%	1%	0%
3：PR	49%	26%	12%	0%	5%	7%
4：LO	36%	23%	9%	0%	26%	6%
5：LO	21%	4%	4%	10%	38%	22%
6：FL	43%	9%	11%	13%	12%	12%
7：FL	65%	23%	5%	1%	4%	2%
8：NO8	8%	8%	15%	14%	20%	35%
9：SH	65%	10%	0%	0%	7%	18%
10：SO	26%	0%	14%	0%	39%	22%
11：WTB	46%	3%	36%	4%	10%	0%
12：CTB	19%	3%	40%	3%	10%	25%
13：CTB	38%	7%	14%	13%	18%	11%
14：WTB	49%	20%	23%	1%	6%	0%
15：FB	42%	6%	10%	5%	21%	17%

4) D2 上位のスタメン比率

PR・HO・SH といったポジションでは日本あるいは日本代表資格が多く、B や C の参入はきわめて少数だった。LO（4 番・5 番）は 4 番で日本や B が混在する一方、5 番 LO では C 外国人起用が際立ち、D2 クラブがラインアウトの要となるロックにコストを割いている構成が確認された。FL（6 番）は A 枠の比率が高く、7 番 FL は日本人主体。NO8（8 番）や FB（15 番）は B 外国人が多めに配置されており、D1 昇格を目指して特定ポジションに外国人枠を集中させる方針がうかがえた。CTB（12 番・13 番）については 12 番に A（日本代表）枠が多く、13 番にも A や B・C が一部混在する結果が示され、フロント

ロー・SHなどと比べると外国人起用率が高めだった。

日本人選手（「日本」「日本代表」）のスタメン比率が上昇していたのはLO（5番）、FL（6番）、SO（10番）、FB（15番）の4つのポジションであった。具体的には、LO（5番）が26%から29%（+3ポイント）、FL（6番）が29%から34%（+5ポイント）、SO（10番）が31%から38%（+7ポイント）、FB（15番）が21%から41%（+20ポイント）へと増加しており、特にFB（15番）の伸びが際立っていたのである。

表 12 D2 上位のカテゴリごとのスタメン比率(21-22～23-24)

D2（1～3位）						
	日本	日本代表	A	A代表	B	C
1：PR	100%	0%	0%	0%	0%	0%
2：HO	65%	0%	1%	5%	30%	0%
3：PR	67%	26%	6%	0%	1%	0%
4：LO	60%	3%	16%	5%	12%	3%
5：LO	19%	2%	5%	3%	30%	41%
6：FL	22%	6%	41%	10%	20%	0%
7：FL	63%	0%	23%	6%	0%	7%
8：NO8	2%	0%	40%	2%	40%	16%
9：SH	64%	9%	0%	0%	1%	27%
10：SO	41%	4%	7%	4%	23%	20%
11：WTB	81%	10%	5%	2%	2%	0%
12：CTB	18%	1%	42%	5%	15%	19%
13：CTB	20%	5%	27%	28%	15%	4%
14：WTB	63%	2%	27%	5%	4%	0%
15：FB	10%	19%	7%	19%	31%	15%

第2項 23-24 シーズンのスタメン状況

1) 成績区分ごとのポジション別「主なカテゴリ」

全体的にPR・HO・SHなどは日本／日本代表資格の選手がメインであり、LO（4番・5番）ではBやCが軸となりやすい構造が続いていた。FL（6番・7番）は日本人が核となりつつも、6番FLでA外国人、7番FLでBが入るなど少量の外国人枠が混在。NO8（8番）は日本代表（A）やB/Cが投下される重要ポジションで、SO（10番）はクラブごとに日本代表あるいはB/Cを配分する多様性が目立った。WTB（11番・14番）はおおむね日本/JD中心ながら、14番側に外国人（A枠）が紛れるケースも見られ、CTB（12番・13番）は12番にA、13番にCといった起用がしばしば報告された。FB（15番）は全体として日本/JD率が高いが、BやCも2～3割混ざる柔軟な編成例が見られた。

表 13 ポジション別主なカテゴリ(23-24)

	全体	D1 (1~6位)	D1 (7~12位)	D2 (1~3位)
1 : PR	J	J	J	J
2 : HO	J	J	J	J
3 : PR	J	J	J	J
4 : LO	B	B	B	J
5 : LO	B	B	B	C
6 : FL	J	AD	J	A
7 : FL	J	J	J	A
8 : NO8	AD	AD	C	A
9 : SH	J	J	J	J
10 : SO	J	JD	J	C
11 : WTB	J	J	J	J
12 : CTB	A	JD	A	A
13 : CTB	J	AD	B	A
14 : WTB	J	JD	J	J
15 : FB	J	JD	J	JD

J	日本
JD	日本代表
A	カテA
AD	カテA代表
B	カテB
C	カテC

1) D1 上位のスタメン比率

本表では、フロントローのPR（1番・3番）とHO（2番）に日本および日本代表資格の選手が集中し、BやCといった外国人枠はごく少数にとどまっていた。LO（4番・5番）はB外国人が主体であり、特に5番LOでのB起用率が高く、Cの混在もわずかに見られた。FL（6番・7番）は基本的に日本／日本代表が軸だが、6番FLにはA外国人がわずかに加わり、7番FLにはBやCが散発的に含まれる構成が示されていた。NO8（8番）はA（日本代表）枠が大半を占め、SO（10番）にも日本代表が多く投入されている一方、2〜3割ほどBやCが入る時期が確認されている。SH（9番）は日本代表が非常に高い比率を示し、外国人はほぼ入らない形だった。WTB（11番・14番）は11番を日本人がメインに担いつつ、14番側にA・C枠が若干混じり、左右での混在度に差があった。CTB（12番・13番）は12番にA（日本代表）枠が集中し、13番はC外国人が大きな比率を占めるというカテゴリ分散が目立っていた。FB（15番）は日本／日本代表が6割前後を維持しながら、BやCも2〜3割程度入り込む多彩な編成が見られた。

表 14 カテゴリごとのスタメン比率(D1 上位： 23-24 シーズン)

	D1 (1~6位)					
	日本	日本代表	A	A代表	B	C
1 : PR	54%	29%	8%	10%	0%	0%
2 : HO	46%	41%	0%	0%	3%	10%
3 : PR	59%	18%	9%	14%	0%	0%
4 : LO	3%	4%	20%	26%	46%	1%
5 : LO	0%	0%	3%	5%	50%	42%
6 : FL	14%	21%	11%	28%	15%	11%
7 : FL	59%	8%	3%	3%	13%	14%
8 : NO8	8%	2%	16%	59%	6%	10%
9 : SH	61%	36%	0%	0%	0%	4%
10 : SO	25%	38%	0%	0%	15%	22%
11 : WTB	71%	10%	3%	0%	1%	15%
12 : CTB	12%	37%	7%	5%	18%	22%
13 : CTB	12%	3%	0%	38%	21%	27%
14 : WTB	23%	47%	17%	12%	0%	1%
15 : FB	28%	52%	0%	9%	2%	10%

2) D1 中下位のスタメン比率

フロントロー（PR・HO）は相変わらず日本人（日本 or 日本代表）が多数を占めるが、上位ほどには日本代表が偏在せず、3 番 PR あたりで B・C がやや混ざるケースがあった。LO（4 番・5 番）は B 外国人が優勢ながら、上位ほどの“B 一辺倒”ではなく、日本人スタメンのクラブも一定数存在している。FL（6 番・7 番）は日本／日本代表を軸にしつつ、6 番 FL に A 枠、7 番 FL に B や C が入るなど、上位よりも複数カテゴリが混在するパターンが増える傾向が示唆された。NO8（8 番）は C 枠比率が比較的高く、A 代表が圧倒する D1 上位と差異が生じている。SO（10 番）では B 外国人がメインになりがちで、ここにも日本代表や日本人が固定されているわけではない。CTB（13 番）は A（日本代表）枠がやや多く、PR・HO・FL など他ポジションと比べると外国人度合いが強めだった。総じて D1 上位のような日本代表厚配とは異なり、B・C と非代表の日本人が入り交じる「多様型」スタメンが本表の特徴といえる。

表 15 カテゴリごとのスタメン比率(D1 中下位： 23-24 シーズン)

D1（7～12位）						
	日本	日本代表	A	A代表	B	C
1：PR	85%	13%	2%	0%	0%	0%
2：HO	54%	27%	15%	0%	4%	0%
3：PR	46%	27%	15%	0%	4%	8%
4：LO	33%	7%	13%	0%	44%	3%
5：LO	12%	8%	8%	14%	40%	19%
6：FL	39%	13%	9%	19%	18%	3%
7：FL	58%	29%	6%	3%	0%	4%
8：NO8	8%	7%	19%	15%	16%	36%
9：SH	66%	7%	0%	0%	5%	23%
10：SO	30%	0%	17%	0%	27%	25%
11：WTB	45%	0%	45%	1%	9%	0%
12：CTB	18%	0%	52%	1%	7%	23%
13：CTB	25%	9%	9%	15%	26%	17%
14：WTB	54%	7%	35%	1%	3%	0%
15：FB	40%	9%	13%	6%	19%	14%

3) D2 上位のスタメン比率

D2 上位でも PR（1 番・3 番）と HO（2 番）、さらに SH（9 番）は日本や日本代表資格の選手を中心に固める構成が顕著で、B・C が参入する例はまれであった。LO の 4 番は日本／B の混在型だが、5 番 LO では C 外国人起用が際立っており、ラインアウト要因への投資がうかがえた。FL（6 番）には A 枠がしばしば用いられ、7 番 FL は日本人が主体という形で分担する傾向が見られた。NO8（8 番）や FB（15 番）に関しては B 外国人の比率が比較的高く、D2 クラブが予算や戦力をポイント的に投じて昇格を狙う姿が表れていた。CTB（12 番・13 番）は 12 番側に A 外国人を重点的に配置し、13 番も A・B・C が混在するなど、フロントローや SH に比べて外国人比率が高めだった。

表 16 カテゴリごとのスタメン比率(D1 下位： 23-24 シーズン)

D2 (1~3位)						
	日本	日本代表	A	A代表	B	C
1 : PR	100%	0%	0%	0%	0%	0%
2 : HO	55%	0%	2%	2%	40%	0%
3 : PR	57%	26%	17%	0%	0%	0%
4 : LO	45%	0%	19%	0%	31%	5%
5 : LO	29%	0%	2%	10%	21%	38%
6 : FL	29%	5%	60%	5%	2%	0%
7 : FL	43%	0%	45%	0%	0%	12%
8 : NO8	0%	0%	45%	2%	31%	21%
9 : SH	69%	0%	0%	0%	0%	31%
10 : SO	38%	0%	12%	0%	5%	45%
11 : WTB	81%	7%	10%	0%	2%	0%
12 : CTB	24%	0%	38%	0%	19%	19%
13 : CTB	19%	0%	38%	29%	14%	0%
14 : WTB	45%	5%	36%	5%	10%	0%
15 : FB	17%	24%	17%	24%	14%	5%

第3項 22-23 シーズンのスタメン状況

1) 成績区分ごとのポジション別「主なカテゴリ」

2022-23 シーズンも、LO (4 番・5 番) では B 外国人が中心的役割を担い、NO8 (8 番) や CTB (12 番) に A 外国人が多く投入されていた。PR・HO・SH では日本や日本代表 (JD) が厚く、SO (10 番) や CTB (13 番) はクラブごとに A、B、C がほどよく混ざる傾向が表れている。21-22~23-24 の通算分布と大きな差はなく、フロントロー/SH = 日本系、LO=B 多用、NO8・12 番 CTB=A 枠が多い、という図式があらためて確認された。

表 17 ポジション別「主なカテゴリ」(22-23)

	全体	D1 (1~6位)	D1 (7~12位)	D2 (1~3位)
1 : PR	J	JD	J	J
2 : HO	J	J	J	J
3 : PR	J	J	J	J
4 : LO	J	B	J	J
5 : LO	B	B	B	C
6 : FL	J	JD	J	B
7 : FL	J	J	J	J
8 : NO8	AD	AD	C	A
9 : SH	J	JD	J	J
10 : SO	J	C	B	J
11 : WTB	J	J	A	J
12 : CTB	A	JD	A	A
13 : CTB	J	C	J	AD
14 : WTB	J	JD	JD	J
15 : FB	J	JD	J	B

J	日本
JD	日本代表
A	カテA
AD	カテA代表
B	カテB
C	カテC

2) D1 上位のスタメン比率

D1 上位のクラブでも、LO (4 番・5 番) では B 外国人が圧倒的で、5 番 LO に C 枠が加わる場合がわずかに認められた。NO8 (8 番) は A (日本代表) 枠が突出しており、日本人や B・C は少数だった。FL や WTB では日本代表選手がしばしば配置される一方、13

番 CTB で C 外国人を活用しており、12 番 CTB とは異なるカテゴリをあてがうクラブが多く、上位ほど日本代表+要所に外国人という図式が 22-23 シーズンでも際立っていた。

表 18 カテゴリごとのスタメン比率(D1 上位：22-23 シーズン)

D1 (1~6位)						
	日本	日本代表	A	A代表	B	C
1 : PR	40%	44%	3%	13%	0%	0%
2 : HO	42%	42%	0%	0%	1%	14%
3 : PR	62%	30%	2%	1%	6%	0%
4 : LO	13%	2%	7%	33%	36%	10%
5 : LO	6%	2%	13%	0%	64%	14%
6 : FL	22%	32%	18%	16%	12%	0%
7 : FL	62%	8%	0%	6%	13%	12%
8 : NO8	6%	3%	13%	71%	3%	5%
9 : SH	30%	56%	0%	0%	2%	13%
10 : SO	11%	37%	0%	13%	0%	39%
11 : WTB	56%	8%	5%	5%	13%	13%
12 : CTB	9%	45%	7%	2%	22%	15%
13 : CTB	9%	19%	8%	22%	11%	32%
14 : WTB	21%	43%	19%	14%	2%	0%
15 : FB	21%	57%	0%	13%	10%	0%

3) D1 中下位スタメン比率

D1 中下位でも LO (4 番・5 番) は B の存在感が大きいものの、上位に比べれば日本人で埋めるチームも一定数あり、一色にはなりにくい。NO8 (8 番) は A ではなく C 枠の活用が目立ち、上位との違いが明確だった。SO (10 番) に B 外国人が積極起用されるケースがさらに増え、13 番 CTB は A (日本代表) がやや多めに配分される流れが報告されている。フロントローや FL では日本・日本代表系が主体で、上位と同じように「LO や NO 8、SO、CTB への外国人シフト」があるものの、全体として代表専有ポジションが少なく、B や C に頼る混在型パターンが強い特徴となっていた。

表 19 カテゴリごとのスタメン比率(D1 中下位：22-23 シーズン)

D1 (7~12位)						
	日本	日本代表	A	A代表	B	C
1 : PR	80%	20%	0%	0%	0%	0%
2 : HO	68%	22%	10%	0%	0%	0%
3 : PR	54%	25%	13%	0%	1%	7%
4 : LO	37%	31%	10%	1%	16%	4%
5 : LO	30%	4%	1%	5%	37%	23%
6 : FL	49%	7%	9%	16%	4%	13%
7 : FL	72%	19%	8%	0%	1%	0%
8 : NO8	7%	2%	5%	22%	19%	45%
9 : SH	62%	8%	0%	0%	13%	16%
10 : SO	29%	0%	4%	0%	47%	20%
11 : WTB	35%	3%	41%	6%	13%	1%
12 : CTB	14%	1%	46%	1%	6%	31%
13 : CTB	46%	2%	16%	10%	12%	12%
14 : WTB	33%	43%	10%	2%	11%	0%
15 : FB	37%	2%	13%	4%	27%	16%

4) D2 上位のスタメン比率

D2 上位でも、フロントロー（PR・HO）や SH（9 番）で日本/JD が大勢を占める構図は変わらず、LO（4 番・5 番）は 4 番 LO を日本／B 混成、5 番 LO に C 枠が多いという配置だった。FL（6 番）や CTB（12 番）に A 外国人が入り、7 番 FL に日本人を当てる例が多く見られた点も、23-24 シーズンと同様である。NO8（8 番）や FB（15 番）に B 枠を割り、昇格に向けて重要ポジションへの外国人集中を図る傾向が一貫していた。2021-22～2023-24 の 3 年間を通じて、D2 上位は「LO に C／FL・CTB（12 番）に A／NO8・FB に B」というモデルが基本的に崩れずに続いていた。

表 20 カテゴリーごとのスタメン比率(D2 上位： 22-23 シーズン)

D2（1～3位）						
	日本	日本代表	A	A代表	B	C
1：PR	100%	0%	0%	0%	0%	0%
2：HO	60%	0%	0%	12%	28%	0%
3：PR	70%	26%	2%	0%	2%	0%
4：LO	70%	2%	12%	7%	5%	5%
5：LO	9%	0%	12%	0%	26%	53%
6：FL	16%	7%	28%	7%	42%	0%
7：FL	91%	0%	5%	0%	0%	5%
8：NO8	2%	0%	53%	0%	28%	16%
9：SH	56%	2%	0%	0%	2%	40%
10：SO	56%	9%	9%	0%	19%	7%
11：WTB	81%	9%	0%	7%	2%	0%
12：CTB	7%	0%	65%	2%	7%	19%
13：CTB	28%	0%	16%	30%	23%	2%
14：WTB	49%	0%	42%	9%	0%	0%
15：FB	5%	19%	2%	26%	37%	12%

第4項 21-22 シーズンのスタメン状況

1) 成績区分ごとのポジション別「主なカテゴリ」

2021-22 シーズンでも、大枠は後シーズンと変わらず、フロントロー（PR・HO）と SH（9 番）は日本・日本代表が中心で、LO（4 番・5 番）は B 外国人が多めに配置される編成が定着していた。NO8（8 番）では A（日本代表）がメインとなり、CTB（12 番）にも A が多数投入される一方、CTB（13 番）には B や C が混在して多様化をもたらす形が確認されている。WTB や FB は日本系を軸にしつつ、クラブごとに B や C 枠を部分的にあてていた点も、後年のシーズンと大きく変わらない傾向だった。

表 21 ポジション別「主なカテゴリ」(21-22)

	全体	D1 (1~6位)	D1 (7~12位)	D2 (1~3位)
1 : PR	J	JD	J	J
2 : HO	J	JD	J	J
3 : PR	J	J	J	J
4 : LO	J	AD	J	J
5 : LO	B	B	B	B
6 : FL	J	AD	J	A
7 : FL	J	J	J	J
8 : NO8	B	AD	B	B
9 : SH	J	JD	J	J
10 : SO	J	JD	B	B
11 : WTB	J	J	J	J
12 : CTB	JD	JD	J	J
13 : CTB	C	C	J	A
14 : WTB	J	JD	J	J
15 : FB	J	JD	J	B

J	日本
JD	日本代表
A	カテA
AD	カテA代表
B	カテB
C	カテC

2) 2D1 上位のスタメン比率

D1 上位では LO (4 番・5 番) の B 起用が圧倒的で、5 番では C 起用も少し見られた。NO8 (8 番) には A 代表枠が集中し、CTB (13 番) に C を割り当て、12 番 CTB には A を据えるという構成が多く見られた。PR・HO・SH は日本代表で固めるケースが多く、WTB・FB では日本人をベースに数割の B や C を混ぜる配置がされていた。

表 22 カテゴリごとのスタメン比率(D1 上位：21-22 シーズン)

	日本	日本代表	A	A代表	B	C
1 : PR	26%	62%	0%	12%	1%	0%
2 : HO	28%	65%	0%	0%	0%	7%
3 : PR	49%	35%	0%	2%	14%	0%
4 : LO	13%	13%	3%	46%	22%	3%
5 : LO	11%	2%	5%	5%	56%	20%
6 : FL	18%	17%	15%	28%	21%	1%
7 : FL	39%	24%	0%	10%	11%	16%
8 : NO8	9%	22%	5%	51%	6%	6%
9 : SH	40%	57%	0%	0%	2%	0%
10 : SO	24%	39%	0%	5%	1%	30%
11 : WTB	49%	14%	5%	2%	14%	16%
12 : CTB	4%	54%	4%	7%	14%	16%
13 : CTB	3%	2%	5%	28%	4%	57%
14 : WTB	13%	45%	18%	23%	0%	1%
15 : FB	24%	34%	0%	17%	11%	14%

4) D1 中下位のスタメン比率

D1 中下位のクラブでは、LO (4 番・5 番) に B 中心の起用が見られるものの、上位に比べ日本人スタメンの比率が高まり、一色にはならない形だった。NO8 (8 番) で C 枠を取り入れる例が上位より増加し、SO (10 番) や CTB (13 番) には A や B が混在。フロントローや FL など多くのポジションは日本系を主体としていたが、上位と違い日本代表で揃えるのは困難なため、B や C も散発的に利用されている状況がうかがえた。

表 23 カテゴリごとのスタメン比率(D1 中下位： 21-22 シーズン)

D1 (7~12位)						
	日本	日本代表	A	A代表	B	C
1 : PR	81%	18%	1%	0%	0%	0%
2 : HO	62%	23%	15%	0%	0%	0%
3 : PR	49%	26%	8%	0%	12%	5%
4 : LO	36%	34%	3%	0%	15%	12%
5 : LO	23%	0%	3%	11%	36%	27%
6 : FL	41%	5%	15%	1%	14%	24%
7 : FL	65%	22%	0%	0%	12%	1%
8 : NO8	11%	16%	23%	1%	28%	20%
9 : SH	69%	18%	0%	0%	0%	14%
10 : SO	16%	0%	22%	0%	43%	19%
11 : WTB	62%	7%	16%	7%	8%	0%
12 : CTB	27%	9%	15%	8%	20%	20%
13 : CTB	45%	11%	16%	15%	14%	0%
14 : WTB	65%	8%	24%	0%	3%	0%
15 : FB	50%	7%	0%	5%	15%	23%

5) D2 上位のスタメン比率

PR・HO・SH は日本や日本代表枠で安定し、LO (5 番) に C、FL (6 番)・CTB (12 番) に A を配置し、NO8 (8 番) や FB (15 番) に B を割り当てるモデルがすでに見受けられた。4 番 LO には日本と B が混在し、7 番 FL は日本人が主力を担うパターンも一貫して報告されている。昇格へのフォーメーションとして、セットピースに C、大型補強の A、そして NO8 や FB など要所に B を集中投下しながら、フロントロー・SH を日本系で固める編成が 2021-22 時点から定着していた。

表 24 カテゴリごとのスタメン比率(D2 上位： 21-22 シーズン)

	日本	日本代表	A	A代表	B	C
1 : PR	100%	0%	0%	0%	0%	0%
2 : HO	79%	0%	0%	0%	21%	0%
3 : PR	74%	26%	0%	0%	0%	0%
4 : LO	67%	8%	18%	8%	0%	0%
5 : LO	21%	5%	0%	0%	44%	31%
6 : FL	21%	8%	36%	21%	15%	0%
7 : FL	54%	0%	21%	21%	0%	5%
8 : NO8	3%	0%	21%	5%	62%	10%
9 : SH	67%	26%	0%	0%	0%	8%
10 : SO	28%	3%	0%	13%	49%	8%
11 : WTB	79%	15%	5%	0%	0%	0%
12 : CTB	23%	3%	21%	13%	21%	21%
13 : CTB	13%	15%	28%	26%	8%	10%
14 : WTB	97%	0%	0%	0%	3%	0%
15 : FB	8%	13%	3%	5%	41%	31%

第3節 D1 上位各チームのスタメン起用状況

第1項 3シーズンスタメン起用状況

1) 東芝のスタメンメンバー分析とカテゴリ別分析

PRには木村星南や三上正貴、HOには原田衛・橋本大吾ら日本籍（A日本・日本代表）の選手が多く、PR・HOともにほぼ国内選手で構成されていた。

LOでは4番がA代表中心に日本代表やBが混在し、5番はB外国人が78%と圧倒的に多い傾向で、FLは6番が日本・日本代表・A・Cが混在し、7番も同様に複数枠が入り交じっていた。NO8はA代表が52%を占め、Bは0、Cが10%だった。

SHは日本勢が92%と高く、Bが8%だった。SOはCが72%で主力を担い、日本・日本代表が合わせて28%だった。WTBは11番が日本94%、14番は日本30%+A代表70%で、右WTBに代表クラスが多く起用されていた。

CTBは12番が日本・日本代表・A・Bが混在（A36%）、13番はCが6~7割と最多。FB（15番）は日本が9割を占め、残りをB外国人が補う結果となっていた。

日本人選手（「日本」「日本代表」）のスタメン比率が全体的に上昇していたが、とりわけFL（7番）とWTB（14番）の伸びが顕著であった。具体的には、FL（7番）が18%から100%へと82ポイント、WTB（14番）が12%から41%へと29ポイントそれぞれ上昇し、特にFL（7番）の急激な伸びは日本人選手の起用方針が大きく変化していた。

表 25 カテゴリごとのスタメン比率(東芝：21-22~23-24シーズン)

東芝ブレイブルーパス東京						
	日本	日本代表	A	A代表	B	C
1：PR	68%	32%	0%	0%	0%	0%
2：HO	54%	46%	0%	0%	0%	0%
3：PR	88%	4%	8%	0%	0%	0%
4：LO	0%	6%	0%	86%	8%	0%
5：LO	4%	2%	0%	16%	78%	0%
6：FL	22%	32%	0%	24%	0%	22%
7：FL	38%	20%	0%	0%	0%	42%
8：NO8	2%	34%	2%	52%	0%	10%
9：SH	36%	56%	0%	0%	8%	0%
10：SO	6%	22%	0%	0%	0%	72%
11：WTB	94%	0%	0%	0%	2%	4%
12：CTB	24%	18%	36%	0%	22%	0%
13：CTB	0%	0%	14%	0%	20%	66%
14：WTB	30%	0%	0%	70%	0%	0%
15：FB	96%	0%	0%	0%	4%	0%

2) パナソニックのスタメンメンバー分析とカテゴリ別分析

稲垣啓太（日本代表A）と坂手淳史（日本代表A）をフロントローの軸とし、3番も基本は日本代表やA枠は見られず日本人のみの起用だった。LOは4・5番ともB/C枠が大半を占め、FLでは6番に日本代表+A代表、7番にB主体、NO8（8番）はA代表が多く使われていた。SHは日本人50%・日本代表50%のちょうど半々、SOは日本代表100%でほぼ松田力也らが占め、WTB（11番・14番）はC枠や日本が共存する形が多く、

CTB（12番・13番）ではB/C外国人率が高い器用であった。FBは日本代表が8割超の起用であった。

CTB（13番）とWTB（11番）で日本人選手（「日本」「日本代表」）のスタメン比率が大きく上昇していた。具体的には、WTB（11番）が0%から44%へと+44ポイント伸び、CTB（13番）も0%から11%へと+11ポイント増加していた。これら二つのポジションにおける日本人選手の起用割合増える変化がみられた。

表 26 カテゴリーごとのスタメン比率(パナソニック：21-22～23-24 シーズン)

埼玉パナソニックワイルドナイツ						
	日本	日本代表	A	A代表	B	C
1：PR	0%	60%	19%	21%	0%	0%
2：HO	6%	94%	0%	0%	0%	0%
3：PR	71%	29%	0%	0%	0%	0%
4：LO	8%	0%	23%	15%	54%	0%
5：LO	0%	0%	2%	0%	25%	73%
6：FL	27%	33%	0%	40%	0%	0%
7：FL	12%	13%	0%	6%	69%	0%
8：NO8	8%	15%	0%	75%	2%	0%
9：SH	50%	50%	0%	0%	0%	0%
10：SO	0%	100%	0%	0%	0%	0%
11：WTB	6%	17%	0%	0%	6%	71%
12：CTB	0%	8%	0%	0%	21%	71%
13：CTB	0%	10%	0%	88%	0%	2%
14：WTB	2%	94%	0%	0%	4%	0%
15：FB	15%	85%	0%	0%	0%	0%

3) サントリーのスタメンメンバー分析とカテゴリ別分析

フロントロー（1～3番）は日本/JDが8～9割前後で、小林賢太・森川由起乙・堀越康介ら代表級が固定。LO（4・5番）は4番でA代表+B枠、5番でB枠支配が顕著で、サム・ジェフリーズやハリー・ホッキングスが要となった。FLは6番に日本代表70%超、7番に日本+JD+少数Cを組み合わせ、NO8はA代表約6割・C2割でテビタ・タタフやショーン・マクマーンのパワーを引き出した。SH（9番）は日本代表100%で流大・齋藤直人が独占、SO（10番）は日本・B/Cの2～3割をミックスし、ダミアン・マッケンジー（C）ら海外スターを起用。WTB（11・14番）は11番が日本・B/C混在、14番が日本代表8～9割の左右差が明確。CTB（12・13番）は12番に日本/JD（6～7割）、13番にC・B枠を加味し、中村亮土やイザヤ・プニヴァイ（B）、サム・ケレビ（C）が核となった。FB（15番）は日本/JDが6割、Cが3割程度で、松島幸太朗（JD）やチェスリン・コルビ（C）がスター性を発揮した。

CTB（13番）とFB（15番）で日本人選手（「日本」「日本代表」）のスタメン比率が大きく上昇していた。具体的には、CTB（13番）が13%から67%へと+54ポイント、FB（15番）が26%から72%へと+46ポイントいずれも大幅に増加しており、この2つのポジションにおける日本人起用の伸びが際立つ結果となった。

表 27 カテゴリごとのスタメン比率(サントリー：21-22～23-24 シーズン)

	日本	日本代表	A	A代表	B	C
1：PR	24%	76%	0%	0%	0%	0%
2：HO	31%	69%	0%	0%	0%	0%
3：PR	33%	63%	0%	0%	4%	0%
4：LO	8%	16%	0%	41%	35%	0%
5：LO	14%	0%	0%	0%	86%	0%
6：FL	10%	71%	0%	6%	12%	2%
7：FL	65%	29%	0%	0%	0%	6%
8：NO8	12%	0%	0%	57%	12%	20%
9：SH	0%	100%	0%	0%	0%	0%
10：SO	75%	0%	0%	0%	2%	24%
11：WTB	35%	12%	0%	0%	41%	12%
12：CTB	14%	69%	0%	0%	16%	2%
13：CTB	24%	39%	0%	0%	12%	25%
14：WTB	14%	84%	0%	0%	0%	2%
15：FB	6%	63%	0%	0%	0%	31%

4) キヤノンのスタメンメンバー分析とカテゴリ別分析

PR（1 番・3 番）は日本籍選手が 9 割以上を占め、HO（2 番）もほぼ日本人+日本代表で構成され、LO（4 番・5 番）は A・B・C 枠を適度に組み合わせ、マッシュ・フィリップ（C）やリアキマタギ・モリ（A）がラインアウトの中心を担っていた。

FL（6 番）は B 外国人が 7 割超に対し、7 番は 8 割以上が日本人と左右で偏りがあり、NO8（8 番）は A 代表+国内育成を中心に B・C 枠を一部活用していた。SH（9 番）は日本人 6 割+C 枠 3 割で、ファフ・デクラーク（C）と国内出身の山菅一史が活躍し、SO（10 番）は田村優が 9 割超を担い、WTB（11 番・14 番）は 11 番が日本人 7 割超、14 番に A・B 枠を配置。CTB（12 番）は日本代表が 8～9 割、13 番は C 枠が 9 割近くを占め、ジェシー・クリエル（C）を中心に攻撃を展開。FB（15 番）は日本人 6 割、B 枠 4 割弱で、外国人をバックアップに配置する柔軟な起用が見られた。

日本人選手（「日本」「日本代表」）のスタメン比率が最も大きく上昇したのは FB（15 番）と WTB（11 番）であった。具体的には、FB（15 番）が 29%から 100%へと+71 ポイント、WTB（11 番）が 59%から 83%へと+24 ポイントそれぞれ増加しており、この二つのポジションにおける日本人起用の伸びが際立つ結果となっていた。

表 28 カテゴリごとのスタメン比率(キヤノン：21-22～23-24 シーズン)

	日本	日本代表	A	A代表	B	C
1：PR	94%	4%	2%	0%	0%	0%
2：HO	43%	57%	0%	0%	0%	0%
3：PR	96%	4%	0%	0%	0%	0%
4：LO	2%	0%	17%	26%	28%	26%
5：LO	6%	0%	40%	4%	6%	45%
6：FL	0%	4%	25%	0%	72%	0%
7：FL	85%	6%	6%	0%	4%	0%
8：NO8	2%	2%	30%	62%	4%	0%
9：SH	64%	4%	0%	0%	0%	32%
10：SO	9%	91%	0%	0%	0%	0%
11：WTB	51%	21%	23%	0%	6%	0%
12：CTB	11%	85%	0%	0%	2%	2%
13：CTB	8%	0%	0%	0%	4%	89%
14：WTB	2%	19%	77%	0%	0%	2%
15：FB	0%	58%	0%	0%	38%	4%

5) コベルコスタメンメンバー分析とカテゴリ別分析

コベルコ神戸スティーラーズでは、HO が日本人・日本代表合わせて約 100%を占め、たとえば松岡賢太や北出卓也ら国内育成の選手が安定してフロントローを支えていた。一方で PR には日本 40%・A 代表 51%という構成が目立ち、山下裕史（A 日本代表）など代表クラスが多く先発していた。LO では B や C 枠の外国人を積極的に活用し、中島イシレリ（A 代表）や小瀧尚弘（A 日本代表）がラインアウトを担うローテーションになっていた。SH は日和佐篤（日本代表）が約 9 割超の出場を続け、SO は A 代表 42%+B36%+C 20%というバランスで、李承信（A 代表）やブリン・ガットランド（B 外人）がゲームメイクを回していた。WTB は日本人主体で、アタタ・モエアキオラ（A 外人）や山下楽平（日本）といったランナーを試合展開によって使い分け、FB は日本 9%+日本代表 84%という極端な偏りがあり、山中亮平（日本代表）が後方を統率する場面が多かった。

日本人選手（「日本」「日本代表」）のスタメン比率が最も大きく上昇したのは WTB（14 番）と PR（1 番）であった。具体的には、WTB（14 番）が 8%から 100%へと+92 ポイントの大幅な伸びを示し、PR（1 番）は 38%から 69%へと+31 ポイント増加した。これら二つのポジションでの日本人選手起用の急伸し、チーム編成の方針に変化があった。

表 29 カテゴリごとのスタメン比率(コベルコ：21-22～23-24 シーズン)

コベルコ神戸スティーラーズ						
	日本	日本代表	A	A代表	B	C
1：PR	40%	9%	0%	51%	0%	0%
2：HO	76%	24%	0%	0%	0%	0%
3：PR	11%	49%	0%	40%	0%	0%
4：LO	9%	16%	22%	0%	53%	0%
5：LO	0%	7%	0%	0%	58%	36%
6：FL	49%	0%	9%	36%	7%	0%
7：FL	51%	9%	0%	0%	0%	40%
8：NO8	4%	0%	40%	29%	13%	13%
9：SH	7%	93%	0%	0%	0%	0%
10：SO	2%	0%	0%	42%	36%	20%
11：WTB	91%	0%	0%	9%	0%	0%
12：CTB	0%	0%	0%	31%	38%	31%
13：CTB	18%	0%	0%	44%	18%	20%
14：WTB	64%	0%	11%	24%	0%	0%
15：FB	9%	84%	0%	7%	0%	0%

6) クボタのスタメンメンバー分析とカテゴリ別分析

PR（1 番・3 番）や HO（2 番）で日本代表経験者や外国枠を幅広く組み合わせていたが、とくに HO ではマルコム・マークスやスカルク・エラスマス（いずれも外国勢）が大きな存在感を放っていた。LO（4 番・5 番）は A 代表や B 枠が半数以上を占め、たとえばルアン・ボタ（B 外人）など大型ロックを軸にラインアウトの安定を図った。FL（6 番・7 番）では 6 番に A/B の海外勢が多く投入され、7 番に日本人（71%）を配してバランスを取る構成が顕著だった。NO8（8 番）も A 代表 84%などパワフルな外国選手が支配的で、ゲラード・ファンデンヒーファーのようなフィジカルなプレーヤーが攻撃を牽引して

いた。

SH（9 番）は日本人 100%と偏りがあり、藤原忍やテアウパ・シオネら国内育成組が安定してゲームメイクを担っていた一方、SO（10 番）は C 枠 69%という極端な数字で、バーナード・フォーリー（C 外人）が司令塔として目立った。CTB（12・13 番）は日本代表が多く先発しながら、A・B・C 枠を混在させる多国籍構成で、立川理道（日本代表）らがプレーの中心になっていた。WTB（11・14 番）は日本人を主体に据えつつ、一部で海外スターを投入する形を取り、FB（15 番）は A 代表（69%）や C 枠（10%）の併用でゲラード・ファンデンヒーファーが大きな役割を果たしていた。

日本人選手（「日本」「日本代表」）のスタメン比率が最も大きく上昇していたのは FB（15 番）と FL（7 番）であった。具体的には、FB（15 番）が 0%から 35%へと+35 ポイント、FL（7 番）が 50%から 82%へと+32 ポイントそれぞれ増加しており、これらのポジションで日本人選手の起用が顕著に伸びていた。

表 30 カテゴリーごとのスタメン比率(クボタ：21-22～23-24 シーズン)

	日本	日本代表	A	A代表	B	C
1：PR	16%	82%	0%	0%	2%	0%
2：HO	29%	0%	0%	0%	8%	63%
3：PR	33%	20%	14%	0%	33%	0%
4：LO	31%	0%	0%	35%	33%	0%
5：LO	8%	0%	0%	0%	92%	0%
6：FL	6%	0%	53%	39%	2%	0%
7：FL	71%	0%	0%	29%	0%	0%
8：NO8	16%	0%	0%	84%	0%	0%
9：SH	100%	0%	0%	0%	0%	0%
10：SO	25%	6%	0%	0%	0%	69%
11：WTB	82%	10%	2%	6%	0%	0%
12：CTB	0%	84%	0%	0%	14%	2%
13：CTB	0%	0%	12%	43%	22%	24%
14：WTB	10%	67%	18%	6%	0%	0%
15：FB	22%	0%	0%	69%	0%	10%

第2項 D1 上位チームにおける 23-24 シーズンのスタメン分析

1) 東芝のスタメンメンバー分析とカテゴリ別分析

フロントロー（1 番 PR・2 番 HO・3 番 PR）を見ると、1 番 PR が日本 94%+日本代表 6%、HO が日本 88%+日本代表 12%、3 番 PR が日本 88%+A12%と、ほとんど国内勢で固められている。LO は 4 番・5 番ともに「A 代表」+「B」という組み合わせが大半で、4 番 LO に A 代表 82%、5 番 LO に A 代表 29%+B71%が割り当てられていた。

FL に目を移すと、6 番 FL で日本 35%+C65%という組み合わせがやや特徴的で、7 番 FL には日本 76%+日本代表 24%と国内勢中心。NO8 では A 代表（59%）が軸に据えられ、日本（6%）や A（6%）や C（29%）が追隨する配置が確認された。SH（9 番）は日本 88%+日本代表 12%で安定しており、SO（10 番）は日本 6%+日本代表 12%+C82%

で、C 外国人が実質的な主力を担う形が強い。

WTB では 11 番を日本 94%+B6%、14 番 WTB を日本代表 59%+日本 41%という二
分型で編成している。CTB（12 番・13 番）は 12 番が日本 47%+A41%+B12%、13 番
は B47%+C53%と、ポジションごとにカテゴリが大きく入れ替わる。FB（15 番）は日本
88%+B12%で、代表枠や A・C がほとんど出てこない構成だった。

表 31 カテゴリごとのスタメン比率(東芝：23-24 シーズン)

東芝ブレイブルーバス東京						
	日本	日本代表	A	A代表	B	C
1：PR	94%	6%	0%	0%	0%	0%
2：HO	88%	12%	0%	0%	0%	0%
3：PR	88%	0%	12%	0%	0%	0%
4：LO	0%	0%	0%	82%	18%	0%
5：LO	0%	0%	0%	29%	71%	0%
6：FL	35%	0%	0%	0%	0%	65%
7：FL	76%	24%	0%	0%	0%	0%
8：NO8	6%	0%	6%	59%	0%	29%
9：SH	88%	12%	0%	0%	0%	0%
10：SO	6%	12%	0%	0%	0%	82%
11：WTB	94%	0%	0%	0%	6%	0%
12：CTB	47%	0%	41%	0%	12%	0%
13：CTB	0%	0%	0%	0%	47%	53%
14：WTB	41%	0%	0%	59%	0%	0%
15：FB	88%	0%	0%	0%	12%	0%

2) パナソニックのスタメンメンバー分析とカテゴリ別分析

1 番 PR で日本代表（28%）+A44%+A 代表 28%という外国人風混在枠が注目ポイント。HO（2 番）では日本 6%・日本代表 94%で坂手淳史が絶対的な存在。3 番 PR は日本
61%・日本代表 39%と国内中心。LO は 4 番・5 番とも A/B/C 混在だが、B または C が
メインでロックを構成している。FL（6 番・7 番）は日本代表率が高く、NO8 は A 代表が
72%と圧倒。SH は日本 83%・日本代表 17%で内田啓介らがメイン、SO は日本代表 10
0%（松田力也）。WTB や CTB にも B/C 選手が多く組み込まれ、FB は日本・日本代表が
計 100%を占める。

表 32 カテゴリごとのスタメン比率(パナソニック：23-24 シーズン)

埼玉パナソニックワイルドナイツ						
	日本	日本代表	A	A代表	B	C
1：PR	0%	28%	44%	28%	0%	0%
2：HO	6%	94%	0%	0%	0%	0%
3：PR	61%	39%	0%	0%	0%	0%
4：LO	0%	0%	11%	22%	67%	0%
5：LO	0%	0%	6%	0%	28%	67%
6：FL	22%	33%	0%	44%	0%	0%
7：FL	6%	17%	0%	0%	78%	0%
8：NO8	11%	11%	0%	72%	6%	0%
9：SH	83%	17%	0%	0%	0%	0%
10：SO	0%	100%	0%	0%	0%	0%
11：WTB	11%	33%	0%	0%	0%	56%
12：CTB	0%	0%	0%	0%	22%	78%
13：CTB	0%	11%	0%	89%	0%	0%
14：WTB	0%	100%	0%	0%	0%	0%
15：FB	33%	67%	0%	0%	0%	0%

3) サントリーのスタメンメンバー分析とカテゴリ別分析

フロントローをほぼ日本代表で固め（小林・森川・堀越ら）、LO（4番・5番）はA代表+B枠で9割超やB枠100%の外国人依存（ジェフリーズ、ホッキングスなど）。FLは6番に日本代表（89%）集中、7番には日本・代表・C枠をブレンド。NO8（8番）はA4%・B22%・C22%で、テビタ・タタフ（A）やショーン・マクマーン（C）が活躍。SH（9番）は日本代表100%（流・齋藤）、SO（10番）は日本100%。WTB（11番）は日本56%+代表11%+C33%の多彩さに対し、14番は代表94%の極端偏重。CTB（12・13番）は代表+B+Cを組み合わせ（中村亮土、イザヤ・プニヴァイら）、FB（15番）は代表72%+C28%で松島・コルビが後方を盤石にした。

表 33 カテゴリごとのスタメン比率(サントリー：23-24 シーズン)

東京サントリーサンゴリアス						
	日本	日本代表	A	A代表	B	C
1：PR	39%	61%	0%	0%	0%	0%
2：HO	6%	94%	0%	0%	0%	0%
3：PR	44%	56%	0%	0%	0%	0%
4：LO	0%	6%	0%	11%	83%	0%
5：LO	0%	0%	0%	0%	100%	0%
6：FL	6%	89%	0%	6%	0%	0%
7：FL	83%	6%	0%	0%	0%	11%
8：NO8	11%	0%	0%	44%	22%	22%
9：SH	0%	100%	0%	0%	0%	0%
10：SO	100%	0%	0%	0%	0%	0%
11：WTB	56%	11%	0%	0%	0%	33%
12：CTB	11%	56%	0%	0%	33%	0%
13：CTB	61%	6%	0%	0%	33%	0%
14：WTB	0%	94%	0%	0%	0%	6%
15：FB	0%	72%	0%	0%	0%	28%

4) キヤノンのスタメンメンバー分析とカテゴリ別分析

1番・3番PRが日本100%で固められ、HO（2番）も日本72%+日本代表28%という国産フロントローがさらに強化されていた。LO（4番・5番）は4番がA枠+B枠+C枠を織り交ぜ、マックス・ダグラスやコリー・ヒルといった大型外国人を登用し、5番がC枠89%という極端な外国人依存型になっていた。

FL（6番）はB枠89%に対し、7番は日本勢83%という左右のコントラストが鮮明で、NO8（8番）はA代表78%を軸にアマナキ・レレイ・マフィらが後方からの攻撃を牽引していた。SH（9番）は日本78%+C枠22%で、ファフ・デクラーク（C）らが要所を固め、SO（10番）は9割近くを田村優（日本代表）が担い続けていた。

WTB（11番）は日本+日本代表+C枠が混在するバラエティ型、14番WTBがA枠主体という偏りが生まれており、松井千士（日本代表）やヴィリアメ・タカヤワ（A）などスピードランナーが左右を分担していた。CTB（12番）は日本代表+B/C枠の複合、13番CTBがC枠89%という偏極した布陣で、ジェシー・クリエル（C）らインパクトプレーヤーが起用されていた。FB（15番）は日本代表100%という数値で田村優や南橋直哉ら国内司令塔が後方に入り、試合終盤まで安定した布陣が組まれていた。

表 34 カテゴリごとのスタメン比率(キャノン：23-24 シーズン)

横浜キャノンイーグルス						
	日本	日本代表	A	A代表	B	C
1：PR	100%	0%	0%	0%	0%	0%
2：HO	72%	28%	0%	0%	0%	0%
3：PR	100%	0%	0%	0%	0%	0%
4：LO	6%	0%	50%	0%	39%	6%
5：LO	0%	0%	11%	0%	0%	89%
6：FL	0%	0%	11%	0%	89%	0%
7：FL	83%	0%	17%	0%	0%	0%
8：NO8	0%	0%	22%	78%	0%	0%
9：SH	78%	0%	0%	0%	0%	22%
10：SO	11%	89%	0%	0%	0%	0%
11：WTB	72%	11%	17%	0%	0%	0%
12：CTB	11%	78%	0%	0%	6%	6%
13：CTB	6%	0%	0%	0%	6%	89%
14：WTB	0%	6%	94%	0%	0%	0%
15：FB	0%	100%	0%	0%	0%	0%

5) コベルコのスタメンメンバー分析とカテゴリ別分析

PR と HO で日本勢がさらに高い比率を示し、PR の約 7 割を山下裕史ら国内経験者、HO の 8 割超を松岡賢太や北出卓也（日本代表）などが担っていた。LO は A 代表 63%+日本代表 19%で外国勢ロックを組み込みつつ、小瀧尚弘（A 日本代表）ら国内枠がサポートを行い、5 番 LO に C 枠 100%を充てるほど徹底した役割分担を行っていた。FL では A 代表 63%を 6 番に集中させる一方、7 番が C 枠 81%という左右差が顕著になり、サウマキアマナキ（A 外人）らを NO8（75%A 枠）と組み合わせてチームのパワーを底上げしていた。SH は日和佐篤（日本代表）が安定した先発で、SO では B100%が特徴的だったため、ブリン・ガットランドら海外スタンドオフが試合をコントロールしていた。WTB は日本 100%という極端な国内依存が続き、CTB（12 番・13 番）では C 枠が大きく配分され、ナニ・ラウマペ（C）ら強力センターが攻撃を牽引。FB は日本代表 69%+A 代表 19%で山中亮平（日本代表）が変わらず要所を締める展開が多かった。

表 35 カテゴリごとのスタメン比率(コベルコ：23-24 シーズン)

コベルコ神戸スティーラーズ						
	日本	日本代表	A	A代表	B	C
1：PR	69%	0%	0%	31%	0%	0%
2：HO	88%	13%	0%	0%	0%	0%
3：PR	0%	6%	0%	94%	0%	0%
4：LO	0%	19%	63%	0%	19%	0%
5：LO	0%	0%	0%	0%	0%	100%
6：FL	25%	0%	13%	63%	0%	0%
7：FL	19%	0%	0%	0%	0%	81%
8：NO8	0%	0%	75%	13%	6%	6%
9：SH	13%	88%	0%	0%	0%	0%
10：SO	0%	0%	0%	0%	100%	0%
11：WTB	100%	0%	0%	0%	0%	0%
12：CTB	0%	0%	0%	31%	19%	50%
13：CTB	0%	0%	0%	81%	0%	19%
14：WTB	100%	0%	0%	0%	0%	0%
15：FB	13%	69%	0%	19%	0%	0%

6) クボタのスタメンメンバー分析とカテゴリ別分析

PR（1番）に日本24%+日本代表76%という形で北川賢吾ら国内代表級が安定して先発し、HO（2番）はC枠59%を含めマルコム・マークスら外国勢が強く出ていた。3番PRに関しては日本53%+A41%といった混成で、オペティ・ヘルや才田智（A外人）らがスクラムを支え、LOは4番にA代表41%+B47%、5番にB100%という編成でルアン・ボタラ海外ロックがラインアウトの要になっていた。FL（6番・7番）は6番にA41%+A代表59%、7番に日本82%という左右差が大きく、ピーター・ラピース・ラブスカフニ（A外人）が6番で起用される試合が多かった。

NO8（8番）はA代表82%という数値から、ゲラード・ファンデンヒーファーのようなパワー型が主力を占め、SH（9番）は引き続き日本100%で藤原忍らが安定した球捌きを見せていた。SO（10番）は日本29%+日本代表18%+C53%という構成で、バーナード・フォーリー（C外人）が試合をコントロールし、WTB（11・14番）は11番が日本100%、14番が日本+日本代表で8割以上と国内色を強める布陣になっていた。CTB（12・13番）は12番で日本代表82%などマルチに使い、13番はA代表59%+B41%という数値から、海外パワーも交えた攻撃を展開していた。FB（15番）は日本35%+A代表35%+C29%という三分構成となっていた。

表 36 カテゴリごとのスタメン比率(クボタ 23-24 シーズン)

クボタスピアーズ船橋・東京ベイ						
	日本	日本代表	A	A代表	B	C
1 : PR	24%	76%	0%	0%	0%	0%
2 : HO	24%	0%	0%	0%	18%	59%
3 : PR	53%	6%	41%	0%	0%	0%
4 : LO	12%	0%	0%	41%	47%	0%
5 : LO	0%	0%	0%	0%	100%	0%
6 : FL	0%	0%	41%	59%	0%	0%
7 : FL	82%	0%	0%	18%	0%	0%
8 : NO8	18%	0%	0%	82%	0%	0%
9 : SH	100%	0%	0%	0%	0%	0%
10 : SO	29%	18%	0%	0%	0%	53%
11 : WTB	100%	0%	0%	0%	0%	0%
12 : CTB	0%	82%	0%	0%	18%	0%
13 : CTB	0%	0%	0%	59%	41%	0%
14 : WTB	6%	76%	6%	12%	0%	0%
15 : FB	35%	0%	0%	35%	0%	29%

第3項 D1 上位チームの 22-23 シーズンのスタメン起用状況

1) 東芝のスタメンメンバー分析とカテゴリ別分析

PRは、1番が日本75%+日本代表25%、3番が日本88%+A13%というデータで、HOも日本と日本代表が50%ずつだった。LO（4番・5番）は4番が日本代表6%+A代表94%と“代表枠”の集中、5番は日本+日本代表で計2割ほど残し、8割以上をB外国人が担う構造だった。フランカーの6番FLは日本31%+日本代表69%で代表色が強く、7番FLはCが44%という組み合わせだった。NO8（8番）は日本代表100%、SH（9番）には日本代表88%+B13%が入れ替わりで起用されていた。

SO（10 番）は C 枠 88%という高比率が大きな特徴である一方、WTB（11 番）が日本 100%に対し、14 番 WTB では日本 38%+A 代表 63%という数字が出ている。FB（15 番）は日本 100%で継続され、CTB（12 番・13 番）については 12 番に日本+日本代表+A+Bに分かれ、13 番は A や B を含むものの最も多いのは C 枠（69%）だった。

表 37 カテゴリーごとのスタメン比率(東芝：22-23 シーズン)

東芝ブレイブルーパス東京						
	日本	日本代表	A	A代表	B	C
1：PR	75%	25%	0%	0%	0%	0%
2：HO	50%	50%	0%	0%	0%	0%
3：PR	88%	0%	13%	0%	0%	0%
4：LO	0%	6%	0%	94%	0%	0%
5：LO	13%	6%	0%	0%	81%	0%
6：FL	31%	69%	0%	0%	0%	0%
7：FL	31%	25%	0%	0%	0%	44%
8：NO8	0%	0%	0%	100%	0%	0%
9：SH	0%	88%	0%	0%	13%	0%
10：SO	0%	13%	0%	0%	0%	88%
11：WTB	100%	0%	0%	0%	0%	0%
12：CTB	25%	6%	44%	0%	25%	0%
13：CTB	0%	0%	25%	0%	6%	69%
14：WTB	38%	0%	0%	63%	0%	0%
15：FB	100%	0%	0%	0%	0%	0%

2) パナソニックのスタメンメンバー分析とカテゴリ別分析

フロントローで PR が日本代表 72%+A 枠少数、HO が日本代表 94%、SH にも日本&日本代表が半々。LO は 4 番に A39%+B61%、5 番に B22%+C78%という外国人重視の編成が象徴的。FL（6 番・7 番）は日本代表や B 枠が入り混じり、NO8 は A 代表 83%という一極集中。WTB（11 番）では C78%が高水準で、12 番 CTB は日本代表 22%+B17%+C61%、13 番 CTB は日本代表 17%+A 代表 83%と、センター陣も外国人が軸。FB（15 番）は日本代表 100%で堅固だった。

表 38 カテゴリーごとのスタメン比率(パナソニック：22-23 シーズン)

	日本	日本代表	A	A代表	B	C
1：PR	0%	72%	11%	17%	0%	0%
2：HO	6%	94%	0%	0%	0%	0%
3：PR	72%	28%	0%	0%	0%	0%
4：LO	0%	0%	39%	0%	61%	0%
5：LO	0%	0%	0%	0%	22%	78%
6：FL	17%	56%	0%	28%	0%	0%
7：FL	17%	6%	0%	11%	67%	0%
8：NO8	0%	17%	0%	83%	0%	0%
9：SH	39%	61%	0%	0%	0%	0%
10：SO	0%	100%	0%	0%	0%	0%
11：WTB	6%	17%	0%	0%	0%	78%
12：CTB	0%	22%	0%	0%	17%	61%
13：CTB	0%	17%	0%	83%	0%	0%
14：WTB	6%	83%	0%	0%	11%	0%
15：FB	0%	100%	0%	0%	0%	0%

3) サントリーのスタメンメンバー分析とカテゴリ別分析

フロントローに代表級（小林・森川・堀越）をそろえ、LO（4 番）は日本 17%+A 代

表 67%+B17%、5 番が B94%の外国勢を活かす編成。FL は 6 番が代表中心、7 番が日本主体、NO8（8 番）は A 代表 78%でデビタ・タタフを多用。SH（9 番）は代表 100%（流・齋藤）、SO（10 番）は日本 44%+C56%でアーロン・クルーデン（C）らを併用。WTB（11・14 番）は 11 番が B 多め、14 番に松島（代表）という左右のコントラストが顕著。CTB で 12 番は代表 78%、13 番は代表 94%の偏重で中村亮土やサム・ケレビ（C）が中心に。FB（15 番）は代表 94%の松島が独占して大きく貢献した。

表 39 カテゴリーごとのスタメン比率(サントリー：22-23 シーズン)

	日本	日本代表	A	A代表	B	C
1 : PR	28%	72%	0%	0%	0%	0%
2 : HO	56%	44%	0%	0%	0%	0%
3 : PR	39%	61%	0%	0%	0%	0%
4 : LO	17%	0%	0%	67%	17%	0%
5 : LO	6%	0%	0%	0%	94%	0%
6 : FL	17%	67%	0%	0%	17%	0%
7 : FL	89%	11%	0%	0%	0%	0%
8 : NO8	17%	0%	0%	78%	6%	0%
9 : SH	0%	100%	0%	0%	0%	0%
10 : SO	44%	0%	0%	0%	0%	56%
11 : WTB	22%	0%	0%	0%	78%	0%
12 : CTB	6%	78%	0%	0%	11%	6%
13 : CTB	6%	94%	0%	0%	0%	0%
14 : WTB	17%	83%	0%	0%	0%	0%
15 : FB	6%	94%	0%	0%	0%	0%

4) キヤノンのスタメンメンバー分析とカテゴリ別分析

1 番 PR が日本 94%+A 枠 6%、3 番 PR が日本 100%と国内が主体となり、HO（2 番）も日本 44%+日本代表 56%で庭井祐輔ら代表級を多く配置していた。LO では 4 番が B+C 枠（合わせて 100%）、5 番が A+B の組み合わせとなり、マシュー・フィリップ（C）やコーバス・ファンダイク（B）がラインアウトをリードしていた。

FL（6 番）は A や B 外国人が多く、7 番は日本 83%+日本代表 6%+B11%など国内比率が高めだった。NO8（8 番）は A 枠 67%+A 代表 33%でアマナキ・レレイ・マフィが活躍し、SH（9 番）は C 枠 72%とファフ・デクラーク（C）の存在が際立っていた。SO（10 番）は日本代表 100%で田村優が固定的に起用され、WTB（11 番・14 番）は 11 番が日本+日本代表+A 枠の混在、14 番が A 枠 100%というように左右で大きな差があった。

CTB（12 番）は日本 22%+日本代表 78%、13 番が C 枠 94%という極端な数値で、後者ではジェシー・クリエル（C）らが攻撃を引っ張った。FB（15 番）は日本代表 44%+B 56%という分布で、後方を外国人が守る編成も目立っていた。

表 40 カテゴリごとのスタメン比率(キャノン：22-23 シーズン)

横浜キャノンイーグルス						
	日本	日本代表	A	A代表	B	C
1 : PR	94%	0%	6%	0%	0%	0%
2 : HO	44%	56%	0%	0%	0%	0%
3 : PR	100%	0%	0%	0%	0%	0%
4 : LO	0%	0%	0%	0%	44%	56%
5 : LO	6%	0%	78%	0%	11%	6%
6 : FL	0%	0%	56%	0%	44%	0%
7 : FL	83%	6%	0%	0%	11%	0%
8 : NO8	0%	0%	67%	33%	0%	0%
9 : SH	28%	0%	0%	0%	0%	72%
10 : SO	0%	100%	0%	0%	0%	0%
11 : WTB	44%	28%	28%	0%	0%	0%
12 : CTB	22%	78%	0%	0%	0%	0%
13 : CTB	0%	0%	0%	0%	6%	94%
14 : WTB	0%	0%	100%	0%	0%	0%
15 : FB	0%	44%	0%	0%	56%	0%

5) コベルコのスタメンメンバー分析とカテゴリ別分析

フロントローでは、HO が日本 94%+日本代表 6%という偏りが大きく、PR においては日本 31%+日本代表 63%で、具智元（A 日本代表）や山下裕史（A 日本代表）といった代表級が安定感を見せていた。LO では B 枠や A 外人を活かしつつ、小瀧尚弘（A 日本代表）が 4 番・5 番をローテーションし、FL と NO8 に A 代表や C 枠をブレンドする形でチームの後方を強化していた。SH は 94%を日和佐篤（日本代表）が務め、SO で A 代表 88%が占められたことで、李承信（A 代表）が司令塔として頻繁に起用されていた。WTB（11・14 番）は日本勢が 7~8 割ほどでアタアタ・モエアキオラ（A 外人）を適宜配置し、CTB は B や C を交えた多国籍ユニットを構成。FB では日本代表 100%の起用が顕著で山中亮平が大半の試合でフルバックを務めていた。

表 41 カテゴリごとのスタメン比率(コベルコ：22-23 シーズン)

コベルコ神戸スティーラーズ						
	日本	日本代表	A	A代表	B	C
1 : PR	25%	13%	0%	63%	0%	0%
2 : HO	94%	6%	0%	0%	0%	0%
3 : PR	31%	63%	0%	6%	0%	0%
4 : LO	25%	6%	0%	0%	69%	0%
5 : LO	0%	6%	0%	0%	94%	0%
6 : FL	56%	0%	0%	38%	6%	0%
7 : FL	69%	0%	0%	0%	0%	31%
8 : NO8	0%	0%	6%	50%	13%	31%
9 : SH	6%	94%	0%	0%	0%	0%
10 : SO	6%	0%	0%	88%	0%	6%
11 : WTB	81%	0%	0%	19%	0%	0%
12 : CTB	0%	0%	0%	13%	63%	25%
13 : CTB	50%	0%	0%	19%	31%	0%
14 : WTB	75%	0%	0%	25%	0%	0%
15 : FB	0%	100%	0%	0%	0%	0%

6) クボタのスタメンメンバー分析とカテゴリ別分析

HO（2 番）でマルコム・マークスやスカルク・エラスマスが起用され C 枠が 83%、PR（1 番・3 番）も日本代表や B 枠を織り交ぜた混合起用が行われた。LO（4 番・5 番）は

4番でA代表39%+B22%、5番でB89%と外国勢が中心となり、ルアン・ボタ（B外人）らの大型選手がラインアウトを支配していた。FLは6番がA50%+A代表33%でピーター・ラピース・ラブスカフニを起用し、7番は日本78%+A代表22%と国内勢を起用していた。NO8はA代表83%とゲラード・ファンデンヒーファーのような外国出身パワーランナーが多く先発し、SH（9番）は日本100%で藤原忍らが起用されていた。

SO（10番）はC枠89%によりバーナード・フォーリーがメインを務め、WTB（11番・14番）は11番が日本+A代表中心、14番が日本代表83%+A11%など海外とのミックスだった。CTBは12番が日本代表78%で立川理道やリウム・ウィリアムズ（C外人・一部ポジション変動あり）が攻撃の核を担いつつ、13番はA・B・C枠を複雑に組み合わせて多国籍ユニットを形成していた。FB（15番）はA代表72%という極端な数字で、ゲラード・ファンデンヒーファーが後方を支えていた。

表 42 カテゴリーごとのスタメン比率(クボタ：22-23 シーズン)

クボタスピアーズ船橋・東京ベイ						
	日本	日本代表	A	A代表	B	C
1：PR	22%	78%	0%	0%	0%	0%
2：HO	11%	0%	0%	0%	6%	83%
3：PR	39%	28%	0%	0%	33%	0%
4：LO	39%	0%	0%	39%	22%	0%
5：LO	11%	0%	0%	0%	89%	0%
6：FL	17%	0%	50%	33%	0%	0%
7：FL	78%	0%	0%	22%	0%	0%
8：NO8	17%	0%	0%	83%	0%	0%
9：SH	100%	0%	0%	0%	0%	0%
10：SO	11%	0%	0%	0%	0%	89%
11：WTB	89%	0%	0%	11%	0%	0%
12：CTB	0%	78%	0%	0%	22%	0%
13：CTB	0%	0%	22%	28%	22%	28%
14：WTB	0%	83%	11%	6%	0%	0%
15：FB	28%	0%	0%	72%	0%	0%

第4項 D1 上位各チームの 21-22 シーズンのスタメン起用状況

1) 東芝のスタメンメンバー分析とカテゴリ別分析

フロントローに関して、1番PRが日本35%+日本代表65%、2番HOも日本24%+日本代表76%、3番PRが日本88%+日本代表12%というように、国内勢（特に代表資格組）にほぼ固定されていた。LOは4番LOで日本代表12%+A代表82%+B6%、5番LOでA代表18%+B82%と、外国人（B）とA代表のペアで起用する形になっていた。

FLは6番に日本代表29%+A代表71%がほぼ独占するのに対し、7番には日本6%・日本代表12%・C82%という配分が示され、後者がC枠中心で少し異なる姿を見せている。NO8は日本代表100%という結果が突出しており、SH（9番）でも日本18%+日本代表71%+B12%と国内勢が大半。SO（10番）は日本12%+日本代表41%+C47%で、代表枠とC外国人が分け合う形だった。

WTB（11番・14番）は11番が日本88%+C12%、14番が日本12%+A代表88%

と、日本人（A）、B・C外国人を両サイドで組み合わせることで、出場枠の制限をおぎなっていた。CTB では 12 番に日本代表 47%+A24%+B29%を組み合わせ、13 番に A18%+B6%+C76%という形で、こちらは C 枠の比率が突出するポジションとして確立されていた。FB（15 番）は日本 100%だった。

表 43 カテゴリーごとのスタメン比率(東芝：21-22 シーズン)

東芝プレイブルーパス東京						
	日本	日本代表	A	A代表	B	C
1：PR	35%	65%	0%	0%	0%	0%
2：HO	24%	76%	0%	0%	0%	0%
3：PR	88%	12%	0%	0%	0%	0%
4：LO	0%	12%	0%	82%	6%	0%
5：LO	0%	0%	0%	18%	82%	0%
6：FL	0%	29%	0%	71%	0%	0%
7：FL	6%	12%	0%	0%	0%	82%
8：NO8	0%	100%	0%	0%	0%	0%
9：SH	18%	71%	0%	0%	12%	0%
10：SO	12%	41%	0%	0%	0%	47%
11：WTB	88%	0%	0%	0%	0%	12%
12：CTB	0%	47%	24%	0%	29%	0%
13：CTB	0%	0%	18%	0%	6%	76%
14：WTB	12%	0%	0%	88%	0%	0%
15：FB	100%	0%	0%	0%	0%	0%

2) パナソニックのスタメンメンバー分析とカテゴリ別分析

PR は日本代表（81%）+A 代表（19%）など代表寄りが中心。HO（2 番）に坂手淳史（日本）6%・日本代表 94%、SH（9 番）では日本・日本代表がほぼ全体を占める。LO（4 番）は日本 25%+A19%+A 代表 25%+B31%と多彩だが、5 番は B・C 合わせて 100%近い外国人構成だった。FL は 6 番を日本&日本代表、7 番を日本+B+A 代表少数で切り替え、NO8 は A 代表（69%）メイン。WTB（11 番）が B や C の比率が高く、12 番 CTB にも B・日本代表が並び、13 番 CTB は A 代表+C 枠が顕著。FB（15 番）は日本と日本代表で計 100%だった。

表 44 カテゴリーごとのスタメン比率(パナソニック：21-22 シーズン)

埼玉パナソニックワイルドナイツ						
	日本	日本代表	A	A代表	B	C
1：PR	0%	81%	0%	19%	0%	0%
2：HO	6%	94%	0%	0%	0%	0%
3：PR	81%	19%	0%	0%	0%	0%
4：LO	25%	0%	19%	25%	31%	0%
5：LO	0%	0%	0%	0%	25%	75%
6：FL	44%	6%	0%	50%	0%	0%
7：FL	13%	19%	0%	6%	63%	0%
8：NO8	13%	19%	0%	69%	0%	0%
9：SH	25%	75%	0%	0%	0%	0%
10：SO	0%	100%	0%	0%	0%	0%
11：WTB	0%	0%	0%	0%	19%	81%
12：CTB	0%	0%	0%	0%	25%	75%
13：CTB	0%	0%	0%	94%	0%	6%
14：WTB	0%	100%	0%	0%	0%	0%
15：FB	13%	88%	0%	0%	0%	0%

3) サントリーのスタメンメンバー分析とカテゴリ別分析

1 番 PR が代表 100% という極端な特徴が目を引き、HO も日本 33% + 代表 67%。3 番 PR では日本 13% + 代表 73% + B 枠 13% が混在。LO は 4 番で日本 + 代表 + A 代表が拮抗、5 番は日本 40% + B60%、FL は 6 番が多彩なカテゴリ、7 番は代表 80% 主体。NO8 (8 番) は A47% + C40% で外国勢の攻撃力を強化。SH (9 番) は代表 100% (流・齋藤)、SO (10 番) は日本 80% + C13% の併用。WTB は 11 番が日本・代表・B をまぜ、14 番が代表 73% と左右差を出し、CTB (12 番) は代表 73%、13 番は C 枠 87% という大胆な組み合わせ。FB (15 番) は日本 13% + 代表 13% + C73% という枠割り、松島らが起用されていた。

表 45 カテゴリごとのスタメン比率(サントリー：21-22 シーズン)

東京サントリーサンゴリアス						
	日本	日本代表	A	A代表	B	C
1 : PR	0%	100%	0%	0%	0%	0%
2 : HO	33%	67%	0%	0%	0%	0%
3 : PR	13%	73%	0%	0%	13%	0%
4 : LO	7%	47%	0%	47%	0%	0%
5 : LO	40%	0%	0%	0%	60%	0%
6 : FL	7%	53%	0%	13%	20%	7%
7 : FL	13%	80%	0%	0%	0%	7%
8 : NO8	7%	0%	0%	47%	7%	40%
9 : SH	0%	100%	0%	0%	0%	0%
10 : SO	80%	0%	0%	0%	7%	13%
11 : WTB	27%	27%	0%	0%	47%	0%
12 : CTB	27%	73%	0%	0%	0%	0%
13 : CTB	0%	13%	0%	0%	0%	87%
14 : WTB	27%	73%	0%	0%	0%	0%
15 : FB	13%	13%	0%	0%	0%	73%

4) キヤノンのスタメンメンバー分析とカテゴリ別分析

1 番・3 番 PR は日本 88% + 日本代表 12% と国産が中心になり、HO (2 番) は日本 12% + 日本代表 88% という極端に代表寄りの布陣になっていた。LO は 4 番で A 代表 82% + C 枠 18%、5 番で日本・A・B・C が入り乱れる複合型となり、マシュー・フィリップ (C) などが高いラインアウト能力を発揮していた。

FL では 6 番が B 枠 82%、7 番が日本 + 日本代表 100% と明確に役割を振り分け、NO8 は A 代表 76% + B12% + 日本少数という構成でアマナキ・レレイ・マフィ (A 代表) が起用されていた。SH (9 番) は日本 88% + 日本代表 12% と国内選手を重視し、SO (10 番) は日本 18% + 日本代表 82% で田村優らが司令塔を独占した。

WTB (11 番・14 番) では 11 番が日本・日本代表・B が混在し、14 番も A 枠や代表枠を組み合わせ、松井千士 (日本代表) らのスピードを生かす形が多かった。CTB (12 番) は日本代表 100%、13 番が C 枠 82% でジェシー・クリエル (C) を筆頭に外国人パワーを厚めに配分。FB (15 番) は日本代表 29% + B59% という割合で、外国人を後方に据える試合も多く見られた。

表 46 カテゴリごとのスタメン比率(キャノン：21-22 シーズン)

横浜キャノンイーグルス						
	日本	日本代表	A	A代表	B	C
1：PR	88%	12%	0%	0%	0%	0%
2：HO	12%	88%	0%	0%	0%	0%
3：PR	88%	12%	0%	0%	0%	0%
4：LO	0%	0%	0%	82%	0%	18%
5：LO	12%	0%	29%	12%	6%	41%
6：FL	0%	12%	6%	0%	82%	0%
7：FL	88%	12%	0%	0%	0%	0%
8：NO8	6%	6%	0%	76%	12%	0%
9：SH	88%	12%	0%	0%	0%	0%
10：SO	18%	82%	0%	0%	0%	0%
11：WTB	35%	24%	24%	0%	18%	0%
12：CTB	0%	100%	0%	0%	0%	0%
13：CTB	18%	0%	0%	0%	0%	82%
14：WTB	6%	53%	35%	0%	0%	6%
15：FB	0%	29%	0%	0%	59%	12%

5) コベルコのスタメンメンバー分析とカテゴリ別分析

PR は日本 23%+日本代表 15%+A 代表 62%という形で代表比率が非常に高く、HO には日本 38%+日本代表 62%が集まり、北出卓也や有田隆平（A 日本代表）ら国内の代表クラスが中心になっていた。3 番 PR も日本代表 85%と突出し、具智元（日本代表）や山下裕史（A 日本代表）がほぼ独占していた。LO は 4 番・5 番ともに B 枠（77~85%）を活かす外国人依存型で、ブロディ・レタリック（C）やジェラード・カウリートゥイオティ（B）が大きな存在感を示していた。FL と NO8 では日本人の中に A 代表・B 枠を組み込み、サウマキアマナキ（A 外人）らがインパクトを与え、SH は日本代表 100%の日和佐篤が指揮を執る展開が続いていた。SO に至っては A 代表 38%+C62%という割合で、李承信やアーロン・クルーデン（C 枠）らが司令塔を担い、WTB が日本や A 代表をベースにスピードを重視。最後に FB は日本 15%+日本代表 85%の偏極した結果となり、山中亮平が後方の大半をカバーしていた。

表 47 カテゴリごとのスタメン比率(コベルコ：21-22 シーズン)

コベルコ神戸スティーラーズ						
	日本	日本代表	A	A代表	B	C
1：PR	23%	15%	0%	62%	0%	0%
2：HO	38%	62%	0%	0%	0%	0%
3：PR	0%	85%	0%	15%	0%	0%
4：LO	0%	23%	0%	0%	77%	0%
5：LO	0%	15%	0%	0%	85%	0%
6：FL	69%	0%	15%	0%	15%	0%
7：FL	69%	31%	0%	0%	0%	0%
8：NO8	15%	0%	38%	23%	23%	0%
9：SH	0%	100%	0%	0%	0%	0%
10：SO	0%	0%	0%	38%	0%	62%
11：WTB	92%	0%	0%	8%	0%	0%
12：CTB	0%	0%	0%	54%	31%	15%
13：CTB	0%	0%	0%	31%	23%	46%
14：WTB	8%	0%	38%	54%	0%	0%
15：FB	15%	85%	0%	0%	0%	0%

6) クボタのスタメンメンバー分析とカテゴリ別分析

PR（1番）は日本代表 94%で北川賢吾や島田悠平らがスクラムを安定させ、HO（2番）では 56%が日本、44%が C という形からマルコム・マークス（C 外人）が大きくチームを牽引していた。3 番 PR は日本 6%+日本代表 25%に加えて B69%と海外偏重の構成になり、LO（4 番・5 番）も A 代表 25%や B・C 枠を活用した大型陣が並んでいた。FL（6 番）に A69%+A 代表 25%という数字からピーター・ラピース・ラブスカフニがほぼ固定され、7 番 FL は日本 50%+A50%という分散パターンで国内外を融合させた。

NO8（8 番）は A 代表 88%でゲラード・ファンデンヒーファーがアタック面で目立ち、SH（9 番）は日本人 100%でテアウパ・シオネや藤原忍らが起用され続けた。SO（10 番）は日本 38%+C63%によってバーナード・フォーリー（C 外人）を核にゲーム展開を組み立て、WTB（11・14 番）は日本・日本代表・A 枠をバランスよく配分し、CTB（12 番）が日本代表 94%で立川理道らが攻守の核となっていた。13 番では A・B・C が入り混じる多様型で、ルアン・ボタやデーヴィッド・ブルブリング（いずれも B 外人）も含めローテーションが多用された。FB（15 番）は A 代表 100%を示すデータからゲラード・ファンデンヒーファーがフルバックをほぼ独占し、チームに大きく貢献していた。

表 48 カテゴリごとのスタメン比率(クボタ：21-22 シーズン)

クボタスピアーズ船橋・東京ベイ						
	日本	日本代表	A	A代表	B	C
1：PR	0%	94%	0%	0%	6%	0%
2：HO	56%	0%	0%	0%	0%	44%
3：PR	6%	25%	0%	0%	69%	0%
4：LO	44%	0%	0%	25%	31%	0%
5：LO	13%	0%	0%	0%	88%	0%
6：FL	0%	0%	69%	25%	6%	0%
7：FL	50%	0%	0%	50%	0%	0%
8：NO8	13%	0%	0%	88%	0%	0%
9：SH	100%	0%	0%	0%	0%	0%
10：SO	38%	0%	0%	0%	0%	63%
11：WTB	56%	31%	6%	6%	0%	0%
12：CTB	0%	94%	0%	0%	0%	6%
13：CTB	0%	0%	13%	44%	0%	44%
14：WTB	25%	38%	38%	0%	0%	0%
15：FB	0%	0%	0%	100%	0%	0%

第 3 節 日本代表選手と所属チームの関連

2021～2024 年に実施された日本代表試合（スタメン・リザーブ登録）とリーグワンの登録データを照合すると、D1 上位チーム出身者の代表入りが圧倒的に多い事実が確認されていた。スクラムハーフ（SH）、スタンドオフ（SO）、フルバック（FB）などは国内選手がそのままクラブでも主体を担う構図が代表選出にも直結しており、ロック（LO）やナンバーエイト（No.8）に関しては外国人選手に頼るチームが多いため、日本人 LO の代表入り事例は依然少数だった。ただし、D1 に昇格した若手日本人 LO が 190～195cm 級の体格を活かして定着し、代表候補合宿まで進むケースが少数ながら見られ、国内育成の可能性も示唆されていた。

表 49 日本代表外国人選手（カテゴリーA）の出場状況

ポジション	番号	2021	2022	2023	2024
PR	1・3	5	4	3	0
HO	2	0	0	0	0
LO	4.5	13	20	18	13
FL	6・7	12	13	14	9
NO8	8	3	10	2	7
SH	9	0	0	0	0
SO	10	0	0	0	0
CTB	1 2・1 3	5	11	8	13
WTB	1 1・1 4	12	14	13	9
FB	15	1	0	4	0
HO	16	0	0	0	0
PR	1 7・1 8	10	4	13	0
19		5	6	8	6
20		6	8	5	6
21		1	1	0	0
22		0	3	3	1
23		5	5	3	0

第4節 B 外国人・C 外国人選手の特徴

第1項 B 外国人

1) 獲得経路

3シーズンでロックに登録されているB外国人選手は61名おり、スーパーラグビー経験者が最も多く34名(55.7%)次に各国プロリーグ経験者が11名(18.0%)、生え抜きとして日本の大学卒業選手が9名(14.8%)、海外の高校・大学・クラブアカデミー出身選手が7名(11.5%)であった

表 50 B 外国人（ロック）の獲得経路

(N=61)

獲得方法	所属	人数(N)	人数(%)	平均年齢
移籍	スーパーラグビー	34	55.7%	27.4
	各国プロリーグ	11	18.0%	27.8
生え抜き	日本の大学	9	14.8%	23.7
	海外の高校・大学・クラブ	7	11.5%	23.0
総計		61		

2) 身体的特徴

D1上位からD2上位にわたって3シーズン連続で在籍したB外国人ロックは17名存在し、平均身長が198.1cm、平均体重が115.1kgであった。これは日本人LOより平均+8.1cm、+8.0kgに相当し、A外国人LOとの比較では+2.6cm、+0.6kgの差異を示していた。

身長・体重の分布は D1 上位、D1 下位、D2 上位の間で大きな差はなく、20～24 歳、25～29 歳、30 歳以上のいずれの年代層も含まれていた。

表 51 カテゴリ別スタメン経験者

(21-22～23-24 延べ人数)

	日本人 (N=16)	A外国人 (N=6)	B外国人 (N=17)	C外国人 (N=8)
平均身長(cm)	190.0	195.5	198.1	199.8
平均体重(kg)	107.1	114.5	115.1	120.8
平均年齢	29.3	30.5	27.3	30.8

3) ロック (LO) の身長分布

4 シーズン (2021-22～2024-25) でロック (LO) 登録全選手の身長帯を追跡した結果、登録総数に大きな増減はなかった。一方、200cm 以上の比率が 17%から 22%へ増加し、190cm 未満は 29～30%から 24～26%に減少していた。ディビジョン 1 (D1) 上位クラブほど 2m 超 LO を揃え、ラインアウトや接点で優位を得やすくしていた一方、ディビジョン 2 (D2) では 2m 超 LO の確保が 1 名程度のチームが多く、残りを 185～190cm 級の日本人選手で補う傾向がみられた。

表 52 LO 身長分布

シーズン	LO登録総数(名)	200cm以上(%)	195～199cm(%)	190～194cm(%)	190cm未満(%)
2021-22	140	17	24	30	29
2022-23	142	18	23	29	30
2023-24	144	21	20	33	26
2024-25	139	22	23	31	24

第 2 項 C 外国人

ロック (LO) やナンバーエイト (No.8)、センター (CTB)、スタンドオフ (SO) といったチームの軸となるポジションにカテゴリ C 外国人が集まりやすい傾向が、4 シーズンとしてみられた。特に D1 上位では 2m を超える LO や世界的 CTB によって高い競技力と注目度を得る一方、D2 のクラブはカテゴリ C の複数人獲得が困難であり、ディビジョン間における戦力格差が顕著になっていた。2021-22 シーズンから 2024-25 シーズンにかけてカテゴリ C 全体数は 51 名→52 名→56 名→55 名と微増あるいは横ばいで推移し、ポジション別には CTB が 22～25%と最多で、続いて SO、LO が上位を占めていた。

表 53 カテゴリ C 調査

シーズン	CTB	SO	LO	FL	No8	SH	WTB	FB	PR+HO
2021-22 (合計51名)	24%	18%	14%	14%	6%	8%	2%	10%	4%
2022-23 (合計52名)	25%	13%	17%	10%	8%	10%	10%	4%	3%
2023-24 (合計56名)	23%	20%	16%	11%	9%	7%	4%	7%	3%
2024-25 (合計55名)	22%	13%	16%	13%	11%	11%	5%	5%	4%

1) C 外国人センター

D1 上位所属の C 外国人センターは 3 シーズン合計 8 名を数え、南アフリカ代表経験が 3 名、ニュージーランド代表経験が 3 名、オーストラリア代表 1 名、ウェールズ代表 1 名という内訳であった。ニュージーランドやオーストラリア代表歴を持つ 2 名はフィジー代表歴も兼ね備え、全員がスーパーラグビーでのプレー経験を有していた。このうち英国プレミアシップ経験者 1 名、フランスのトップ 14 を経験する選手 2 名が含まれ、世界的なビッグリーグを経てリーグワンに加入するスターが多数存在していた。

総じて、B 外国人はロック (LO) に集中し、C 外国人はセンター (CTB) が最多ポジションであるという 4 シーズンを通じた傾向が裏付けられた。また、スタメン起用においては D1・D2 の順位や予算規模に応じて B・C 外国人の配置方針が変化しており、特にロック (LO) とセンター (CTB) の 2 ポジションが外国人依存度の高い構造であることが認められた。B 外国人ロックは体格面で日本人選手に優位性を示し、C 外国人センターは世界的代表歴をもつスターが集まるポジションとして機能していた。

表 54 センターでスタメン経験のある C 外国人の経歴

国籍	人数	代表歴(※)		スーパー ラグビー	トップ14 プレミアシップ
		出身国	他国		
南アフリカ	3	3	—	3	プレミアシップ(1)
ニュージーランド	2	2	—	2	トップ14(1)
フィジー	2	1	NZ(1)、AUS(1)	2	トップ14(1)
ウェールズ	1	1	—	1	-

第4章 考察

本研究では、リーグワン上位チームのスタメン起用分析を通して、B・C外国人選手の活躍しているポジションと各チームに在籍する外国籍選手のリーグワンに至った経緯を調査した。その結果、リーグワンにおける外国人選手のスタメン起用にはチームの成績区分やポジションの特性に応じた明確な傾向があることが分かった。特に、B 外国人選手と C 外国人選手の起用には、ポジションの役割や競技力向上の目標に基づいた違いが見られた。

本項では、全体的な傾向を踏まえながら、B 外国人選手と C 外国人選手それぞれの起用の特徴、役割と貢献、獲得方針、さらには日本人選手の起用も含めたチーム全体の起用の特徴を中心に考察する。

第1節 リーグワン外国人選手がスタメン起用されるポジション

スタメン調査結果から、B 外国人選手は成績区分ごとに異なるポジションで起用されており、各チームが戦術的課題を補完する形で配置を行っていることが示され、C 外国人選手の起用ポジションやその役割が成績区分ごとに異なる特徴を持つことが明らかとなった。

本節では B 外国人、C 外国人それぞれ成績区分ごとでの起用ポジションと役割について考察する。

第1項 B 外国人選手の起用ポジション

「選手登録データから見る外国人選手の配置」によれば、B 外国人はロック（LO）を中心に登録・起用される傾向が強い。D1 上位ほど 2m 超の LO を「選択と集中」で確保し、ラインアウトやセットピースを安定させる一方、D1 中下位や D2 上位では、SO（10 番）・NO8（8 番）・FB（15 番）といった複数ポジションに B 外国人を分散して投入する事例が見受けられた。これは、チームの戦術的成熟度や日本代表選手数、予算の違いによって、LO 特化か分散型かが左右されていると考えられる。

スタメン調査（第2節）でも、D1 上位クラブほど LO（4 番・5 番）に B 外国人を集約してセットプレー支配を狙い、中下位や D2 上位ほど、「足りないフィジカルや司令塔役を補完する」ために SO や NO8、FB へ B 枠を充てる分散型パターンを取る。獲得（A）と起用（B）の両面から見ると、B 外国人はもっぱら「ロックの高さ・パワー不足を埋める役割」を担いながら、チーム状況に応じて攻撃・守備を底上げする補強策にも活用されていた。以上から、B 外国人は LO 中心のフィジカル補強とでの起用と SO・NO8・FB のポジションに分散した獲得戦略をとっていた。

また、B 外国人の獲得経路を詳しく見ると、スーパーラグビー等で実績のあるベテラン即戦力（27～30 歳前後）と、大学や下部組織出身の育成型若手（23 歳前後）に大きく二分されていた。D1 上位ではベテラン LO を優先獲得し、即スタメン投入してセットピースを強化する傾向が顕著な一方、D2 上位など予算制約のあるクラブでは「原石」的な若

手 B 外国人を比較的安価に契約して長期育成する事例も散見される。

スタメンでも、2m 超 LO の即戦力を擁するチームはセットピースやコンタクト局面を大幅に安定させ、昇格争いや上位定着を有利に進めている。一方、若手 B 外国人を試合ごとに起用時間を伸ばしながら育てるチームもあり、成功すればコストパフォーマンスが高いメリットが得られる。要するに、B 外国人をどう組み合わせるかによってスクラム・ラインアウト強度や攻撃多様性が変わり、D1～D2 全体の競争力に影響を及ぼしていると言える。

以下に、成績区分ごとの起用の特徴を述べる。

1) D1 上位チーム

B 外国人選手は D1 上位チームではセットプレーの基盤を支える LO（4 番、5 番）に起用され、D1 中下位では LO（5 番）と SO（10 番）で起用されている。一方、D2 上位チームでは NO8（8 番）と FB（15 番）に限定して起用されており、それぞれの成績区分に応じた起用意図が見られた。

D1 上位チームでは、B 外国人選手が LO（4 番、5 番）に集中して起用されている点が特徴的である。LO は、スクラムやラインアウトといったセットプレーの基盤を支えるポジションであり、試合の安定性を確保する上で不可欠な役割を果たす。B 外国人選手が LO として起用されることで、フィジカル能力を活かしたラインアウトでのボール獲得やスクラムでの優位性が確保され、チーム全体の戦術的完成度が高まる。

また、D1 上位チームでは、日本代表や A 外国人選手が攻撃と守備の要となるポジションに配置されているため、B 外国人選手がセットプレーに特化した役割を果たすことで、チーム全体の戦力バランスを最適化している。この配置は、戦術的成熟度が高い D1 上位チームにおいて、B 外国人選手の特性を最大限に活かす戦略的な起用である。

2) D1 中下位チーム

D1 中下位チームでは、B 外国人選手が LO（5 番）と SO（10 番）に起用されている。LO（5 番）はセットプレーの安定性を確保する重要なポジションであり、B 外国人選手のフィジカル能力とセットプレースキルが試合の安定性を支える役割を果たしている。一方、SO（10 番）は、攻撃展開を組み立て、試合の流れをコントロールするポジションであり、B 外国人選手を配置することで、攻撃力と戦術的な補完が図られている。

D1 中下位チームでは、日本代表選手が少ないため、B 外国人選手が基幹ポジションで攻守両面の課題を補完する形で起用されている。この配置は、戦術的成熟度が十分でないチームが、試合の基盤を強化しつつ競争力を維持するための合理的な選択といえる。

3) D2 上位チーム

D2 上位チームでは、B 外国人選手が NO8（8 番）と FB（15 番）に起用されている。NO8 は、スクラム後方から攻撃を開始し、相手ディフェンスを崩す役割を担うポジションであり、フィジカル能力と判断力が求められる。B 外国人選手の NO8 起用により、攻撃展開の質が向上し、試合全体の流れをコントロールする能力が高くなっていた。FB（15 番）は、守備面ではキック処理やカウンターアタック対応を通じて最終ラインの安定性を

確保し、攻撃面では再カウンターの起点として得点機会を創出するポジションである。B 外国人選手を FB に起用することで、守備と攻撃の両面でチームの競争力を強化する意図が見られる。昇格後の D1 では、失点リスクを抑えつつ得点機会を増やすために、NO8 と FB への起用が合理的な選択となっていた。

第2項 C 外国人選手の起用ポジション

カテゴリ C 外国人選手の「ポジション別傾向」では、C 外国人が CTB（センター）、S O（10 番）、LO（ロック）に集中する傾向が3シーズン通じて安定していた。とりわけ D1 上位では CTB（13 番）への登録が群を抜いており、スタメンでも華やかな攻撃ポジションや守備統率が求められるところに C 外国人を配置し、攻守両面を飛躍的に強化していた。つまり、CTB・SO など攻守の要ポジションで即戦力スターを起用していた。

一方、D1 中下位や D2 上位クラブでは、フィジカル要件が不足しがちな LO や NO8 を C 枠で補完するパターンも見られる。いずれにせよ、C 外国人は世界的な競技経験や卓越した対人スキルを持つ即戦力スターとして、B 外国人以上にチームの戦い方に大きなインパクトを与えていた。

C 外国人の獲得には年俸など高いコストが発生しやすいが、一方で「トリプルミッション（競技力・財政基盤・ラグビー普及）の向上」に寄与するメリットがある。スタメンへの起用でラインブレイク力や守備統率力が飛躍的に高まり、マーケティング面では SNS やメディア露出、観客動員などに好影響を及ぼす例が多い。とりわけ D1 中下位や D2 のクラブは高額コストを支出してもスター選手 1~2 名を加えることで攻守の底上げを試みる“不足ポジションを少数精鋭の C 枠で埋める”戦略を選択していると考えられた。

高コストとスター性のバランスをどう取るかは、戦術面・経営面の両面でクラブにとって大きな課題となる。D1 上位ほど複数の C 外国人を同時に抱えるケースもあり、下位や D2 との格差拡大を生みやすい。一方、C 外国人が馴染まなかった場合のリスクも高く、コスト対効果を見極めるスカウティング力とチーム体制がますます重要になると考える。

スタメン調査結果から、特に、C 外国人選手は D1 上位、D1 中下位、D2 上位の各区分で異なるポジションに起用されており、それぞれのチームが課題を補完する形で C 外国人選手を配置していることが明らかとなったことをふまえて、成績区分ごとの起用の特徴を以下に述べる。

D1 上位チームでは、スタメン調査結果から 13 番（CTB）に C 外国人選手が配置されていることが特徴的である。CTB は、攻守の要としてラインブレイクや守備ラインの統率を担う重要なポジションであり、スーパーラグビーや欧州リーグで培ったスキルと戦術理解力を持つ C 外国人選手がその役割を果たしていると考えられる。

D1 上位チームでは、他のポジションに日本代表選手や A 外国人選手を起用することで、全体の戦術的完成度が高まっており、C 外国人選手は特に CTB のような攻守の中核となるポジションで即戦力として重要な役割を果たしている。この配置は、攻撃力の強化

と守備の安定性の両面を兼ね備えた戦略的な選択である。

D1 中下位チームでは、スタメン調査結果から NO8（8 番）に C 外国人選手が配置されていることが特徴的である。NO8 は、スクラムの後方から攻撃を開始する重要なポジションであり、フィジカル能力と判断力が求められる。D1 中下位チームにおける NO8 への C 外国人選手の起用は、攻撃展開を支えるとともに、フィジカル面での課題を補完する意図があると考えられる。

また、CTB（13 番）には A 外国人選手が配置されている一方で、SO（10 番）には B 外国人選手が起用されており、日本代表選手がスタメンのポジションは見られない。これは、D1 中下位チームが戦術的完成度の向上を目指しつつ、フィジカル能力と技術を兼ね備えた外国人選手を補完的に配置している状況を示している。

D2 上位チームでは、スタメン調査結果から 5 番（LO）に C 外国人選手が起用されている点の特徴的である。LO は、スクラムやラインアウトを安定させるセットプレーの中核的なポジションであり、昇格後の D1 でも競争力を維持するために重要な役割を担う。セットプレーを強化するために C 外国人選手を LO に配置することは、昇格を目指すチームにとって合理的な選択といえる。

また、D2 上位チームでは、日本代表選手が 6 番（FL）や 12 番（CTB）に起用される一方、C 外国人選手が LO（5 番）や SO（10 番）など多様なポジションに配置されている。この分散型補強戦略は、昇格後の D1 で幅広い戦術的課題に対応するために必要不可欠なアプローチであり、特定のポジションに集中するのではなく、全体的な競争力を底上げする意図が見られる。

第 2 節 B・C 外国人選手の役割と獲得方針

次に、これまでに在籍した B・C 外国人選手の背景および、前節での B 外国人、C 外国人の起用ポジションと役割をふまえた各成績区分での外国人選手の獲得方針について、B 外国人、C 外国人それぞれで考察する。

第 1 項 B 外国人選手の背景および役割と貢献

B 外国人選手は、他クラブからの移籍で獲得した選手の平均年齢が 27 歳である一方、大学やクラブチームから獲得した選手の平均年齢は 23 歳と、年齢に大きな差が見られた。

スーパーラグビーや他のトップリーグから獲得された選手は、フィジカル面や競技経験において高いレベルを誇り、短期的な競技力向上を目的とした選手として位置づけられていることが考えられる。このような選手は、C 外国人選手と同様に、限られた期間でチームに貢献する即戦力としての役割が明確であり、全体の登録割合においても多くの割合を占めている。特に、スーパーラグビー経験者は、200cm 級の体格や高度なセットピーススキル、そして戦術理解力を備えており、スクラムやラインアウトといったセットプレーの安定性向上に直結する。こうした選手は、フィジカル面でのピークに近い 27 歳前後の年

齢で獲得されることが多く、すぐに試合に貢献できる即戦力としての価値が高い。

ただし、このような選手は C 外国人同様に年俸などの人件費が高くなることが予想される。そのため、D1 中下位や D2 上位のような予算や戦力に課題があるチームにとって、身体的能力が求められるロックのポジションはある程度避けられないが、SO や FL などのポジションについては日本人選手の獲得に注力する方法も考えられる。これにより、外国人選手に頼りすぎることなくコストを抑えつつ、戦力を補完できる可能性がある。

また、2022 年以降、日本代表資格を得るための国内滞在期間が 3 年から 5 年に延長されたことにより、27 歳の選手が来日した場合、スーパーラグビー出身の選手が代表資格を取得する頃には 32 歳に達する。このため、スーパーラグビー経験者を日本代表候補としてではなく、主に短期的な戦力強化の意味合いが強いものと想定される。

一方で、日本の大学卒業選手や海外クラブチームの下部組織から獲得された若手選手は、長期的な視点での育成対象としての価値を持っている。このような選手は、将来的に日本代表資格を取得し、代表チームで活躍する可能性が高いだけでなく、国内リーグ全体の発展にも寄与する存在である。さらに、若手選手を育成することは、即戦力選手と比較してコスト面での負担が軽減される点もメリットとして挙げられる。育成型の選手は、短期的な競技力向上だけでなく、リーグ全体や日本ラグビーの未来を見据えた重要な戦略的資産となり得る。

また、比較的技術や経験が重視されないロックのポジションであれば、身体的能力を満たす選手であれば即戦力としての活用も期待される。一方で、他のポジションでは日本人選手や若手選手を活用することで、コストを抑えつつ、チーム全体のバランスを取ることが可能である。

第 2 項 B 外国人選手の獲得方針

成績区分により、B 外国人の活用では戦略が異なることが分かった。それぞれの区分ごとに戦略の特徴について述べる。

1) D1 上位チーム

D1 優勝を目指すチームでは、B 外国人選手の活用において「選択と集中」の戦略が重要である。D1 上位チームの B 外国人選手の平均登録人数は 5.9 人と少数精鋭である一方、LO（ロック）の登録割合が 40.2% と非常に高い割合を占めている（表 3）。このことから、優勝を目指すチームは特にセットプレーの安定性を担うロックのポジションに、即戦力となる B 外国人選手を重点的に配置する必要がある。

スーパーラグビーや他のトップリーグから獲得された選手は、セットピースにおけるスキルや戦術理解力を兼ね備えており、スクラムやラインアウトといった局面でチームに大きな優位性をもたらす。さらに、平均身長 198.1cm、体重 115.5kg という高いフィジカル能力（表 4）は、セットプレーの競争力を直接的に向上させる。こうした身体能力とスキルを持つ選手は、D1 優勝を目指すチームの戦術において不可欠な存在である。

限られた外国人枠を効果的に活用するためには、特にロックのようなチームの中核を担

うポジションに選手を集中させることが求められる。一方で、他のポジションでは日本人選手や A 外国人選手を積極的に起用することで、コストのバランスを保ちながらチーム全体の戦力を強化することが可能となる。このように、ロックを中心とした B 外国人選手の活用戦略を明確にすることが、D1 優勝を達成するための鍵となる。

2) D1 中下位チーム

D1 定着を目指すチームでは、B 外国人選手の獲得戦略として「分散型」の補強が求められる。D1 中下位チームの B 外国人選手の平均登録人数は 7.4 人と D1 上位チームの 5.9 人よりも多く、SO（スタンドオフ：10.5%）や WTB（ウィング：9.8%）といった攻撃的なポジションでの登録割合が高い（表 4）。これは、戦術的な成熟度が低いチームが、複数のポジションで戦力を補う必要があり、即戦力となる B 外国人選手を幅広く獲得していることを示している。

D1 定着を目指すためには、獲得する B 外国人選手の特徴がチームの戦術と補強の優先順位に直結する。まず、ロック（LO）のポジションでは、セットプレーを安定させるために 200cm 級の身体的能力を持つ選手が必要不可欠である。これに加えて、SO や WTB などのポジションでは、フィジカル面だけでなくスピードや戦術理解力を備えた選手を獲得することが求められる。こうした選手は、ゲームメイクや守備の強化に貢献し、試合の流れをコントロールする役割を果たす。

D1 中下位チームが獲得を検討すべき選手は、単一のポジションに特化した選手だけでなく、複数のポジションで活躍できる多機能性を持った選手である。たとえば、ロックとしてセットプレーを安定させながら、場合によってはフランカーとしても貢献できる選手は、獲得価値が高い。また、バックス陣では SO としてゲームを組み立てつつ、ディフェンスラインの統率も行える選手が理想的である。

さらに、D1 定着を目指すチームは、獲得する選手の多様性を重視しなければならない。特定のポジションに選手を集中させるのではなく、複数のポジションに分散して即戦力を補強することで、チーム全体のバランスを向上させることができる。このような戦略は、試合中の選手交代や不測の事態に対応する柔軟性を確保し、チームの競争力を安定的に向上させる。

一方で、B 外国人選手の獲得にはコスト面の課題も存在する。即戦力としての外国人選手は、年俸などが高額になる傾向があるため、身体的能力が絶対条件となるロックのポジションでは外国人選手を優先的に獲得しつつ、SO や WTB といったポジションでは可能な限り日本人選手の活用や育成を検討することが、コストパフォーマンスの向上に寄与する。

総じて、D1 定着を目指すチームは、セットプレーを安定させるロックの補強を基盤としながら、攻撃や守備で即戦力となる B 外国人選手を複数ポジションで獲得する必要がある。また、チーム全体の戦力不足を補うためには、複数のポジションでの活躍が期待できる選手をターゲットとし、選手層を厚くすることが重要である。このような多角的な獲得戦略により、D1 での安定的な成績維持を可能にする基盤を構築することが期待される。

3) D2 上位チーム

D1 昇格を目指すチームにとって、B 外国人選手の獲得は昇格の成否を左右する重要な戦略である。D2 上位チームの B 外国人選手の平均登録人数は 6.9 人と D1 中下位に次いで多く、特に LO（ロック：20.5%）や CTB（センター：9.1%）といった、セットプレーや攻守の要となるポジションへの集中が顕著である（表 5）。この配置は、昇格に必要な基盤強化を目指すチームが、試合の中核となるセットプレーの安定性と攻守のバランス確保を最優先事項としていることを反映している。

昇格を目指すチームがまず獲得すべき選手として挙げられるのは、身体能力に優れたロックの選手である。特に 200cm 級の体格を持ち、スクラムやラインアウトで優位性を発揮できる選手は、セットピースの安定性を確保する上で不可欠である。D1 ではセットプレーの競争力が試合全体の流れを左右するため、こうした選手を確保することが昇格後の競争力維持にも直結する。また、CTB（センター）のポジションでは、攻守両面で貢献できる選手が求められる。特に、ラインブレイク能力や守備の堅実さを持つ選手は、D2 上位チームが D1 で戦うための競争力を大きく向上させる。

B 外国人選手の獲得において、昇格を果たすだけでなく、その後 D1 に定着することを見据えた補強が必要である。セットピースの安定性を支えるロックの補強は最優先事項であり、これに加えて、攻守の中核を担う CTB の補強がチームのバランスを整える鍵となる。こうした選手を確保することで、昇格後の試合で D1 上位や中下位のチームと渡り合える戦力基盤を築くことができる。

さらに、コスト効率を考慮した選手獲得も重要である。即戦力となるスーパーラグビーや他国のトップリーグ出身の選手は、年俸が高額になる可能性があるため、獲得対象を慎重に選定する必要がある。一方で、日本の大学や海外クラブの下部組織から育成型選手を獲得することは、コストを抑えるだけでなく、長期的な視点でチームの基盤を強化する有効な手段となる。育成型選手は、D1 昇格後に成長して即戦力となる可能性が高く、予算の限られた D2 上位チームにとっては特に有益である。

また、昇格を目指すチームにとって、獲得する選手の多様性を確保することが重要である。特定のポジションに偏った補強ではなく、複数のポジションに対応できる選手を獲得することで、試合中の選手交代や不測の事態にも柔軟に対応できるチームを構築できる。たとえば、ロックとしてセットピースを支えながら、フランカーとしてもプレーできる選手や、CTB として攻守に貢献しつつ SO（スタンドオフ）としてゲームメイクも可能な選手は、特に価値が高い。

最終的に、D1 昇格を目指すチームが成功するためには、短期的な昇格を目標とする即戦力の確保と、長期的な成長を視野に入れた育成型選手の獲得をバランスよく組み合わせる必要がある。このような戦略を実行することで、昇格後に D1 で安定的な成績を残す基盤を築き、競争力を維持することが可能となる。

第3項 C 外国人選手の背景および役割と貢献

C 外国人選手は、スーパーラグビーや欧州のトップリーグ（例：プレミアシップ、トップ14）といった国際的な競技環境で培った高度な競技力と戦術理解力を持つ選手が中心である。成績区分に関わらず、D1 上位、D1 中下位、D2 上位の全チームが平均して3人程度のC 外国人選手を獲得しており（D1 上位2.9人、D1 中下位2.8人、D2 上位2.9人、表2）、C 外国人選手の獲得がリーグ全体で戦力補強の重要な位置を占めていることが分かる。

C 外国人選手の獲得人数が各成績区分で大きく変わらない背景には、彼らが即戦力としての役割を担い、攻守の中核となるポジションでの競争力向上に寄与することが挙げられる。特に、CTB（センター）への集中度が高く、D1 上位チームでは登録割合が45.5%に達している（表3）。また、LO（ロック）やSO（スタンドオフ）といった重要なポジションでもバランスよく獲得されており、全チームが戦術上不可欠なポジションにC 外国人選手を配置していることが分かる。このように、C 外国人選手の獲得は特定の成績区分に偏るのではなく、どのチームにおいても即戦力としての重要性が認識されており、各チームが限られた人数で最大限の効果を得る戦略をとっていることが示されている。

ただし、C 外国人選手の獲得には高額なコストが伴い、年俸がチーム運営の負担となる場合もある。それでも、リーグワン全体の競技力向上やチームの短期的な成功を目指すためには、限られた人数であってもC 外国人選手の獲得は重要な戦略といえる。

C 外国人選手の獲得にはコストが伴うが、その価値は即戦力としての貢献だけでなく、チーム内での技術移転や若手選手の成長促進など、波及効果の面でも非常に高い。こうした戦略的な獲得は、リーグ全体の成長と競争力維持の鍵となっており、日本ラグビーの発展にとっても欠かせない要素といえる。

第4項 C 外国人選手の獲得方針

成績区分により、C 外国人の活用では戦略が異なることが分かった。それぞれの区分ごとに戦略の特徴について述べる。

1) D1 上位チーム

D1 優勝を目指すチームでは、C 外国人選手の中でもCTB（センター）の補強が最優先課題となる。結果から明らかなように、D1 上位チームにおけるC 外国人選手のCTB 登録割合は45.5%と非常に高く（表3）、他のポジションを大きく上回る割合を占めている。このデータは、CTB がC 外国人選手の高度な競技力と戦術理解力を活かす最適なポジションであり、攻守両面でチームの中核を担う役割を果たしていることを示している。CTB は、攻撃面でラインブレイク能力を発揮して相手ディフェンスを崩壊させ、守備面では相手エースを抑止する役割を担い、試合全体の流れを支配するポジションである。このため、D1 上位チームではスーパーラグビーや欧州リーグ（プレミアシップ、トップ14）など、世界トップレベルの競技環境で活躍してきた選手を優先的に獲得している。これらの

選手は、フィジカル能力に加えて、戦術理解力や技術、国際試合での豊富な経験を兼ね備えており、その全てが D1 優勝を目指すチームにとって不可欠な資産となる。

さらに、こうした世界的に実績のある選手の獲得は、単なる試合勝利に留まらず、ラグビーの普及や資金調達といった「トリプルミッション」を実現するための好循環を生み出す点でも重要である。世界的に知名度の高い選手が加入することで、試合への注目度が高まり、ファンの期待感やスタジアム動員数の増加につながる。また、彼らのプレーは既存ファンの満足度を高めるだけでなく、新規ファンの獲得にも寄与する。スポンサーにとっても、こうした選手の存在は大きな魅力を持つ。選手が持つブランド力や発信力はスポンサー企業のイメージ向上やプロモーション効果を強化し、新規スポンサー契約の獲得や契約金額の増加に寄与する可能性が高い。このような好循環により、チームの競技力向上だけでなく、財務基盤の強化やラグビーの普及促進にも大きな影響を及ぼす。

ただし、こうした世界トップレベルの選手を獲得するには、年俸などの高額なコストが伴う点も否めない。しかし、D1 優勝を目指すチームにとって、このような投資は他チームとの差を広げるための戦略的な判断であり、試合の勝敗だけでなくチーム全体の発展において不可欠な要素である。CTB への集中補強によって攻守両面での安定性を確保し、試合全体の流れを支配する基盤を構築することは、D1 優勝を実現するために欠かせない要素であることが考えられる。

2) D1 中下位チーム

D1 定着を目指すチームにとって、C 外国人選手の獲得戦略は複数のポジションに即戦力を分散させることができていた。D1 中下位チームにおける C 外国人選手の登録割合を見ると、CTB (20.0%) と LO (16.0%) が特に多い (表 4) ことから、D1 中下位チームが戦術的な課題を補うために、特定のポジションだけでなく複数のポジションで戦力を強化する必要性を示している。

CTB では攻撃の基点となる役割と守備の安定化が期待される。具体的には、攻撃面ではラインブレイクやパスによる展開力を活かし、得点機会を創出する役割を担う。一方、守備面では相手エースプレーヤーを抑えるなど、ディフェンスラインの安定化に寄与する重要なポジションである。C 外国人選手の CTB 登録割合が D1 中下位で高い理由は、こうした攻守のバランスを確保する必要性にある。

一方で、LO はセットプレーの強化を目的とした補強が行われている。LO の登録割合は 16.0% と CTB に次いで高く、スクラムやラインアウトといったセットプレーの安定性を確保するために重要なポジションとなっている (表 4)。特に、D1 中下位チームではセットプレーでの競争力が試合全体の安定性に直結するため、フィジカル能力が高い C 外国人選手を LO に配置することは、戦術的な完成度を補う上で重要な戦略である。

この分散型補強戦略は、チーム全体の戦術的な成熟度が十分でない D1 中下位チームにとって有効である。特に、リーダーシップを発揮できる C 外国人選手の獲得は、戦術面での成熟度を向上させる効果が期待される。たとえば、CTB においては攻撃と守備の両面でチーム全体を牽引するリーダーとしての役割が求められる。また、LO においてもセット

プレーでの安定性をもたらし、試合の基盤を支える重要な存在となる。

さらに、セットプレーでの安定感を重視した LO の補強は、チームの安定性を支える基盤となるだけでなく、他のポジションでの負担軽減にもつながる。たとえば、ラインアウトでのボール供給が安定することで、バックス陣がより戦術的な自由度を持つことが可能となる。このように、LO の補強は直接的なセットプレーの強化だけでなく、チーム全体のプレーの質を向上させる波及効果も期待される。結果として、D1 定着を目指すチームは、CTB と LO の分散型補強を通じて、攻守両面でのバランスを整え、チーム全体の戦力を底上げすることが可能となる。この戦略は、短期的な成績向上だけでなく、中長期的な戦術的成熟度の向上にも寄与するものであり、D1 定着の重要な要素となっていた。

3) D2 上位チーム

D2 上位チームにおける C 外国人選手の獲得は、特定のポジションに偏らず、全ポジションで分散して即戦力を補強する戦略が取られていた。LO や SO（それぞれ 19.2%）が重要な補強対象となる一方で、FB（フルバック）、FL（フランカー）、WTB（ウィング）といったポジションでも補強が行われており（表 5）、チーム全体の競争力を底上げする狙いがあることが考えられる。

特に SO が D2 上位で高い登録割合を示していることは、D2 上位チームが試合の流れをコントロールし、攻撃の基点を強化する必要性を示している。SO は、試合全体の司令塔としての役割を担い、ゲームメイクや攻撃展開の組み立てを通じてチームの攻撃力を大きく左右するポジションである。D2 上位チームが昇格後の D1 で戦うためには、攻撃の質を向上させるだけでなく、試合の主導権を握るための SO の存在が不可欠である。

FB（フルバック）は、守備と攻撃の両面でチームに安定性をもたらすポジションであり、D2 上位チームが昇格後の失点リスクを抑えるために C 外国人選手を補強する重要なターゲットとなる。FB は守備面でのキック処理やカウンターアタック対応といった最終ラインの役割を担う一方、攻撃では再カウンターの起点として機能する。C 外国人選手を FB に配置することで、守備の安定性が向上するとともに、攻撃への切り替えがスムーズになり、試合の流れを有利に進める効果が期待される。特に、スーパーラグビーや欧州リーグで培った技術とキックスキルを持つ選手を FB として獲得することで、守備と攻撃のバランスが整い、昇格後の D1 でも競争力を維持できる。

FL（フランカー）は、守備面での運動量や接点での強さが求められるポジションであり、D2 上位チームにおいて C 外国人選手を補強する意義がある。特に、接点でのスキルやフィジカル能力を持つ選手を FL として獲得することで、守備の安定性を向上させるとともに、試合全体のテンポを高めることが可能となる。FL の補強は、昇格後の D1 で速い展開の試合に対応する上で効果的であり、攻守両面で貢献できる C 外国人選手の獲得が、試合の競争力向上に直結する戦略的な選択といえる。

WTB（ウィング）は、攻撃力とスピードを強化する目的で補強が行われるポジションであり、D2 上位チームでは C 外国人選手を WTB に配置することで、得点力向上を目指している。WTB は、外側のラインで相手ディフェンスを突破し、得点機会を創出する役割

を担うポジションである。C 外国人選手を WTB に配置することで、攻撃の幅を広げ、試合の流れを変えるスピーディな展開が可能となる。このような補強は、昇格後の D1 での得点力を向上させ、強豪チームとの試合でも得点機会を増やすための重要な戦略である。

第3節 カテゴリー別の起用ポジションと役割

これまで、B・C 外国人選手を中心に論じてきたが、B・C カテゴリー選手は同時に 4 人までしか、ピッチ内に入ることができないことを考慮すると、日本人選手または A 外国人の強化は必須である。今一度、日本人選手、A 外国人、B 外国人、C 外国人がどのように役割を分担し、戦術的な課題を補完しているか、さらには各カテゴリーのリソース配分とチーム戦略について考察する。

第1項 日本人

日本人選手は、成績区分を問わずチームの基盤を支える存在として機能している。特に、D1 上位チームでは、PR (1 番)、HO (2 番)、PR (3 番)、FL (6 番)、SH (9 番)、SO (10 番)、CTB (12 番)、WTB (14 番)、FB (15 番) といったポジションに日本代表選手が配置されており、高度な戦術理解力と安定したパフォーマンスでチームの中心的な役割を果たしている。このような日本代表選手を基盤とする構成は、D1 上位チームの戦術的完成度を高める鍵となっている。

一方、D1 中下位チームや D2 上位チームでは、日本代表選手の割合が少なく、一般的な日本人選手が主力となるポジションが多い。D1 中下位チームでは、日本人選手が 10 のポジションを占めており、特にセットプレーや攻撃展開での役割が求められている。D2 上位チームでも、日本人選手は全体の基盤を支え、昇格後の競争力を確保するための重要な役割を果たしている。

第2項 A 外国人

A 外国人選手は、特に攻守の中核を担うポジションに配置され、チームの戦力を補強する役割を果たしている。D1 上位チームでは、NO8 (8 番) や CTB (12 番) に日本代表の A 外国人選手が起用されており、攻撃展開や守備の安定性を支える役割を果たしている。NO8 では、スクラム後方からの攻撃展開や接点での強さが求められ、フィジカル能力が高い A 外国人選手が理想的な選択となっている。

D1 中下位チームや D2 上位チームでは、A 外国人選手が FL (6 番) や CTB (12 番) といった攻守両面で重要な役割を担うポジションに配置される傾向がある。特に D2 上位チームでは、日本代表の A 外国人選手が昇格後の競争力維持を見据えた補完的な役割を果たしている。このように、A 外国人選手は、日本人選手が担う基盤の上に攻守の質をさらに高める存在として機能している。

第3項 B 外国人

B 外国人選手は、セットプレーの安定性や攻撃展開の基盤を強化する役割を担っている。D1 上位チームでは、LO（4 番、5 番）に起用され、スクラムやラインアウトといったセットプレーの基盤を支える役割を果たしている。B 外国人選手のフィジカル能力とセットプレースキルは、D1 上位チームが戦術的完成度を維持するために不可欠である。

D1 中下位チームでは、SO（10 番）や LO（5 番）といった基幹ポジションに起用され、攻撃展開や試合の流れをコントロールする役割を担っている。SO ではゲームメイク能力が求められ、B 外国人選手が配置されることで、攻撃の質が向上している。一方、D2 上位チームでは、NO8（8 番）や FB（15 番）に B 外国人選手が起用され、攻守両面での基盤強化を目的とした役割を果たしている。

第4項 C 外国人

C 外国人選手は、スーパーラグビーや欧州リーグでの経験を活かし、即戦力としてチームの攻守の中核を担う役割を果たしている。D1 上位チームでは、CTB（13 番）に起用され、攻守両面での中核としてラインブレイクや守備ラインの統率を担う重要な役割を果たしている。この配置は、D1 上位チームの高度な戦術的成熟度をさらに引き上げる選択といえる。

D1 中下位チームでは、NO8（8 番）に C 外国人選手が起用され、フィジカル面や攻撃展開を支える役割を担っている。また、D2 上位チームでは、LO（5 番）に C 外国人選手が配置され、セットプレーの安定性を確保する目的で起用されている。C 外国人選手は、即戦力として日本人選手や A 外国人選手では補えない戦術的な課題を補完する役割を担っている。

第5項 A・B・C のリソース配分とチーム戦略

総合すると、成績区分別に基本モデルがあるといえる。D1 上位クラブは国内選手（日本代表・A 外国人含む）で PR・HO・FL・SH・FB の基盤を固め、LO に B 外国人を当ててセットピースを制圧し、NO8（8 番）や CTB（12 番）も A 外国人で安定度を高める。そのうえで 13 番 CTB や WTB に C 外国人を配置し、攻撃力・守備統率力を一気に引き上げる“完成形”モデルを取りやすい。

D1 中下位は LO（5 番）や SO（10 番）を B 外国人に頼り、NO8（8 番）を C 枠で補強し、国内育成選手で埋められない穴を多国籍の力で埋める分散型モデルが多い。D2 上位はロック（LO）を B 外国人で安定化させ、SO や FB に C 外国人を投下して昇格を狙い、A 外国人とも併用してコストと戦力のバランスを図る戦術が確認される。

スタメン分析（B）からも、LO・NO8 での外国人（B/C）依存度が高いのは身体サイズとパワー不足を埋めるためであり、CTB や WTB に C 枠を加えるほど観客動員や試合の華やかさが高まる。A 外国人や日本代表は連携力・安定感を提供し、日本人が大勢を占

めるポジション（SH・フロントロー・FB など）と繋げることでチーム力を高める形が見て取れた。

D1 上位ほど多くの代表クラスを抱え、B 枠 LO + A 外国人 + C 枠スターという“三重構造”を完成させ、中下位や D2 上位は限られた予算や選手数で最適なリソース配分を模索しているのが現状である。いずれの場合も、ロック（LO）をどのように外国人枠で補うかが大きなカギとなっていた。

以上より、リーグワン発足から 3 シーズンの取り組みでは、C 外国人選手を中心に世界のトッププレーヤーが集まり、リーグ全体の競争力を高めていることが確認された。たとえば、D1 優勝を争うトップチームには、日本代表選手に加え、スーパーラグビーやオールブラックスなどで活躍した世界的スター選手が在籍しており、リーグの競技レベルと注目度の向上に大きく貢献している。また、戦力が劣る D1 中下位や D2 上位のチームでも、外国人選手の効果的な活用によって上位進出を目指せる可能性があり、外国人選手の存在がリーグ全体の活性化を促進に寄与すると示唆された。

第 4 節 D1 上位チームのスタメン起用の変化と日本人選手の育成

上位 6 チームのうち、東芝とサントリーでは C 外国人のスタメン起用が日本人起用への変化があった。

まず、東芝では SO の起用の変化である。FB 日本人は SO のポジションで活躍していたキャリアもある選手であったが、オールブラックス出身の強力な C 外国人 SO が在籍していたことから、FB で起用されていた。C 外国人選手が活躍していた 21-22、22-23 シーズンは FB としてほぼ全試合に出場していたが、この選手が負傷した 23-24 シーズンは SO として起用されるようになり、SO の C 外国人起用率が下がる中でも、チームの戦力を保つ貢献をしていた。この背景には、ことから、SO の C 外国人のとの連携のトレーニングを通して、SO の能力を高めていたことが推察される。そして、この日本人選手は日本代表へも選出された。以上をふまえると、世界の一流と日々トレーニングすることが若手選手の育成に大きな貢献をしていると示唆される。

一方、サントリーではダミアンマッケンジーとアーロンクルーデンの存在に注目したい。彼らはリーグワン以前のトップリーグ時代からサントリーに在籍し SO として活躍していた。彼らに SH としてボールを渡していたのが、日本代表選手になった、流 大選手であり、フランスリーグで活躍している斎藤直人選手である。SO と SH は一緒にトレーニング、連携することから、C 外国人選手から多くの技を学び、育ったことが容易に想像できる。さらに、サントリーでは 23-24 シーズンから日本人 SO の起用が増えていること考えると、超一流選手がチームにいて、戦術の広がりや各選手の技術が上がり、戦力強化に寄与し、密に連携するポジションの日本人選手の育成、個々の成長につながると推察される。

これは、J リーグの開幕当時に多くのスタープレイヤーが日本でプレーしていた状況にも似ている。強豪国で活躍したあとに日本のチームに在籍することを選ぶ C 外国人選手が

リーグへの関心を高めるだけでなく、日本人の強化への貢献が大きいことも認識すべきである。スタメン起用はもちろんであるが、C 外国人がもつ経験、技が日本人にも共有されることは日本のラグビー発展にも大きく寄与するだろう。

ところで、サッカーでは三苫薫選手などのように、日本リーグを経て、世界のトップリーグで大活躍している選手がいる。ラグビーにおいても五郎丸歩選手をはじめ世界のリーグで活躍した選手はいるが、サッカーのように選手排出国には至っていない。今後の C 外国人は戦力だけでなく育成においても多くの役割を持つことを認識し、彼らの世界の技を活用することが、リーグワンが世界最高峰のリーグへと一層の飛躍を遂げるための足掛かりとなると考える。

第5節 リーグワンの今後の展望

第1項 体格差を克服した日本人選手の登場

本研究では、外国人選手を起用したフィジカル強化がリーグワン（以下、LW）の短期的な競争力向上に寄与している点を示してきたが、近年では 190～195cm 級の日本人ロック（LO）が D1 上位でレギュラーを務める例が少しずつ増えている。さらに、スクラムハーフ（SH）やスタンドオフ（SO）といったスキル系ポジションにおいても、日本人プレーヤーが世界水準に近づきつつある現象が散見される。本項では、このような日本人選手が体格面のハンデを克服した場合に生じる意義を二つの観点から考察する。

まず、大型選手を含む日本人プレーヤーが安定してリーグの主軸を担えるようになれば、現在の外国人（B・C）選手によるフィジカル強化が“必須”という図式から脱却しやすくなる。とくに LO のように 2m 前後のサイズが不可欠なポジションで日本人レギュラーが定着すれば、クラブはコスト高や外国籍選手の移籍リスクを軽減できるのみならず、タイトな外国人枠の運用にも余裕が生まれるだろう。

また、BK（バックス）における日本人選手の技術・スピードが海外勢と互角に戦えるレベルへ成長すれば、攻守の要となる CTB（センター）や WTB（ウィング）などで外国人に依存しなくても高いパフォーマンスを発揮できる可能性が高まる。すでにスクラムハーフ（SH）やフロントロー（PR・HO）で日本人選手が身体的課題を克服し始めている事例は、「外国人選手が当たり前」の固定観念を変えつつあるといえる。

このような国内選手の台頭は、リーグ全体が“外国人のフィジカルに頼る戦略”から徐々にシフトし、クラブとしても長期的な人材育成を重視する方向へと変わる契機となる。短期的には海外トッププレーヤーを招聘しつつも、国内選手の育成を加速することで、結果的に代表候補の層を厚くし、日本ラグビー全体の国際競争力向上にもつながると考えられる。

日本人選手が大型化し、LO や CTB といった身体能力を要するポジションでも主力を担えるようになると、クラブ側には大きなメリットが生まれる。一つは、財政的負担の軽減である。優秀な外国人選手の補強には年俸など高コストが伴うため、大型日本人プレーヤー

一を確保できれば、必ずしも高額の外国籍ロックやCTBを複数名招く必要がなくなり、クラブ経営の安定化に直結する。すでにJリーグなど他競技で実証されているように、国内選手の主体的な成長が進めば、海外スター依存の人件費構造から脱却しやすくなるだろう。

もう一つは、地域との結びつきをより強固にできる点である。地元育ちの大型選手がLOやBKの花形ポジションで活躍すれば、地元ファンにとっては“自分たちのスター”を応援できる喜びが増し、クラブの集客やスポンサー獲得にも好影響を及ぼす。特に、外国人選手の契約更新や移籍リスクが絶えない中、地域出身の日本人選手は長期的なチームビルディングを支える存在として、クラブのアイデンティティを強化する重要な役割を果たす。

このように、日本人選手の体格向上は財政面と地域密着の両側面で「国産選手主体リーグ」への移行を後押しし、リーグワンがサッカーやバスケットと同等に長期的な運営を行ううえでの基盤構築につながる。すなわち、外国人スターの呼び込みと日本人選手の大型化を両輪で進めれば、より持続的なリーグ運営モデルが確立できる可能性が高いと考えられる。

さらに、背景で述べたように世界の強豪国にくらべて日本代表選手は必ずしも思っている体型、フィジカルではない状況になっていることが分かった。また、特定のポジションではあるが、リーグワンや日本代表に求められる身長、体重に一定の見解が得られたことから、この基準を満たす選手を他競技もふくめてリクルーティングしていくことが今後のリーグワンのチーム強化には必要になると考える。

一方で、世界の基準と比較すると、体重をいかに増やすかという課題があることが分かった。ラグビーに必要なスピード、身長さらには体重を備える選手の育成が日本人選手の体格差を解消するうえでの重要な要素となる。

以上のように、日本人選手が体格差を克服することは、現在の外国人依存モデルから“ハイブリッド型”に移行する重要な契機となる。短期間で目覚ましい効果をもたらすスター外国人の起用は、当面は不可欠な戦略であるものの、育成年代の環境整備と大型選手の早期発掘・育成が進めば、クラブ経営や地域密着にとってもプラスとなる条件が整う。LW黎明期における外国人頼みを“今しかできない一時的施策”と捉え、将来的には国内選手が中核を担うリーグへの道筋を描くことが、競技力・財政健全性・地域振興の三立を達成するうえで不可欠な視点であるといえる。

第2項 リーグとしての成長・発展

本研究では外国人選手の登録・起用動向を中心に考察したが、実際にはクラブ間の予算格差が外国人獲得・維持を大きく左右している現実がある。サラリーキャップ（年俸総額制限）やドラフト制度の有無はリーグ全体の戦力均衡に大きく関わるが、日本の企業スポーツ文化や選手の就職事情を踏まえると、欧米型のシステムを直ちに導入するのは難しい。この点は「外国人選手の大量集約が格差を広げる」という問題意識と密接に関連し、

今後のリーグ改革やクラブ経営において重要な争点となるだろう。

また、ライセンス制度の厳格化が進めば、スタジアムや財務基盤の整わない下位クラブは昇格資格を得られず、外国人（特に C 枠スター）を獲得しても長期的にリーグ上位へ定着できないリスクがある。運営強化と競技力強化を両立しなければ持続的発展は望めないため、ロック（LO）を中心に外国人依存を続けるだけでなく、国内選手の育成や地域密着を強化していくことが不可欠である。

日本代表強化の成功は、ラグビー独自の国籍ルールを活用した点が大きく、黎明期のリーグワンでも外国人選手の活用が重要である。一方、Jリーグは黎明期に世界トップ選手が多く在籍していたが、30 年を経て日本人選手が中心となり、世界に選手を輩出するリーグへと成長した。外国人選手の活用は人件費の増加を伴うため、リーグワンでも外国人選手が主力を担うポジションに日本人選手が台頭することは、チーム経営においてはコストを抑えた強化だけでなく、代表強化にも繋がる点で大きな意義を持つ。かつて外国人選手が中心だったフロントローや SH では、日本人選手が身体的課題を克服し、代表クラスとして活躍する事例が増えている。LO や CTB といったポジションでも、他競技のタレント発掘例を参考に、身長の高い日本人選手の発掘・育成を進めることで、同様の可能性が期待される。

第 6 節 研究の限界と今後の展望

本研究は、リーグワンにおける 21-22～23-24 シーズンを中心にした外国人選手（B・C）登録・起用データと、日本代表・A 外国人・日本人選手との組み合わせの動向を分析した。しかし、選手年俸は公表されていないため、正確なコストパフォーマンスの評価には限界がある。さらに、クラブごとの育成プログラムやアカデミー連携状況、スカウティング手法なども外部から把握しきれていないため、「外国人選手の獲得とチーム成熟度の因果関係」については推測の域を出ない部分がある。

今後は、サラリーキャップやドラフト制度、ライセンス要件などのリーグ運営改革が具体化し、選手獲得・登録ルールが大きく変わる可能性がある。これにより、外国人選手の集中度や日本人 LO・BK の成長機会が再編され、チーム編成のパターンが変化する見通しもある。したがって、新制度下でのクラブ運営や選手移動の実態をフォローアップし、データを蓄積することが、今後のリーグワンにおける「外国人選手と日本人選手の最適活用モデル」をより深く解明するうえで不可欠となる。

第5章 結論

本研究は、リーグワンにおけるカテゴリ B および C 外国人選手の獲得・起用状況分析の結果、リーグワン設立から 3 シーズンで、B 外国人は身体能力が求められる LO、C 外国人は得点源や戦術の中核を担う CTB や SO でスタメン起用されていることが多かった。特にこの起用方法は、リーグワンの優勝をねらう上位 6 チームで強くみられていた。

リーグワン発足から 3 シーズンの取り組みでは、C 外国人選手を中心に世界のトッププレイヤーが集まり、リーグ全体の競争力を高めていた。たとえば、D1 優勝を争うチームには、日本代表選手に加え、スーパーラグビーやオールブラックスなどで活躍した世界的スター選手が在籍しており、リーグの競技レベルと注目度の向上に大きく貢献していた。また、戦力が劣る D1 中下位や D2 上位のチームでも、外国人選手は効果的な起用が各チームで行われており、外国人選手の存在がリーグ全体の活性化を促進に貢献していた。

一方で、2021-22 シーズンに B 外国人が主にスタメンを担っていた LO で、2023-24 シーズンには J や JD の起用が増加するなど、一部ポジションで日本人選手 (J、JD) の台頭が顕著になりつつある。他のポジションでも日本人選手の活躍が見られ、プロップ(PR)、スクラムハーフ(SH)およびスタンドオフ(SO) フルバック(FB)といったポジションでは外国人選手から日本人選手の起用割合がふえていた。これらの背景にはとくに代表を引退している、他国のリーグを経験し引退間際の 2 つ目のリーグとしてリーグワンを選んだ C 外国人の影響が大きい。C 外国人選手と同じチームで練習することで一流の選手の技を身に着けることができ、結果としてそれはレギュラー奪取へとつながっていた。

以上をふまえると、リーグワンの各チームは 1 部昇格、定着、優勝の各発展段階で LO や CTB、SO というポジションを中心に B・C 外国人選手を起用し、とくに C 外国人選手で代表を引退している選手の活用はチームの強化、若手選手の育成に貢献し、その結果として日本代表選手の育成にもつながると示唆された。このように外国人選手の活用と日本人選手の育成が同時に進むことは、クラブ経営の安定とリーグブランドの確立、リーグワンが世界最高峰のリーグへと一層の飛躍を遂げるためには不可欠な取り組みになる。

謝辞

本研究の取りまとめにあたり、多くの方々から温かいご支援とご指導を賜りました。まず初めに、平田教授には心より感謝申し上げます。教授はお忙しい中、私の研究に真摯に向き合い、的確なアドバイスと励ましの言葉を惜しみなく与えてくださいました。ゴルフのプレー中や道中で交わした論文談義は、私にとってかけがえのない時間と思い出であり、楽しくも濃密なひとときでした。振り返れば、この一年は本当にあっという間であり、人生でこれほど挑戦に満ちた時期も他にありませんでした。私自身、ラグビー漬けの日々を送ってきたため学びの経験は多いとは言えず、大学院入学は人生でも最も大きなチャレンジの一つでした。しかし、平田先生のご指導と温かい後押しのおかげで、なんとか完走することができ、本当に感無量です。常に伴走者として支えてくださった教授のご厚情に報いるべく、今後もさらに研鑽を積んでまいります。

また、中村好男先生、児玉ゆう子先生、並びに畔蒜洋平先生には、副査として多くの貴重なご意見とご助言を賜りました。先生方の専門的な視点からのご指摘は、論文の質を高めるうえで大変重要な糧となりました。深く感謝申し上げます。

さらに、所属企業においては、社内留学制度の利用や柔軟な勤務体制の調整など、実務と研究の両立を全面的に支援していただきました。もし企業の理解あるサポートがなければ、本研究をここまで進めることは難しかったと感じております。企業の寛容かつ力強いサポートがあったからこそ、研究に専念できましたことを心より感謝申し上げます。

家族にも特別な感謝を捧げます。特に中学受験を控えた長男と勉強机を並べる時間は、普段はなかなか取れない親子の対話を増やすとともに、私自身の研究意欲を大きくかき立てる励みともなりました。家族が私の挑戦を理解し、温かく見守ってくれたことが何よりも大きな支えであり、一年間をあっという間に感じたのも、この心強い後ろ盾のおかげだったと痛感しております。

そして、平田ゼミに所属する大学院生（社会人修士・学生修士）を含む同期の皆様にも、深い感謝を申し上げます。研究活動の補助や資料作成、日々のディスカッションを通じて得られた知見や気づきは、私の研究を前進させる原動力でした。互いに課題を議論し、励まし合うなかで育まれた友情は何にも代えがたい宝物です。この一年は本当に短く、そして濃密で、一瞬一瞬がかけがえのない学びの場となりました。今後も本研究を通じて得られた学びや経験を糧に、一層の成長を目指してまいります。

最後になりましたが、ここに名を連ねきれない方々も含め、多くの方々の支えが私の学びを充実したものにし、挑戦を後押ししてくださいました。皆様とのご縁とご指導に、改めて心から感謝申し上げます。これからも日々研鑽を重ね、ラグビーや研究活動を通じて培った力を社会に還元できるよう、一層努力を続けてまいります。ありがとうございました。

参考文献

- Noll, R. (2002). The economics of promotion and relegation in sports leagues. *Journal of Sports Economics*, 3(2), 169-203.
- Jasina, J., & Rotthoff, K. W. (2009). A model of promotion and relegation in league sports. *Journal of Economics and Finance*, 36(2), 303-318.
- Roşca, V. (2010a). The rugby coach and his three roles in the management of a rugby team. *Management and Marketing*, 5.
- Roşca, V. (2010b). Knowledge management in the rugby team: A factor of England's 2003 rugby world cup success. *Management and Marketing*, 5.
- Roşca, V. (2010c). Influential factors in the managerial task of setting objectives for rugby team: Important aspects for the rugby manager in the process of planning the road to sporting success. *Management and Marketing*, 11, 656-665.
- Cole, J. R., & Martin, A. J. (2018). Developing a winning sport team culture: Organizational culture in theory and practice. *Sport in Society*, 21(10), 1204-1222.
- Hall, E., Gray, S., Martindale, A., Sproule, J., Kelly, J., & Potrac, P. (2021). Doing hybrid management work in elite sport: The case of a head coach in top-level rugby union. *Sport Management Review*, 24(3), 271-296.
- 五郎丸歩. (2021). 英仏米のプロラグビーリーグから見たリーグワンの成長策. 早稲田大学修士論文.
- 日本ラグビーリーグワン公式サイト. <https://league-one.jp/>, (閲覧日 2025 年 1 月 9 日)